

**2022年度
授業の自己評価報告書**

奥羽大学 歯学部

2022年度 授業の自己評価報告書科目一覧

学年	授 業 科 目	科 目 責 任 者	頁
1	統計数学	菊地尚志	1
1	情報リテラシー I	古山昭	2
1	英語基礎	長峯英樹	3
1	英語 I	長峯英樹	4
1	心理学	佐藤歩	5
1	経営学	長峯英樹	6
1	郡山学 / 福島学	安藤勝	7
1	日本語学 I	本多真史	8
1	医療倫理学	長岡正博	9
1	基礎物理学	荒木威	10
1	物理学実験	菊地尚志	11
1	基礎化学	斎藤昇太郎	12
1	化学実験	阿部匡聡	13
1	基礎生物学	今井元	14
1	生物学実験	今井元	15
1	歯科医学演習	大野敬	16
1	歯科医療概論	瀬川洋	17
1	基礎歯学概論 I	安部仁晴	18
1	臨床歯学概論	大野敬	19
1	臨床心理学	佐藤歩	20
1	歯科医療人間学 I	中川敏浩	21
2	情報リテラシー II	宇佐美晶信	22
2	英語 II	長峯英樹	23
2	日本語学 II	本多真史	24
2	物理学	菊地尚志	25
2	化学	阿部匡聡	26
2	生物学	前田豊信	27
2	基礎歯学概論 II	遊佐淳子	28
2	歯科医療人間学 II	大橋明石	29
2	口腔解剖学	宇佐美晶信	30
2	口腔解剖学実習	宇佐美晶信	31
2	解剖学	宇佐美晶信	32
2	解剖学実習	宇佐美晶信	33
2	口腔組織学	安部仁晴	34
2	口腔組織学実習	安部仁晴	35
2	口腔生理学 I	川合宏仁	36
2	口腔生理学実習	川合宏仁	37
2	口腔生化学 I	加藤靖正	38
2	口腔感染免疫学 I	清浦有祐	39
2	歯科薬理学 I	鈴木礼子	40
2	公衆衛生学	小林美智代	41
3	歯科医療管理学	大橋明石	42
3	社会歯科学	南健太郎	43
3	歯科医療人間学 III	清野晃孝	44
3	口腔生理学 II	川合宏仁	45
3	口腔生化学 II	加藤靖正	46
3	口腔生化学実習	加藤靖正	47
3	口腔病理学	遊佐淳子	48
3	口腔病理学実習	遊佐淳子	49
3	口腔感染免疫学 II	清浦有祐	50
3	口腔感染免疫学実習	清浦有祐	51
3	歯科薬理学 II	柴田達也	52
3	歯科薬理学実習	鈴木礼子	53
3	口腔衛生学	廣瀬公治	54
3	口腔衛生学実習	廣瀬公治	55
3	保存修復学 I	山田嘉重	56
3	冠橋義歯補綴学 I	羽鳥弘毅	57
3	有床義歯補綴学 I	山森徹雄	58
3	有床義歯補綴学 I 実習	山森徹雄	59

学年	授 業 科 目	科 目 責 任 者	頁
3	口腔外科学Ⅰ	金 秀 樹	60
3	口腔内科学	高 田 訓	61
3	歯科放射線学Ⅰ	原 田 卓 哉	62
3	高齢者歯科学Ⅰ	鈴 木 史 彦	63
3	災害歯科医学	板 橋 仁	64
3	総合臨床医学	馬 場 優	65
4	保存修復学Ⅱ	山 田 嘉 重	66
4	保存修復学実習	山 田 嘉 重	67
4	歯内療法学	木 村 裕 一	68
4	歯内療法学実習	木 村 裕 一	69
4	歯周病学	高 橋 慶 壯	70
4	歯周病学実習	高 橋 慶 壯	71
4	冠橋義歯補綴学Ⅱ	羽 鳥 弘 毅	72
4	冠橋義歯補綴学実習	羽 鳥 弘 毅	73
4	有床義歯補綴学Ⅱ	山 森 徹 雄	74
4	有床義歯補綴学Ⅱ実習	山 森 徹 雄	75
4	口腔インプラント学	山 森 徹 雄	76
4	口腔インプラント学実習	山 森 徹 雄	77
4	口腔外科学Ⅱ	川 原 一 郎	78
4	口腔外科学Ⅲ	高 田 訓	79
4	歯科麻酔学	山 崎 信 也	80
4	歯科矯正学	福 井 和 徳	81
4	歯科矯正学実習	福 井 和 徳	82
4	小児歯科学	島 村 和 宏	83
4	小児歯科学実習	島 村 和 宏	84
4	歯科放射線学Ⅱ	原 田 卓 哉	85
4	高齢者歯科学Ⅱ	鈴 木 史 彦	86
4	障害者歯科学	佐々木 重 夫	87
4	臨床総合演習	清 野 晃 孝	88
5	臨床実習	大 野 敬	89
6	口腔解剖学	宇佐美 晶 信	90
6	口腔組織学	安 部 仁 晴	91
6	口腔感染免疫学	清 浦 有 祐	92
6	口腔病理学	遊 佐 淳 子	93
6	歯科薬理学	鈴 木 礼 子	94
6	口腔生理学	川 合 宏 仁	95
6	口腔生化学	加 藤 靖 正	96
6	保存修復学	山 田 嘉 重	97
6	歯内療法学	木 村 裕 一	98
6	歯周病学	高 橋 慶 壯	99
6	冠橋義歯補綴学	羽 鳥 弘 毅	100
6	有床義歯補綴学	山 森 徹 雄	101
6	口腔インプラント学	山 森 徹 雄	102
6	歯科矯正学	福 井 和 徳	103
6	小児歯科学	島 村 和 宏	104
6	歯科放射線学	原 田 卓 哉	105
6	総合臨床医学	馬 場 優	106
6	医療倫理学	長 岡 正 博	107
6	歯科麻酔学	山 崎 信 也	108
6	高齢者歯科学	鈴 木 史 彦	109
6	障害者歯科学	佐々木 重 夫	110
6	公衆衛生学・口腔衛生学	廣 瀬 公 治	111
6	社会歯科学	南 健 太 郎	112
6	口腔外科学	高 田 訓	113
6	口腔内科学	高 田 訓	114
6	災害歯科学	板 橋 仁	115
6	歯科医療管理学	大 橋 明 石	116

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	統計数理学	第1学年
科目責任者(記載者)	菊地尚志	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

統計学の方法を理解して、歯科医師として客観的、合理的な判断力を養う。そのために1) 統計資料を整理する。2) 統計料を計算する。3) 様々な確率分布を説明する。4) 統計的推定ができる。5) 統計的検定ができるようにする。

2) 自己点検・評価

歯科医師として将来用いる数学は主に統計学であろうと考えられる。国試でも扱われる内容なのでそれを強調して授業を行っている。授業評価の結果からは概ね学生には授業内容は伝わったと考えられる。

3) 改善方策

目標に関しては現状でいいと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

それで板書を中心に授業を行う。授業をよく聞きノートをきちんと取って、さらに自分で主体的に「手を動かす」ことで理解を深めてられるように進める。

2) 自己点検・評価

統計数理学の授業を担当する様になり、数年が経つ。少しずつ改善して全体としての論理が通じるようになってきたと考えている。また統計学の手法を身につけさせる上で授業時間での説明だけでは不十分である。この点に関して改善方策でのべる。

3) 改善方策

統計学の手法を身につけるためには、授業を聞いているだけでは不十分で実際自分の手で計算などを行う必要がある。これを限られた授業時間内に行うのは難しい。宿題として提出させたり、科目選択ゼミを演習に使ったりする。ときどき説明が冗長になることがあったのでその点を改善していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期と後期のそれぞれの定期試験で成績を決定する。必要のある場合レポートなどの課題を課して、最大30%の範囲でその結果を成績に加える。

2) 自己点検・評価

数学が苦手な学生の多い中でプレテストも行って大分の学生が再試験なしで合格点をとっている。平均点も80点近くになっているので概ね現状でいいと考えている。

3) 改善方策

評価方法は現状維持でいいと考える。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	情報リテラシーI	第 1 学年
科目責任者(記載者)	古山 昭	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

CBTに対応できるよう、情報処理機器やソフトの扱いに習熟する。メールの作法やネットリテラシーについて学ぶ。

2) 自己点検・評価

科目の目標は概ね達成できている。

3) 改善方策

学生対応を一層、丁寧に行う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義と演習は教室でおこなうが、毎週の予習・復習をGoogle Classroomを用いて行っている。

2) 自己点検・評価

概ね問題なく実行できている。

3) 改善方策

学生対応を、一層丁寧に行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期と後期に試験(20%×2)、単元別まとめ課題(8%×5)、宿題(予習課題)20%で評価を行う。

2) 自己点検・評価

試験の内容が十分に理解できていない学生に対して、試験中の対応がやや丁寧さにかけてあった。

3) 改善方策

学生の試験内容についての理解を助けるよう、丁寧に対応していく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	英語基礎	第1学年
科目責任者(記載者)	長峯 英樹	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

当科目の到達目標は、英文の理解スピードと精度を向上させ、自分の意見を述べるために役立つ表現を習得することである。そのために、国内外の社会問題に関する英文を題材に、(1)基礎英文法の復習、(2)語彙・構文、時事表現の増強、(3)テーマに関する多様な意見とそれぞれの根拠の理解、(4)英語で発信するための基礎スキルの習得、の4つを具体的な目標とした。

2) 自己点検・評価

入学時の各学生の能力格差も確かにあるものの、大多数の学生の英語力(とくに基礎文法力)向上に貢献できたのではないと思う。一方で、上記(4)の英語による発信スキルの向上については、当講義内で十分な時間が確保できなかった。

3) 改善方策

英文法に関してであるが、例年、「英文法不要派」が一定数存在する。しかし、本年度(2022年度)では英文法に対する否定的な考えをもつ学生が少なく、むしろ熱心に学ぼうとする学生も多かった。学生のニーズも年々多様化しているので、自主学習時間をしっかり確保し、学生一人一人から疑問点を聞き出し、答えるといった地道な努力が必要だと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生全員に順番で英文の音読とサイトトランスレーションをしてもらい、頻出語彙や時事表現、基礎文法を解説しながら、様々な社会テーマに対する自分の意見を論理的に表現するための重要表現を覚えてもらう。学生間の英語能力格差にいかに対処するかが毎年の課題である。

2) 自己点検・評価

全般的に英語に対する苦手意識の軽減に役に立てたのではないと思う。一方で、学生間の能力や意欲の格差も前年以上に大きく、一方通行的な講義では対処が難しいことも痛感している。授業時間内に自主学習の時間をできるだけ確保し、個々の質問に対応する形式をとった。それでも、学生の授業評価から質問のしやすさと予習と復習の時間確保という点で改善の余地がまだまだあると認識している。

3) 改善方策

「解説は講義で、復習は自宅で」という学習を学生に期待するよりも、解説・質疑応答と復習もできるだけ講義内で行うようにしたい。具体的には、2つのテーマごとに、解説(60分+60分)⇒授業内での復習と疑問点解消(60分)⇒確認テスト前復習(40分)⇒確認テスト、というパターンを確立したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

確認テストと定期試験(80%)、課題提出(20%)により評価。

2) 自己点検・評価

講義で解説したテーマ2つごとに確認テストを実施。昨年同様、テスト前に40分間の自習時間を設けたことで多くの学生に成績の改善が認められた。一方で、昨年同様、テストが多すぎると感じる学生も数名存在する。

3) 改善方策

学んだ知識やスキルをテストという形で確認するプロセスの重要性を理解してもらいながら、上記の取り組みパターンを継続し、英語力の向上につなげていきたいと考えている。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	英語 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	長峯 英樹	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本講義は「英語基礎」で学んだテーマについて、①テキスト以外の資料を読むことを理解を深めること、②大手メディアや海外の時事ニュースに慣れること（とくにボリュームとスピード）、③グループで調査し、英語で発表すること、を目標としている。③の英語での発表に関しては、本年度も新型コロナ感染防止の観点から割愛した。

2) 自己点検・評価

テキスト以外の資料を読み、理解を深める点については、全般的によくできたと思う。しかし、②の時事ニュースに慣れるといった目標の達成は、一部の学生を除き、本年度も達成できたとは言い難い。一方で、学生による授業評価項目8の必要性の理解に関しては70%以上の学生が理解してくれた。英語の理解スピードの向上に関しては、各個人が英語学習を習慣化する必要があるが、いかに行動に移してもらうかが今後も課題である。

3) 改善方策

英文理解のスピード向上のためには、英語学習の習慣化が不可欠であり、やはりある程度の強制力をもった学習機会が必要であると思う。全学生を対象にすることは困難であるが、希望者を対象にしたオンラインTOEIC勉強会を今後も継続し、参加者の数を増やしていくことで全体のレベルを向上させることも一つの方法だと思う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

「英語基礎」で学んだ知識をもとに、ライティングやスピーキングといった発信力の向上を目的とした講義内容である。本年度もグループプレゼンテーションを割愛したため、ライティングを中心とした指導となった。

2) 自己点検・評価

英文のライティングに関しては「英訳」ではなく、基本構文やパターンを覚え、文法事項に注意しながら、自分の文章にしていくことが一番効果的な方法である。しかし、「丸暗記は役に立たない」といった考えが根強い学生も少なくない。暗記を基本とした方法の有効性をいかに理解して実践してもらえかが課題である。

3) 改善方策

スピーキングやライティングは講義内容の理解だけでは上達が望めないスキルである。各学生の自宅学習に任せるよりも、基本構文を確実に覚えてもらうように、授業内で自習時間を確保する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(80%)、課題提出(20%)により評価。試験としては、単なる知識を問うのではなく、あるテーマについて自分で調べて、基本構文とパラグラフの構成をしっかり意識しながら英文を構成できているかを問う内容とした。

2) 自己点検・評価

今後も改善し続ける必要はあるが、試験および評価の方向性としては間違っていないと思う。

3) 改善方策

学生の自主性に任せるだけでなく、授業内で重要語句や構文を最低でも10回書いてもらうなど、ある程度の強制力をもつような課題を出す。その有効性を実感してもらうには継続していくしかないと考えている。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	心理学	第1学年
科目責任者(記載者)	佐藤 歩	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

現代における心の問題を述べられる。心理学の基本的な立場を理解できる。性格を分析できる。歯科口腔外科領域における心身症を説明できる。心の援助(事例読解)を実施できる。

2) 自己点検・評価

長所は、エゴグラムを実施した際、学生から「自分自身のことが分かった」「歯科医師としてだけでなく、日常生活でも生かしたい」といった生の声が聞かれたこと。問題点は、心理学分野の範囲は幅広いため、到達目標の内容を毎授業の中で詰め込みすぎてしまったと感じている。

3) 改善方策

常に到達目標を学生に意識させ、自ら興味が高まるよう疑問を投げかけたり、学生の気持ちを丁寧に聞き取っていく。問題点については、国試の問題や時事を踏まえて精査して心理学分野を教えることで、到達目標を達成させたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義形式で板書およびスライドと資料を使用して履修する。資料は、重要項目の穴埋め式のプリントを用意し、授業を受けながら埋めていくものとした。また、時代とともに変化する心理学分野の定義や時事について資料を作成し学生に提示することを心掛けた。

2) 自己点検・評価

問題点は、「学生による授業評価」の科目平均得点(3.67)に対して、“予習(3.33)・復習(3.44)”の項目が低い点数であったこと。毎授業ごと、前回の授業の復習を行っているため、学生自ら復習する必要度が低くなり、結果低い点数になったと推測される。長所は”シラバスに沿っての進行(3.89)””目的や概要の説明(3.89)””教員の熱意や授業の工夫(3.83)”が高い得点であった。

3) 改善方策

問題点の解決方策として“授業の予習・復習”について、前授業時間時に、次回の授業のテーマについて問題提起し、前授業テーマを復習しながら調べるように声をかけていきたい。長所の伸長方策としては、受け持つすべての授業において、丁寧に授業開始時に本日の目的、概要の説明を行っていく。また、心理学分野の統計(発達障害の人数など)等に常に注意を払い、最新の情報を学生に提供することを心掛けたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(本試験、追試験、再試験)で65点以上を合格とする。全授業範囲を記述式で実施する。追再試の学生はいなかった。

2) 自己点検・評価

学生の能力にかなりの差が見受けられたため、記述式と同時に選択式も定期試験に追加した。特性のある学生も試験時間内に終えることができた半面、力のある学生にとっては正答を導きやすい試験になってしまった。

3) 改善方策

毎授業の中で学生に声をかける、練習問題を実施し学生の現状を把握すると同時に、練習問題など記述・選択の問題数のバランスを修正していく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	経営学	第1学年
科目責任者(記載者)	長峯 英樹	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

企業経営に興味を持ってもらうことが第一の目標である。具体的には、①基礎的な分析フレームワークの理解、②ビジネスモデルの概要理解、③論理的考察の基礎習得、④将来の経営イメージの構築、の4点である。多様な業界の事例を学ぶことにより、歯科業界にいかに応用できるかについて考察する。

2) 自己点検・評価

興味深い企業事例を紹介でき、昨年度ほどではないが、授業外でも質問や参考図書などの問い合わせが寄せられるなど、多くの学生の好奇心を高めることができたと思う。時間が限られているため、マーケティングや組織管理といった各分野を掘り下げることができなかったが、歯科業界にも応用できそうな事例を数多く紹介することができた。一方、なぜ医療業界に特化せず、他業種から学ぶ必要があるのか疑問をもつ学生もいた。

3) 改善方策

インドのアラビンド眼科がマクドナルドから、メイヨークリニックがトヨタから学んだように、医療機関が他業種から学んだイノベーションの事例を数多く紹介し、学生の関心をさらに高めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

理論や分析フレームワークを学び、いくつかの事例に応用してみることで、様々な視点が存在することを学ぶ。単なる講義形式に終始することなく、各設定テーマに関する分析と議論を行い、自分の考察をまとめるように課題提出などで促す。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価によると、本年度も気軽に質問できる雰囲気を提供する努力がまだまだ不足しているようである。また、知的好奇心をもっと刺激できるように授業内容も改善し続ける必要があると思う。やはり、医療機関への応用可能性に関する考察が必要であることを痛感した。

3) 改善方策

本学部には、歯科クリニックの経営者として活躍する将来像をもつ学生が多い。普段、英語には苦手意識が強い学生達からも経営学に関しては多くの興味深いアイデアや問題提起があった。ただ、それらは授業外に寄せられることから、できれば授業内で活発に意見交換できるような工夫をしたい。グループワークはもちろん、通常の授業でも発言を活発化させる機会を設けたい。また、医療機関の事例も増やしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(80%)、課題提出およびグループ発表(20%)により評価。知識を問うよりも、学んだ内容をもとに将来の経営イメージを論述してもらう試験内容とした。

2) 自己点検・評価

出題の方向性としては間違っていないと思う。一方で、本年度においても授業で学んだビジネスモデルやフレームワークを意識できていない学生も数名いたため、この点に関する指示が不十分であったと思う。

3) 改善方策

授業で学んだ内容を意識した経営イメージができていないか、最終講義時に確認する時間を確保したい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	郡山学/福島学	第1学年
科目責任者(記載者)	安藤勝	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

学生の出身地が各県にわたっているため、映像を多分に用いて、より具体的に説明をした。科目の目標にはある程度到達できた。

2) 自己点検・評価

この科目のねらいや5人の外部講師とのバランスに心がける必要がある。

3) 改善方策

この科目の理解にはどんなテーマが効果的なのか、授業の全体構成を再検討をする。社会科学的な視点が弱い。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

映像を多分に用いて具体的、具象的に説明した。

2) 自己点検・評価

テーマに応じた5人の外部講師が担当したので、学生には各講師の人格に触れることになり、新鮮さを与え、好評であった。

3) 改善方策

1コマ60分での授業では不足である。70～80分は必要である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

概して良好である。

2) 自己点検・評価

学生はもっと質問してほしい。ネット情報だけでなく、参考文献の利用を進めたい。

3) 改善方策

レポートの書き方、発表の仕方、図書館の使い方などを指導する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	日本語学 I	第1学年
科目責任者(記載者)	本多真史	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学での学習・研究および歯科医師としての実務において必要となる日本語運用能力の基盤を確立するため、読む、聞く、話す、書くの基本姿勢、知識、技能および書籍・論文・資料の読解の能力を修得することを目標としている。授業内容は、これに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価

目標と授業内容は合致している。また、受講生全員(休学者を除く)が合格したことから、科目の目標は達成されたと考える。「学生による授業評価アンケート」でも、大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策

到達目標についての問題はないと判断し、2023年度も同様の目標を設定する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

『大学生のための日本語表現トレーニング・スキルアップ編』を使用して講義しつつ、演習形式を取り入れている。担当者の話を聞き(インプット)、理解し、思考して(プロセッシング)、まとめる(アウトプット)という一連の行為が円滑に行うことができるようになるための機会を設けた。また、講義・演習とも、聴覚的な効果をねらい、パワーポイントで作成した資料をプロジェクターを使用してスクリーンに映した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートでは、「好奇心が刺激されたり、興味が高まったりしたか」の評価が低かった。多くの受講生の中に、「自分は日本語を学ぶ必要がない」との認識が前提としてある。その認識を打ち壊すことができなかったことに加え、学生の知識欲に応えられなかったと思われる。

3) 改善方策

アンケートから、日本語運用能力を軽んずる学生がいると判断される。受講者自身の意識に問題があり、むしろそれが日本語運用能力を伸び悩ませている原因であると考えられる。受講生の関心により近い内容を盛り込み、自主的に「日本語について学ぶ」ように仕向けていくつもりである。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(70%)、課題等の提出状況およびその内容(30%)として、総合的に評価した。課題は採点后に返却し、次回の授業で解説を行った。

2) 自己点検・評価

評価方法については、問題がないと考える。

3) 改善方策

成績評価について、特筆すべき問題はないと考える。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医療倫理学	第1学年
科目責任者(記載者)	長岡正博	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

目標として、医療行為の特殊性の理解・全ての医療従事者の職業上の義務・社会における医療のあり方・問題解決のための具体的指針を考えることができるようになるを設定したが、医療の特殊性を鑑み高い倫理観が必要とされることは理解して頂いたと考えている。しかし、社会における医療のあり方・問題解決のための具体的指針に関して、第1学年という時期であることもあり自分自身のこととしては見られていないように感じた。

2) 自己点検・評価

一般的な倫理と医療倫理の違いを医療の特殊性を解説した上で、その必要性を理解し習得して頂いたと考えている。

到達目標として④現代医療の倫理問題について説明できる。⑤臨床現場で直面する倫理的問題を説明できる。とあるが、自分自身が当事者であり身に降りかかる問題として考えてもらいたがったが、授業評価を覗く限りそこまでは伝わっていません。

3) 改善方策

医療行為の特殊性の理解・全ての医療従事者の職業上の義務に関しては、一律に話すのではなく特に重要となる箇所を強く伝えることでより印象に残るようにしていきたいと考えます。

現代医療の倫理問題・臨床現場で直面する倫理的問題については、一般的なトピックスとしてメディアで取り上げられるような話題をテーマとして出すことで学生の興味や関心を引くことが必要になるかなと思います。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

目標として、医療行為の特殊性の理解・全ての医療従事者の職業上の義務・社会における医療のあり方・問題解決のための具体的指針を考えることができるようになるを設定してある。倫理学の成り立ちから丁寧に解説しているがどうしてもプリントを文字が占めることになってしまい学生にとってはわかりづらい資料になっていたかもしれない。

2) 自己点検・評価

本科目を担当するに当たり学生に国家試験や模試などでどのように取り上げられているか自分なりに理解し伝わりやすい講義資料を作成すべく様々な資料の形式および講義形式(スライドの構成)を模索しながら講義を実施していたため学生からはスライドの構成とプリントの様式について意見を頂いている。

3) 改善方策

講義内容に適した講義形式(スライドの活用や板書など)を用いて丁寧に伝える。スライドやプリントといった講義資料のなかで特に覚えて欲しい内容には太字や色を変えることで視覚的に重要であることを意識して貫えるように構成する。丁寧に解説することを心掛けすぎて話すスピードがとても遅いという意見を貰っている。学生毎に理解できる知識量が違うため速くすればいいというわけではないが、適した加減をもさくしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

しっかりと言葉を理解・把握して頂きたいので記述式で試験を行っている。定期試験の結果は平均74.8、不合格者数8名
悪い結果ではないと考えている。点数の分布に斑がある点は改善が必要であると考えております。

2) 自己点検・評価

試験結果の点数と不合格者数は妥当と考えています。しかし、授業評価では予習と復習が全体平均を割っていることから、それほど勉強せずとも結果を出してしまったということになる。講義内での取り上げ方と問題作成に何らかの対策が必要であると感じました。

3) 改善方策

講義形式の最適化と重要な事柄に対する焦点の当て方、試験問題を作成するにあたり尋ね方を改めて検討する必要があると考えております。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎物理学	第1学年
科目責任者(記載者)	荒木威	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師を目指す学生にとって重要となる「力、エネルギー、熱、電磁波、放射線」に注力し授業を進めている。基本的な知識を習得させるとともに、演習問題を通じて問題文を読み解く力、論理的な思考に基づき解法を立案する力、正しい手順と計算を経て正答を導く力を養うことを目標としている。

2) 自己点検・評価

授業の内容、難易度、スピードに関して問題は無かった。不満の声も聞かれなかった。初回授業時に、歯科医師国家試験の過去問題を例に挙げ、物理学を履修する必要性を強調したが、実際に授業が始める前であったためか、実感が得られなかった学生も居たようである。

3) 改善方策

授業の内容、難易度、スピードに関しては次年度も現状を維持する。物理学の必要性に関しては、初回だけでなく要所所で複数回強調する。学生が授業に慣れ到達目標を把握でき始めたタイミングや、試験前後などが考えらえる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

プロジェクターを用いた講義形式の授業の後、その内容に沿った演習を実施している。演習の時間を確保するため、講義で用いるスライドは事前に配布している。演習問題の題材にできるだけ医療、人体、健康に関するものを取り上げ、学生が興味を持ちやすいようにしている。演習中は教員への質問や学生同士の議論を推奨している。正答率の低かった問題は次回授業で解説を行っている。

2) 自己点検・評価

正答率の低かった演習問題の解法や注意点をまとめた資料が好評であった。大学ポータルサイト上で常時閲覧できるようにしたため、学生のタイミングで復習に利用できたことが功を奏したようである。「教科書が欲しい」という意見があった。

3) 改善方策

次年度も同様な教育方法を実施する。教科書に関しては、様々な履修歴を持った学生が混在しており、特定の教科書に沿って授業を進めるのは困難である。代わりに参考書をいくつか挙げる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

授業毎に行う演習、中間試験、定期試験の点数をもとに、演習20%、中間試験40%、定期試験40%の割合で評価している。進級基準に満たなかった学生には、学年末に再試験を実施している。

2) 自己点検・評価

特に問題はなかった。不満の声も聞かれなかった。

3) 改善方策

次年度も同様の評価方法と基準を維持する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理学実験	第1学年
科目責任者(記載者)	菊地尚志	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

物理学が記述する事柄が現実の自然現象を表現することを理解するために、様々な実験を実施する。その経験を通して、将来歯科医師として直面する問題を理性的に判断し、合理的に解決できる能力を養う。自分の判断、解決を理路整然と文章にまとめ、他者へ説明する能力も養う。1) 自然現象を説明する。2) 機器を正しく取り扱う。3) 誤差を含む数値を処理する。4) 報告書を分かりやすく書く。

2) 自己点検・評価

基礎物理学の授業内容と関連付けて実験の説明もしている。また統計数学で学んだ技術も実験で応用している。

3) 改善方策

到達目標については現状でいいと考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実験を実施する前に担当する実験について教科書で予習し安全に実験を進める。実験での測定値が妥当なものであるか確認しながら慎重に実験を進める。実験結果を、他者に分かり易く伝えることを意識して報告書にまとめさせる。

2) 自己点検・評価

物理学は本学の学生にとって最も苦手な科目の一つであるが、その苦手意識を持たない様に指導できていると考えている。授業評価のアンケート結果も全体平均と比べて高い。

3) 改善方策

とかく記憶が中心の勉強方法をとる本学学生にとって実験実習し、さらにそれをレポートにまとめる過程は「覚える」だけから「考えて分かる」までの経験をする上で大切だ。来年度はその点を今まで以上に強調して教育を行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

毎回の実験を、出席し実験を行なったとき45%、提出された報告書の内容によってさらに加点して、45%から最大100%で評価する。半期分全体の成績の総和で合否を決める。

2) 自己点検・評価

課題の未提出者を除いてはほぼ全員が合格点を取った。その点では適切な評価基準になっていると考えられる。

3) 改善方策

配点について疑問を呈する意見があったのでその点は明確にして行く。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎化学	第1学年
科目責任者(記載者)	斎藤昇太郎	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

高等学校レベルの化学的知識を理解・習得し、さらに基礎科目・臨床科目の理解・習得に必要な知識を得ることにある。化学に苦手意識のある学生にとって困難すぎる到達目標とならないよう、高等学校の初等レベルの内容を到達目標の一部とし、また、既習者にとって平易すぎる到達目標とならないよう、大学の一般レベルの内容をも到達目標の一部としている。これによって講義内容のバランスを確保している。

2) 自己点検・評価

シラバスに記載した7個の到達目標は定期試験の解答や概ね毎週化している課題の提出状況から、学生のレベルに応じて、講義内容を調整した。多くの学生において達成されているものと考えられる。

3) 改善方策

科目の連動性を十分に説明したことで学生たちは学習の意義を見出せたと思われるが、一方で同じ内容の講義であっても困難であると感じる学生の割合が大きくなっている傾向である。ついては、到達目標の基準を見直し、より連動性の高い内容について重点的に取り扱うこととする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生にはシラバスを参照しながら予習するように指導し、主に板書により教科書の内容を中心に説明、配布する課題によって復習できるようにしている。

2) 自己点検・評価

配布課題によって週ごとに学生の理解状況を把握しつつ、学生誤解答にはすべて修正を加えることで、双方向性を確保した。これについては、学生からも評価を得ている。また、化学を苦手とする学生向けに自由参加の少人数制補講を実施することで個々に理解が足りない部分を聞き取り、解説した。

3) 改善方策

視覚的資料を増やすことで学生の興味を高める方策を取ったが、授業評価における「教育を受け知的好奇心が刺激されたり、興味が高まりましたか」という内容が2021年度と比べて低下した。このため、視覚的資料の効果は高いとは言えず、板書と口頭がより興味を引く可能性があるため、一部内容を2021年度に戻し、再考する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験を75点、提出課題を25点満点とし、100点満点としている。

2) 自己点検・評価

課題点は、解答内容が不良である場合には追加して課すことで無理のない範囲で、ほとんどの学生が20点以上を獲得できるように努めている。評価方法に問題はないと考えている。

3) 改善方策

現状を維持する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	化学実験	第1学年
科目責任者(記載者)	阿部匡聡	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

基本的な化合物について、構造・性質・反応を理解するとともに、物質の濃度を測定するしくみを理解するため、①教本に示された手順通りに、実験を行うこと ②実験器具を正しく取り扱い、精密測容器具の目盛りを正確に読み取ること ③行った実験の過程で進行した反応を説明すること ④得られた測定データや観察結果を正確に記録し、正確なレポートを作成すること、を到達目標としている。

2) 自己点検・評価

目標としては、適切であると考えている。

3) 改善方策

修正・変更は特にしない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

始めに、その回の実験内容の重要事項と実験操作上の注意事項を説明し、その後、個人で、あるいは3~4人のグループで実験を進めていく。正確で安全な実験操作が行われているか、常にチェックし、適宜、指導を行う。結果を正確に記録させるとともに、結果のもつ意味を考えるよう導く。

2) 自己点検・評価

試薬類・機器の配置、実験進行の流れ、指導法は、適切であると考えている。

3) 改善方策

実験の進行が極端に遅い学生がいる場合、作業を効率的に進められるよう誘導する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

レポート 74%、演習 16%、出席状況・受講態度 10% により評価した。

2) 自己点検・評価

評価法としては、適切であると考えている。

3) 改善方策

評価法の修正・変更は特にしない。欠席すると、その回のレポートの得点を放棄することになるので、安易に欠席しないよう、その点の周知徹底を図る。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎生物学	第1学年
科目責任者(記載者)	今井 元	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標は、「歯学部基礎科目で修得する学習項目」を理解し、「動物の体制(構造と機能)」について「個体の階層性(細胞→組織→器官→器官系)」の順に系統的に修得し、「その成り立ち」について理解することである。到達目標は、1. 細胞 2. 組織 3. 器官 4. 器官系の基本構造と機能、5. 刺激の受容と反応 6. 体内環境の調節と恒常性の維持、7. 系統発生と個体発生 及び 多様性を説明できることである。

2) 自己点検・評価

成績上位9/10(90%)の学生は、①「歯学部基礎科目で修得すべき学習項目」②「個体の階層性」③「細胞・組織の構造と機能」、④「器官・器官系における刺激の受容と反応・体内環境の調節」⑤「系統発生と個体発生及び多様性」などを系統的に説明できるようになった。成績下位の1/10(10%)の学生は、1年生のうちに上記①～⑤の人体の構造の全体像とその機能の概要を系統的に理解する重要性を認識していないように思われる。

3) 改善方策

来年度は、補講時間を用いて、理解できない学生に対して、もっと丁寧に説明することとする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

履修方法は、学習効果ピラミッドに準じて行なっている。
具体的には、「細胞の構造」・「脊椎動物の組織」・「刺激の受容と反応」・「体内環境の維持」・「生物の個体発生と系統発生」・「生態と行動」についての講義を聴講・理解し、各講義に対する課題(問題形式)について討議した後、課題の解答をサブノートにまとめ、教え合うことによって長期記憶を形成する。

2) 自己点検・評価

学生から以下の2点について、指摘があった。

- 1) テンポが早い。後に、記載者、本人から自己申告があり、帰国子女でも分かるスピードにして欲しいとの要望があった。
- 2) 書かせる量が多すぎて、勉強したいところを勉強する時間がとれない。

3) 改善方策

- 1) に大しては、HRなどで補講を行い、帰国子女や留学生でも分かるように、ゆっくり授業を進める。
- 2) に対しては、昨年と同様の指摘であったが、サブノートだけは試験に持ち込み可であり、最終評価は基本的に試験で評価されるので、やるのもやらないのも、学生の自由であることを説明する。ただ、サブノートをつくれぬ学生は、総合試験の成績も悪いので、書いて覚えることの重要性を、根気よく、説明していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期・後期の中間試験と定期試験(計4区分)で評価している。すなわち、
第1区分: 前期中間「細胞の構造・脊椎動物の組織」(細胞と四大組織)/第2区分: 前期定期「刺激の受容と反応(神経系と内分泌系)」/
第3区分: 後期中間「体内環境の維持(各器官系の調節)」/第4区分: 後期定期「生物の個体発生と系統発生」「生態と行動」を行い、
各区分毎の試験の得点から評価し、最終評価はその平均として行う。

2) 自己点検・評価

1人、不合格者を出してしまった。しかしながら、1D総合試験では、全問、正答率70%以上であった。

3) 改善方策

来年は全員合格させられるように、さらに努力したい。1D総合試験では、全問、正答率70%以上を目指す。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生物学実験	第1学年
科目責任者(記載者)	今井 元	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目においては、動物愛護の精神(3R)を学んだ上で、植物、動物、微生物を材料とした顕微鏡観察から生命体の基本構造(細胞・オルガネラ・組織・細胞分裂)を把握する。また、カエルを用いた肉眼解剖により、個体(脊椎動物)における各器官の構造と配列など基本的体制、発生過程を把握する。また、これらの実験を通して、実験の心構え、ルール、レポート作成法を修得することにより、科学論文の構成を学ぶ。

2) 自己点検・評価

ほとんどの学生に、1)動物愛護の精神(3R)の理解・心構え 2)顕微鏡・解剖器具の使用法 3)化学染色法などの試料作成法 4)細胞構造・細胞分裂・胚発生の過程 5)器官と各器官系の分類 6)実験結果のまとめ方(レポートの作成法)などを修得させることができた。しかし、一部の学生は、『提出が遅れる、訂正後の再提出ができない』など、実習の心構えとレポートの重要性について理解させられなかった。

3) 改善方策

『レポート提出が遅れる学生』に対して、学修する順番の重要性について説明して、期日までに提出させる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

ガイダンスにおいて、動物愛護の精神を強調した上で、扱う生物の基礎知識・実験の目的・手順・関連する基礎医学的知識を説明する。
顕微鏡と実験器具との適正な使用法を学んだ上で、様々な細胞やオルガネラ構造などを詳細に観察し、スケッチする実習を行う。また、カエルの解剖を行い、各器官の構成や配列などを詳細に観察し、スケッチする実習を行う。実験に関するレポート作成し、論文の読み方や作成法の基礎を学ぶ。

2) 自己点検・評価

本年度は、学生からの改善して欲しい点は無く、全ての項目において平均以上であった。

3) 改善方策

1) 教科書(得意になる解剖と整理)は指定しているが、プリントの出典(歯科衛生士教本・アメリカ大学生物学)をもっと良く説明する。
2) サブノートはやるのもやらないのも、学生の自由である。ただし、サブノートを丁寧に作成できる学生ほど、定期試験だけでなく総合試験の成績も良い事、2年以降も留年する確率が下がるので、書いて覚えることの重要性を、根気よく、説明し

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

レポート点で100%評価する。評価は、40点満点のレポートを12回提出し、最低点から2回分を削除し、全10回で評価する。提出期限に遅れた場合は4点/1日が減ぜられる。未提出+無断欠席がN回の場合、Nが1で90点満点、2で80点満点、3で70点満点となる。評価の計算式は、 $評価点 = \{(12回 - N回) \times 総点 - 最低2回削除\} \times 2.5 \div 10回$ 。これで基準点に達しない学生には、課題の提出で加点している。

2) 自己点検・評価

レポートを期限を守って提出することができない学生(不合格者)に対して実習試験を行ったが、基準点(65点)をとってこれず、合格させられなかった。

3) 改善方策

順序良く学修する重要性についてを根気よく説明し、レポートを遅れずに出す必要性を納得させ、レポートの提出遅延を守らせる。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科医学演習	第1学年
科目責任者(記載者)	大野 敬	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標の全てである1)～16)項目を実習形式で行っている。

2) 自己点検・評価

歯科医学演習の目標である基礎技術の訓練および歯科医学を学修する動機付けとしての目標は達成していると考ええる。

3) 改善方策

科目の概要に準じた到達目標の設定を一部変更し、科目の概要に一致させる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

演習の目的・概要および臨床系各専門分野の概要をスライドや資料で説明し。各臨床系専門分野の基礎技術訓練に係る知識・技能および態度を体験させている。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価からも、達成していると思われました。

3) 改善方策

各科目担当者へより理解できる授業を心がける様をお願いする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

授業概要に記載されている評価方法で行っている。

2) 自己点検・評価

歯科医学演習は100%の合格率で問題ない。

3) 改善方策

現在の評価方法で良いと判断し、次年度も同様の評価方法で生成評価を行う。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科医療概論	第1学年
科目責任者(記載者)	瀬川 洋	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医療概論を通じて、これから学ぶ歯科医学・医療の本質を正しく理解するとともに、歯科医学を学ぶ意欲と歯科医師としての基本的態度を身につけることを修得させる。

2) 自己点検・評価

入学後のまもない時期に座学のみで歯科医学・医療の本質を正しく理解させることは困難を窮めるが、人間性豊かな歯科医師としての心構えと目標設定の糸口につながると考えている。

3) 改善方策

座学による知識の付与のみならず、入学後のまもない時期に附属病院で実際の医療現場を体験学修することにより、歯科医師となる使命感と魅力に目覚めることからコロナ禍で中断している病院見学を早期に再開する必要性を痛感している。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

主に投影視覚媒体を用いての講義を行い、適宜、テーマに即した受動型学習から能動型学習への切り替えを行う問題解決型の演習を行っている。授業の最後に「本日の振り返り」として講義内容や要望を200字以内で記載・提出をさせ、授業の改善点をに努めている。

2) 自己点検・評価

スライド中心の講義はわかりやすいという評価の反面、単調になりこともあり、双方向性の講義に努める必要がある。

3) 改善方策

スライドは文字だけではなく、動画を取り入れるなど、学生が興味を持つよう、教育方法の改善に努めます。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

動画を視聴後、その内容に即した質問などの筆記試験にて評価し、65点以上を合格としている。

2) 自己点検・評価

コロナ対応により、欠席している学生にはWebによる提出を行ない、全員合格となった。欠席した学生に不利益が生じることもなかった。

3) 改善方策

今後もこの方法で評価を実施するが紙媒体による提出からWebによる提出も視野に入れながら検討したい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎歯学概論 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	安部 仁晴	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標を『病態を解析するための基礎となる第2学年時の前期履修科目となる専門基礎科目を中心に、その知識を習得する。』として、各科目における最重要項目に焦点をあて、到達目標を設定し、基本的な知識の習得を心がけた。口腔解剖学、口腔組織学、口腔生理学および口腔感染免疫学の各分野より、講義内容に沿った到達目標を設定し、複数の教員で分担して講義を行った。

2) 自己点検・評価

次年度に履修する教科で構成したが、重要項目を解りやすく説明することで、一定の知識を習得し、次年度以降の基盤をつくることができた。また、歯科医療との関連性や国家試験の問題例を提示することで、学生の授業評価にもあるように『モチベーションが高まった』との意見につながったものとする。

3) 改善方策

集計項目のすべてで平均を上回っており、到達目標と講義内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、科目間で達成度に差がみられるため、1コマで講義する内容、重要事項を量的に限定する必要性があり、具体的には1コマで選択肢問題で5問作成できる量とすることを各担当者に周知徹底する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

口腔解剖学、口腔組織学、口腔生理学および口腔感染免疫学の各分野、各担当者により教育方法は異なる。講義内容のプリントを作成、スライドまたは板書による重要事項の解説、問題演習と多岐にわたっていた。

2) 自己点検・評価

教育方法を単一化しなかったことで、各担当者により様々なバリエーションが生まれ、学生の好奇心を刺激し、歯科医学に興味を持たせることができていると考える。教本を指定していないため予習する手段として、授業資料の事前配布や授業資料提示システムに事前に講義プリント等の資料をアップロードしていただくよう担当者に進言した結果、以前のように『予習ができない』との意見は解消された。

3) 改善方策

概ね良好に教育されていると考えるが、学生の習熟度をみて、教育方法を改変するよう担当者に進言する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績評価は、前後期の定期試験のみで評価した。

2) 自己点検・評価

定期試験と追再試験で、ほぼ全ての学生は合格基準に達していた。しかし、基準に達しなかった学生も1名いた。

3) 改善方策

定期試験と追再試験で、ほぼ全ての学生は合格基準に達していたため、評価方法を変更する必要性はないと考える。しかし、追再試験を実施する前に、フィードバックする時間を設け、習熟度を向上させたい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床歯学概論	第1学年
科目責任者(記載者)	大野 敬	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標1)～15)は歯学部に入學した学生にとって歯科医療の内容と意義を理解し、6年間の目標を設定する上で必要な臨床系の基礎的知識を示している。

2) 自己点検・評価

臨床歯学概論の科目の目標である「歯学部に入學した直後に歯科医療の現場を知らせることは、これからの6年間の勉強の目標を設定する上で重要である」ことより、その担当教員は臨床系教授、准教授および講師の計15名で行っており、目標達成されていると考える。

3) 改善方策

科目の概要に準じた到達目標の設定を一部変更し、科目の概要に一致させる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

授業毎に各分野別にスライドや資料を用いて、科目の説明・治療法・治療用器具等を説明している。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価からも、科目の概要に合致していると考ええる。

3) 改善方策

各科目担当者へより理解できる授業を心がける様をお願いする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

授業概要に記載されている評価方法で行っている。

2) 自己点検・評価

臨床歯学概論は100%の合格率で問題ない。

3) 改善方策

現在の評価方法で良いと判断し、次年度も同様の評価方法で成績評価を行う。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床心理学	第1学年
科目責任者(記載者)	佐藤 歩	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

ストレス障害、うつ病、統合失調症、不安障害、心身症、依存症、発達障害、愛着障害、パーソナリティ障害について説明できる。また、自殺予防、自傷行為の予防について説明できる。

2) 自己点検・評価

長所は、心理学分野の内容(定義や対応の仕方、統計人数等)は時代とともに変化していくので、学会や新聞等の記事を学生に提示し、最新の情報を伝えられたこと。また、歯科医師として正しい定義を理解してもらうために、DSM-5の定義を毎授業提示した。問題点は、身近に関りが無い限り、障害等について具体的なイメージをすることは難しく、知識のみが定着してしまったこと。

3) 改善方策

問題点の解決方策としては、具体的に障害等の話題を提供していく。個人情報の範囲内で事例など提供していく。長所の伸長方策としては、今後も最新の情報に注意を払い学生に資料等提供していくことを心掛けたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

本科目では、アクティブラーニングを重視した授業を行う。アクティブラーニングを重視したプロセスで授業を行うことによって、学生に対して臨床心理学を学ぶための動機付けを行うとともに、授業の双方向性も重視する。

2) 自己点検・評価

問題点は、「学生による授業評価」の科目平均得点(3.60)に対して、「予習(3.29)」の項目が低い点数であったこと。長所は「教員の熱意や授業の工夫(3.83)」が高い得点であり、記述では「国試に生きる知識を教えてもらえるのがとても良いです」といった記載があった。

3) 改善方策

問題点については、前授業時間時に、次回の授業のテーマについて問題提起し、前授業テーマを復習しながら調べるように声をかけていきたい。長所の伸長方策として、歯科医師の仕事に就いてから生きる心理学を教えるだけでなく、歯科医師国家試験の問題やブループリントを活用しながら教えることを心掛けていく。今後もこういった記述が学生からフィードバックされるよう意識して授業に取り組みたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(100%)で評価し、100点満点で65点以上の者を合格とする。再試1名、追試はいなかった。1名については再試を行い合格した。

2) 自己点検・評価

学生の能力にかなりの差が見受けられたため、定期試験範囲の練習問題を作成し復習させた。長所は、すべて記述式であったが何度も復習させたことで、勉強した学生と勉強しなかった学生の差が明らかになったこと。そのため、誉め言葉やアドバイスの効果も上がったと感じた。問題点は、記述式のみであったため、特性のある学生が記述に苦戦したこと。

3) 改善方策

問題点を解決する方策としては、授業中、学生の困り感を見逃さないように声をかけていき、場合によっては科目選択ゼミナールを活用しフォローしていく。長所の伸長方策としては、今後も学生の目標達成状況を把握しながら練習問題等積極的に実施していきたい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科医療人間学 I	第1学年
科目責任者(記載者)	中川敏浩	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標である『基本的なコミュニケーションや日常習慣の重要性を認識する態度, 知識および技能を修得する』ことを最重要として、複数の教員で分担し行った。

2) 自己点検・評価

講義毎に重要項目についての留意させながら、一般的コミュニケーションのみならず、医療現場との関連させていけるよう、事例を交えたシュミレーション的な実技も含め行った。当初は全体の前での発言、発表にはとまどうような場面もみられたが、進めるにつれて学生の意識も高まり、授業評価アンケートでは高い満足度が示された。

3) 改善方策

コミュニケーションを育成してゆくことでのグループセッションや自己表現パフォーマンスを高めることなどでは苦手あるいは不慣れた学生も見受けられたが、医療人間学は1年生から3年生までの継続科目でもあり、性急にではなく長い目で、「育てる」という意識で接してゆきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義のみでなく、挨拶から始まり、自己表現、対人対応状況などをビデオ撮影して客観的にも自覚・向上をめざす。将来の患者対応を見据え、要点をまとめ伝える力、傾聴能力を高め相手の主張、ポイントをつかむことができるよう模擬会話なども行っている。

2) 自己点検・評価

学生からの授業アンケートからは高い満足度が得られたと評価された。
コミュニケーションということに主眼をおく本科目の特殊性から、一部、学生においても積極的な者、消極的な者と温度差がみられた。

3) 改善方策

全体に向けた講義のほかには学生個人個人とより深く接することで人間性を豊かに育めるようにしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

筆記試験
自己表現のビデオ撮影

2) 自己点検・評価

ほぼ全ての学生は合格基準に達していた。

3) 改善方策

授業はAクラス、Bクラスに分け行っているが、コミュニケーション能力には個人差が大きく、不十分と思われる学生に対しては個々に時間外も利用し対応してゆきたい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	情報リテラシーⅡ	第2学年
科目責任者(記載者)	宇佐美晶信	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

コンピュータを用いて問題作成し、それを相互にブラッシュアップし、作成問題及びその関連項目について教員からの解説をおこなうことにより、歯科基礎医学の知識をより深く習得することを目標としている。

2) 自己点検・評価

学生による授業アンケートでは「3. 授業の前に予習を行いましたか」の項目で「そうは思わない」が30.6%であった。

3) 改善方策

教員からの問題解説の講義資料を事前にポータルサイトに提示したが、予習時間が確保できていないので事前の資料提示についてしっかりアナウンスしていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

問題作成、ブラッシュアップ、問題解説の3回を1つのセッションとしている。「問題作成」は教員より出された課題についてグループごとに学生個人で問題を作成し、「ブラッシュアップ」は他グループの作成した問題について行っている。「問題解説」として作成した問題に対して最終的に教員からの解説を行っている。

2) 自己点検・評価

「ブラッシュアップでは、みんなで指摘しあうことが必要だと思う」との意見があった。

3) 改善方策

コロナ禍の中での限界があるが、可能な範囲でグループ学習の要素を入れていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

3コマごとに小テストをおこない合計が65点以上を合格としている。

2) 自己点検・評価

学生のブラッシュアップ問題に対する教員からの解説を行った後にテストをおこなっているため理解を深められていると考えるので現状の評価を続けていきたい。

3) 改善方策

いまでもしっかりアナウンスしているが、テストを行う回の講義を欠席すると20%分の評価がなくなる点を一層周知したい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	英語Ⅱ	第2学年
科目責任者(記載者)	長峯 英樹	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目の到達目標は、①歯科医療分野の英語表現への慣れ、②基礎文法の復習、③英文を「訳せる」だけで満足せず、知識を英語で「吸収できる」スキルの習得、④英語によるグループ・プレゼンテーションの経験、⑤自分の意見を英語と日本語の両言語で論理的に発信するスキルの習得、の5つである。このなかで、④と⑤に関する目標については、2022年度も新型コロナウイルス感染防止の観点から割愛した。

2) 自己点検・評価

「読む」「聞く」「話す」「書く」といった4スキルのなかでも、しっかり「読む」ために語彙力と読解力の強化を強く望む学生が多く、そうした学生に対してはかなり貢献できたのではないかと思う。一方で、英語学習に対するニーズも意欲も多様であるため、学習方法も含め、学生からの質問に対し柔軟にアドバイスすることを心掛けた。

3) 改善方策

大多数の学生が、国家試験を意識した英語授業を強く希望しているため、歯科医療分野の語彙力や読解力強化に特化することが有効であると感じた。また、将来的に有用かどうかについても強く意識していることから、今後も、WHOやメイヨークリニックといった海外医療機関のHPなども教材として積極的に講義に取り入れていく必要がある。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

①基礎文法力・読解力の向上を図りつつ、専門用語や頻出語彙表現の習得、②各語彙の接頭辞や接尾辞を意識した語彙力強化、③英語でのグループプレゼンテーションの体験、の教育方法を示した。①と②は「解説は講義で、予習や復習は自宅で」という方法ではなく、授業内に覚える方針に変更。具体的には、講義60分、自主学习100分、確認テスト20分の時間配分とパターンを実施した。③は新型コロナウイルス感染防止の観点から割愛。

2) 自己点検・評価

文法・語彙、そして読解の基礎については、範囲を限定し、重要ポイントを明示したため、大部分の学生に集中的かつ効率的に学んでもらうことができた。その一方、語彙力強化には「書いて覚える」プロセスが不可欠だが、強い拒否感を示す学生がいた。また、「(確認テストの)合格基準が高すぎる」といったコメントがあったが、基準を上げたテストの場合、同一問題を1週間前には配布し、テスト直前にも復習時間を確保していた。

3) 改善方策

国家試験合格が第一の目標である学生にとって、英語に貴重な自宅学習の時間を割くのは困難である。また、学習方法がわからないといった学生も少なくない。そのため、一方通行的な講義ではなく、授業内に主体的に学ぶ時間を確保し、必要に応じて学習方法を提案し、重要表現を確実に覚えてもらう方法を今後も模索する。具体的には、講義60分、自主学习100分、確認テスト20分の時間配分で授業内に覚えてもらう。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

確認テストおよび定期試験(80%)と語彙力強化を目的とした課題提出(20%)による成績評価。

2) 自己点検・評価

確認テストや定期試験の範囲と出題意図をはっきりと明示したことから、大多数の学生は取り組みやすかったのではと思う。一方、確認テストの基準点を下回った学生への対処方法としては、好むと好まざるにかかわらず、「書いて覚える」ことの重要性を理解し、実践してもらう工夫が必要である。方法論よりも、辛抱強く継続的に行う覚悟が必要と考えている。

3) 改善方策

基準点を下回った学生に対しては、定期試験を除き、再試を行うよりも、覚える必要がある重要語彙表現を語尾や接頭辞の意味を強く意識しながら、何度も書いて覚えてもらうことを継続するしかないと考えている。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	日本語学Ⅱ	第Ⅱ学年
科目責任者(記載者)	本多真史	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験問題を解く際に必要となる読解力の基盤を確立するため、問題を正確に読み、内容をきちんと理解し、自らの考えを整理し、正しく答えられる力を修得することを目標としている。授業内容は、これに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価

目標と授業内容は合致している。また、受講生全員(休学者を除く)が合格したことから、科目の目標は達成されたと考える。

3) 改善方策

到達目標と授業内容は一致しており、変更の必要はないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義では、資料(A4冊子6枚程度を毎回配布)をもとに「参加型・実践形式」で展開した。受講者が問題文を読み(インプット)、理解し、思考して(プロセッシング)、まとめる(アウトプット)という一連の行為が円滑に行うことができるようになるための機会を設けた。受講者が問題を解いた後、教員がそれについて解説を行った。また、パワーポイントで作成した資料を毎回ユニパにあげ、復習しやすい環境を整えた。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートでは、「好奇心が刺激されたり、興味が高まったりしたか」の評価が低かった。日本語は外国語のように「使えない」と実感されることはないためか、「この科目は必要ない」との声も聞かれる。その認識を打ち壊すことができなかったことに加え、学生の知識欲に応えられなかったと思われる。

3) 改善方策

臨床の現場で必要とされる「想起>解釈>問題解決」というプロセスは、歯科医師国家試験問題を解く際に必要な読解力と通ずるものがあるなど、受講生の関心により近い内容を盛り込むようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

形成的評価の結果のみで評価した。

2) 自己点検・評価

本講義の合格率は100%であり、成績評価に関して問題ないと考える。

3) 改善方策

成績評価の改善は要しない。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理学	第2学年
科目責任者(記載者)	菊地尚志	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

物理学の基礎的な内容の歯科医学への応用を理解する。そのために1) クーロンの法則で表される原子核と電子の静電気力の効果を理解する、2) 電磁波の発生と物質との相互作用を説明する、3) 物質の弾性を分子・原子間力で説明する、4) 陽子・中性子・電子と呼ばれる基本粒子の性質を説明し、放射線との相互作用を理解する。

2) 自己点検・評価

到達目標は具体的には、歯科理工学と歯科放射線学で基礎として必要とされる物理学の内容をしっかりと伝えることにある。その点はそれら二つの科目に関してバランスよく授業できている。

3) 改善方策

目標についての改善は考えていない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

板書を中心に授業を行う。これにより学生がノートをしっかり取りながら能動的に授業に参加することを目論んでいる。ノートの内容を理解している事が「評価」になることを伝えて復習の仕方を教える。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価のアンケートを見ると、全体平均よりも推しなべて数値が低い。2年生の科目で1年から上がってきた一般選抜学生、特待生と編入生、留年生の四つの異なる背景の学生たちへ一つの授業で対応するためどうしてもそうになってしまうと判断している。

3) 改善方策

具体的な改善のためには、授業評価のアンケートで記名式にしてどの背景の学生が何を言っているかを明らかにする必要がある。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験を実施し、更に不合格者には再試験、再再試験まで行って合否判定をした。本試験ではほぼ半数の学生が不合格となったが、編入生と留年生が大部分だった。再再試験まで行って9名が不合格に残ったが、全員が他科目の複数で不合格になっていて、決して物理学が単独で大学全体の水準を超えて難しいわけではないことがわかる。

2) 自己点検・評価

概ねこの評価方法で十分に公平な評価が下せたと考えている。

3) 改善方策

評価方法については現状でいいと考えている。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	化学	第2学年
科目責任者(記載者)	阿部匡聡	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

基本的な有機化合物の構造・性質・反応についての知識・概念を習得するため、①官能基の種類により化合物を分類し、各化合物の性質・反応を説明すること ②異性体について説明し、構造式で示すこと ③置換反応、付加反応、脱離反応、酸化還元反応、ラジカル反応を説明し、反応式を記述すること ④芳香族化合物の性質・反応について、脂肪族化合物との違いを示し、説明すること、を到達目標としている。

2) 自己点検・評価

目標としては、適切であると考えている。

3) 改善方策

修正・変更は特にしない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義93%, 演習7%で、資料として、教科書と、教科書の内容を補充するためのプリントを用いた。適宜、レポート提出を課した。

2) 自己点検・評価

授業内容の質を維持しつつ、より平易な解説を行うよう努めてきた。適宜課した、レポート提出、問題演習は、授業内容の理解向上、復習、問題への対応力強化に有効であった。

3) 改善方策

口頭試問による双方向的要素の導入機会を一層増やし、一定の緊張感と、能動的に考える姿勢を持たせる。授業でとったノートを有効に活用して、復習するよう、意識づけをする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(100%)により総括的評価を行った。レポートにより形成的評価を行った。

2) 自己点検・評価

評価法としては、適切であると考えている。

3) 改善方策

定期試験では、選択式問題と記述式問題の配分比が、最適なものとなるよう、配慮する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生物学	第2学年
科目責任者(記載者)	前田豊信	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医療を行う上で必要不可欠な生物学の知識の修得と、遺伝子工学の現状を理解することで生命倫理について考えることを目標としている。そのために、①細胞の構造と機能、②代謝、③細胞間情報伝達、④中心命題と例外などを到達目標としている。

2) 自己点検・評価

昨年度の課題であった、生命倫理への考察時間は確保可能であった。しかしながら、依然として基礎的知識定着の部分が欠如している学生が散見される。この学生への対応が課題である。

3) 改善方策

知識を確認するための導入部分へ講義時間を割くことと、資料のブラッシュアップを行う事で、基礎的知識の定着に努めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

配付資料とweb資料を中心に講義を行っている。重要な項目に対しては、知識の定着と理解を深めるために問題演習を用意している。

2) 自己点検・評価

配布資料の整理しにくさと、内容の難しさが問題点としてある。

3) 改善方策

配付資料のブラッシュアップを続け、また、配付資料と異なった様式にwebページを改編・構築することで、学生への理解の定着に努めたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

客観形式問題の定期試験のみを実施して、65点以上を合格と判断している。その結果、98%の学生を65点以上と評価(単位付与)し、平均は84点(うち満点7名)とした。

2) 自己点検・評価

六年間一貫教育の中の教養科目として位置づけられる当該科目を考えると、評価方法は現状と照らし合わせると妥当であると考えられる。

3) 改善方策

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎歯学概論Ⅱ	第2学年
科目責任者(記載者)	遊佐淳子	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

専門基礎科目(口腔衛生学、口腔生化学、生体材料・歯科材料学、歯科薬理学、口腔病理学)を中心に、履修前に予備知識として知っておくべき概論や要点について講義している。

2) 自己点検・評価

歯科医師として身につけなければならない知識を習得する上で、専門基礎科目は特に重要となるため、履修前に予備知識として講義することは妥当と考える。しかし、授業評価においてまだ履修していない範囲の授業を単発で行ったりするので、意味や意義が分からないとの意見があり、必要性を示す必要があると考える。

3) 改善方策

講義の初めに基礎歯学概論の必要性を明確に示す。複数科目の講義のため各科目の講義方針を統一する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義担当者により異なるが、講義主体でスライド、プリント、板書で適宜進めている。

2) 自己点検・評価

授業評価において、科目により授業方針に差があるとの意見があり、統一がされていなかったと思われる。

3) 改善方策

講義担当者間で基礎歯学概論の目的を再確認する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験で評価し、65点以上で合格とする。試験問題は多肢選択方式である。

2) 自己点検・評価

試験問題の出題範囲は講義した内容であり、定期試験で65点以上で合格とするのは妥当である。どのような試験勉強をしたら良いのか分からないとの意見があったので試験に関する情報伝達を改善する必要がある。

3) 改善方策

各科目の授業内容から出題されることを学生に周知する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科医療人間学Ⅱ	第2学年
科目責任者(記載者)	大橋明石	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

形成的評価の結果を見る限り、シラバス記載の【一般目標】および【到達目標】を達成出来ていると思われる。

2) 自己点検・評価

現在の授業スタイルは、シラバス記載の【一般目標】および【到達目標】を達成する方法として、間違っていないと思われる。

3) 改善方策

学生から上がった要望・改善要求等が、真に必要なことなのか・真に正しいことなのかをしっかりと吟味した上で、しっかりと授業にフィードバックさせる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生による授業評価・アンケート結果および形成的評価の結果を見る限り、現在の教育方法は間違っていないと思われる。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価・アンケート結果および形成的評価の結果を見る限り、現在の教育方法は間違っていないと思われる。

3) 改善方策

学生から上がった要望・改善要求等が、真に必要なことなのか・真に正しいことなのかをしっかりと吟味した上で、しっかりと授業にフィードバックさせる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

形成的評価で100%評価しているが、結果を見る限り、現状で問題ないと思われる。

2) 自己点検・評価

形成的評価で全員が合格点を獲得しており、現評価法で問題ないと思われる。

3) 改善方策

特に改善箇所は見当たらず。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔解剖学	第2学年
科目責任者(記載者)	宇佐美晶信	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

ヒトの歯の形態、歯列咬合および口腔周囲の解剖学的構造について知識を獲得するための講義をおこなっている。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価アンケートでほとんどの項目で平均よりも高い結果が得られている。プリントの穴埋めで授業に集中できないとの指摘があった。

3) 改善方策

予習の重要性を説明して、プリントの穴埋めが事前にできるように資料を提示していきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

口腔解剖学分野作成のプリントに従い講義をおこなっている。また毎回の授業前に小テストをおこない前回の範囲の知識の定着を確認している。

2) 自己点検・評価

「毎回の小テストのおかげで勉強の習慣をみにつけたことがよかった」といった意見があった。

3) 改善方策

今後も小テストを継続していきたいと考える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期後期の各定期試験の平均が65点を超えたものを合格としている。小テスト分は各期の10%として評価している。

2) 自己点検・評価

毎週の小テストを評価の中に入れていっているので、学習習慣の修得にも効果があると考えている。

3) 改善方策

小テストの実施を継続してにより、低学年のうちに学習習慣を獲得するようにしていきたい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔解剖学実習	第2学年
科目責任者(記載者)	宇佐美晶信	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯や骨の形態を理解するために、前半は歯の形態を2次的に理解するためのスケッチと3次的に把握するための石膏彫刻をおこない、後半は頭蓋骨と体幹、四肢を含む全身の骨学実習をおこなっている。

2) 自己点検・評価

前期唯一の実習であるので、他との比較もないためコメントが少ないと考える。デモンストレーションを希望するコメントが1件見られた。

3) 改善方策

座学の進捗状況との連携を注意していきたい。学生自身の自主性を損なわない範囲で、過保護にならないようにしながら実習説明の内容については調整していきたい。以前と同じように実習を進めると、ついてこれない学生が出てくるであろうと考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

歯の形態を理解するために前半7回にスケッチおよび石膏彫刻をおこなっている。骨学実習では骨標本の各部位の確認をおこなっている。

2) 自己点検・評価

全項目で、評価点は全体よりも高い結果であった。

3) 改善方策

専門科目最初の実習として、苦手意識などを生じさせないようにしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

歯の解剖における彫刻と骨学実習における該当箇所の「口腔顎顔面解剖ノート」の提出物と態度点で評価した。

2) 自己点検・評価

評価基準についての説明をおこなっているため、成績評価に関して否定的な意見はみられなかった。

3) 改善方策

欠席が多い学生に対する配慮を検討していきたい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	解剖学	第2学年
科目責任者(記載者)	宇佐美晶信	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

人体の正常な形態と構造に関する知識を講義している。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価アンケートで、「前期範囲との関連もしっかり意識されており、十分な工夫が為された講義だと感じる」というコメントをいただいた。

3) 改善方策

学生の学修に役立つように、今後も工夫を重ねていきたい。しかし、学生の評判を気にしすぎて、うわべを飾り立てて、結果を出せない科目とならないよう自制しても行きたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

口腔解剖学分野作成のプリントに従い講義をおこなっている。また、毎回の授業前に小テストをおこない前回範囲の知識の定着を確認している。

2) 自己点検・評価

「資料をデジタル化してほしい」というコメントがあった。

3) 改善方策

講義資料のデジタル化に関しては、本学では講義時間中の電子機器の利用を認めていないので、大学の方針に従って対応していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期、後期の定期試験の平均で65点を超えたものを合格としている。小テスト分は各期の10%の評価としている。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価アンケートに「小テストがあり、勉強をしっかりとできた」とあり、当科目の評価方法は学生の学習習慣確立に貢献していると考えます。

3) 改善方策

小テストを成績評価の10%とする評価方法を継続していきたい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	解剖学実習	第2学年
科目責任者(記載者)	宇佐美晶信	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

人体を用いた解剖実習により解剖学の講義で学んだ知識を深めるだけでなく「医の倫理」や「死者への尊厳」を修得めざしている。

2) 自己点検・評価

学生アンケートでは全項目では、幸うじて平均よりも高い結果が得られている。

3) 改善方策

学生の学力、モチベーションが変化している最近の傾向に応じて、実状に合った実習内容を模索していく必要があると考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

特に頭頸部を中心とした人体解剖実習をおこなっている。

2) 自己点検・評価

改善して欲しい点として、これまで同じプリントを用いて実習をしてきたが、初めて「もう少し丁寧な説明があってもいいと思う」という記述がみられた。

3) 改善方策

「プリントに当たり前のように「〇〇を開く」などと書いてあるが、私たちにとっては初めてなのだからもう少し詳しく書いてあったり、説明があってもいいと思う」と書いてあり、文章をより分かりやすくしたり、必要に応じてルビを振るなどの工夫を検討したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

各回の実習内容を次回の小テストを70%、各班が実習期間中に1回行う発表と態度点を各15%として評価を行い、総計が65点以上のものを合格としている

2) 自己点検・評価

否定的なコメントはみられなかった。

3) 改善方策

必要な改良点が見いだされた場合には対応していく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔組織学	第2学年
科目責任者(記載者)	安部 仁晴	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標を『疾病を治療対象とした基礎知識を得るために、細胞と組織、人体諸器官、さらに歯と歯周組織をはじめ口腔諸器官の正常構造と微細構造を機能と結びつけ、それらの発生過程、加齢変化を理解する。』として、4つの到達目標を設定し、基本的な知識の習得と他の基礎系科目や臨床系科目と結びつけることが出来るような思考の修得を心がけ、複数の教員で分担して講義を行った。

2) 自己点検・評価

集計項目のすべてで平均を上回っており、到達目標と講義内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、成績評価や総合試験の結果から、到達目標に合致した講義内容であるか考える必要がある。

3) 改善方策

集計項目のすべてで平均を上回っており、到達目標と講義内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、講義担当者間で、コアカリや国家試験基準に沿った到達目標の内容であるか、到達目標に合致した講義内容となっているか、話し合い精査する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教員によって細かな教育法は異なるが、基本的に配布資料(講義プリント)の作成、予習と復習のために授業資料提示システムを使い、資料をアップロードすることを講義担当者に統一していただいた。また、教育内容では、形態学を理解しやすくするために、写真や模式図を数多く取り入れて講義するよう心がけた。

2) 自己点検・評価

集計項目のすべてで平均を上回っており、『わかりやすい』との意見が多かったことから、教育方法は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、自由記載欄にある講義者の話し方については、注視したい。

3) 改善方策

昨年度まで予習する学生の割合が少なかった点は、講義資料を授業資料提示システムに事前にアップロードしてある事を学生に周知したため、今年度は解消された。自由記載欄にある講義者の話し方については、気を配るように進言する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

講義時間数に応じて、前期中間試験、前期定期試験、後期中間試験、後期定期試験の4回の記述試験を設定した。各試験では、不合格者と希望者に対して、再試験を1回行った。この4回の試験の平均をもって成績評価とした。

2) 自己点検・評価

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も75点以上であった。しかし、合格基準に達しなかった学生も17%いた。この学生に対する対処として、科目選択ゼミの時間を使い、試験のフィードバックを行った。

3) 改善方策

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も高かったことから、次年度も変更する必要はないと考える。しかし、合格基準に達しなかった学生に向けて、試験のフィードバックのみならず、再度、重要事項を説明する機会を設ける。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔組織学実習	第2学年
科目責任者(記載者)	安部 仁晴	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標を『人体と口腔諸器官における特徴と機能を理解するために、光学顕微鏡を用いて、細胞、組織の正常構造、歯と歯周組織をはじめとする口腔諸器官の正常微細構造、それらの発生過程の知識を修得する。』として、6つの到達目標を設定し、基本的な知識の習得と他の基礎系科目や臨床系科目と結びつけることが出来るような思考の修得を心がけ、複数の教員で分担して実習を行った。

2) 自己点検・評価

集計項目のすべてで平均を上回っており、到達目標と実習内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、成績評価や総合試験の結果から、到達目標に合致した実習内容であるか考える必要がある。

3) 改善方策

集計項目のすべてで平均を上回っており、到達目標と実習内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、担当インストラクター間で、コアカリや国家試験基準に沿った到達目標の内容であるか、到達目標に合致した講義内容となっているか、話し合い精査する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習開始時に、その日の課題の説明(標本の顕鏡ポイント、講義内容の復習と実習内容の関連性等)を行い、学生全員が当日の課題に取り組みやすくなるようにした。また、学生を少人数のグループに分け、各グループに担当インストラクターを配置することで、学生一人ひとりにきめ細やかな指導が出来るようにした。

2) 自己点検・評価

集計項目のすべてで平均を上回っており『講義と実習の関連性が理解できた』との意見もあり、教育方法は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、担当インストラクター間の評価基準を指摘する意見があったことは今後修正したい。

3) 改善方策

4名の担当インストラクター間で、実習内容とリクワイアメントの判定基準を明確にすり合わせる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実習内容から一般組織学と口腔組織学に分け、記述式の試験を行った。各試験では、不合格者と希望者に対して、再試験を1回行った。この2回の試験の平均点(80%)と実習課題の終了状況をリクワイアメント票(20%)とし、合わせて成績評価とした。

2) 自己点検・評価

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も85点以上であった。しかし、合格基準に達しなかった学生も数名いた。この合格基準を満たさなかった学生に対する対処として、科目選択ゼミの時間を使い、試験のフィードバックを行った。

3) 改善方策

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も高かったことから、次年度も変更する必要はないと考える。しかし、合格基準に達しなかった学生に向けて、試験のフィードバックのみならず、再度、重要事項を説明する機会を設ける。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生理学 I	第 2 学年
科目責任者(記載者)	川合宏仁	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生命現象を営む生体の機能について説明できるよう生物物理学的、細胞生物学的、組織学的、解剖学的知見を解説した。各器官の協調活動、歯科疾患の病態生理およびそのトピックスを説明できるように総合的に講義を行った。

2) 自己点検・評価

重要事項を説明できるようにするという到達目標では、与えられた選択肢の中から選んだり、ヒントが与えられれば何とか答えられる(説明できる)という学生が大半であった。

3) 改善方策

基本的事項をさらに絞って重点的に学習させることでより深い内容理解につなげるようにする。講義中に関連する既習事項もより多く上げることで効率的に学習できるようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

黒板への板書を基本とし、補助教材としてプリントを配布した。また、より効率的内容を理解させるため、双方向性で、講義中に質問を行った。

2) 自己点検・評価

学生が集中して講義に入り、講義中も折に触れて講義に追いつけるよう工夫しているが、学生によっては不要と感じているかもしれない。

3) 改善方策

コロナ禍で積極的に相補的な授業ができなかったが、講義中の学生への質問を意識的に増やし、意識の低い少しでも授業に参加させるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期1回と後期2回の試験の平均点で及第点に達していること、さらに各試験の点数が及第点に達していることが合格基準である。及第点にたせず再試験を受験する学生の顔ぶれがだいたい固定されている。

2) 自己点検・評価

年間で3回の試験で、各試験の不合格者に再試験を課しているため、成績不良者への配慮としても十分と考える。

3) 改善方策

問題を解くために必要な思考や知識の要素を説明させ、それを試験に出題するなど。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生理学実習	第2学年
科目責任者(記載者)	川合宏仁	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生理学の諸機能について測定・説明ができる。

2) 自己点検・評価

多くの学生にとっては、講義内容の良いフィードバックの機会となった。ただ、項目によっては講義日程と実習との時間が離れているため、講義内容をまったく覚えていない学生も見受けられた。

3) 改善方策

実習時間内の作業が多い項目もあるので、実習時間内かその直前に講義内容を再確認する時間を取るが必要があるかもしれない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実際に実習に参加させて、体験させている。

2) 自己点検・評価

学生の中には、感染対策上の無理難題を言う学生さんがいたり、また、実際に臨床的な検査や臨床業務の実習も体験させている。こうしないと、学生の記憶に残るような講義や実習として成り立たなくなる。

3) 改善方策

体験学習は決して省いてはいけませんので、それを理解して頂くために、地道に説明するしかないと思う。また、実際に国試問題として出題されていることも伝える必要があると考える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実習課題の6項目について、各々の項目で、実技点、レポート点、知識点(実習試験)の合計点を出し、平均点を割り出して合否を判定する。

2) 自己点検・評価

実習に出席し、実習を自分で行うことが必要な仕組みになっているので、問題ないと思う。

3) 改善方策

現在のところ、特に問題はないが、レポート提出と2回の実習試験が重なり、この点に関して、単純化できる方法を模索している。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生化学 I	第 2 学年
科目責任者(記載者)	加藤靖正	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生体を構成する成分や機能について、個々の理解と相互作用について理解する。疾患の成因についても理解を深める。下記項目について説明できるようになることを到達目標とする。

- ・生体を構成している主な物質の分子構造と機能について説明できる。
- ・遺伝情報の保存と発現
- ・代謝における酵素の働き

2) 自己点検・評価

40.3%の学生が予習しておらず、43.8%の学生が復習していない結果となった。ただ、予習をしていない割合は、前年64.3%から改善されており、授業に対する姿勢が向上した。知的好奇心については、70.2%が肯定的に評価していた。科目平均ポイントは、前年度2.84だったのに対して、3.06(全体平均3.33)と向上した。

3) 改善方策

個別意見として3年の範囲との関連性の低さを指摘した意見があり、講義ではその都度説明していると思うが伝えきれていないのかもしれない。また、知的好奇心が刺激されなかった学生は約4割おり、興味がなければ学習意欲は上がらないので、具体例を多用して知的好奇心の向上に努める。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

パワーポイント主体で練習問題を提示した教員1名と板書主体の教員1名で分担した。

2) 自己点検・評価

パワーポイント主体の講義は概ね好評で、板書主体の講義については、歓迎する積極的な意見と板書量など面から批判的な意見が見られた。練習問題を増やすことの意味もなされた。前年度比で目標に到達できない学生が増加した。知的好奇心を増加させるように話しているのが、教員の自己満足としてとらえていたが学生がいたことは問題である。授業の熱意や工夫についてのポイントは、3.05から3.16へ向上した。

3) 改善方策

資料提示に関しては、毎年バージョンアップする。板書については、内容の厳選、レイアウトの工夫に務める。練習問題や話題提供についても内容をより厳選する。丸暗記で通るような試験を改めとの個別意見がなされたが、そのような事実はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

五肢選択問題による本試験で65点以上を合格とした。

2) 自己点検・評価

正答率30%未満の問題については、正答した学生は採点対象とし、誤答した学生に対しては、総問題数に含まない措置を講じて採点をしている。

3) 改善方策

特に問題点は見いだせないなので、今後も継続していく。

2022年度 授業の自己評価票

授業科目・対象学年	口腔感染免疫学 I	第 2 学年
科目責任者(記載者)	清浦有祐	

調査実施年月 2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標は「1) 微生物の種類とその特性を説明する。2) 病原微生物の病原性を理解する。3) 滅菌、消毒及び化学療法について説明する。4) 微生物感染に対するヒトの免疫応答を理解するである。目標を実行するために、授業は学生が興味と関心を持ち、理解しやすいように丁寧に進めた。

2) 自己点検・評価

2022年度の成績から考えて、この科目の到達目標を達成させることができたと考えられる。しかし、合格点に達しなかった学生がいることから、改善も必要である。本科目は多くの種類の病原微生物を理解すると共に宿主の感染防御機能までを理解する必要があることから、理解しやすく勉強意欲が高まる授業が必要となる。

3) 改善方策

講義項目の組立てをよく吟味して、各コマで1つのまとまりを持つ内容とする。学生の理解度を高めるための視覚素材をさらに充実させ、学生の向学心を高めて、一方的に教員の側だけの授業とならないようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書・教科書の内容を分かりやすくしたプリントに加えてパワーポイントによるスライドを加えて、丁寧でわかりやすい講義を行うことを意識している。プリントには演習問題も記載して、学生が自身で講義内を理解したか否かの確認を行えるようにした。

2) 自己点検・評価

講義プリントの内容をよりわかるやすくものにして、学生の復習を助けた。また、授業においてもより理解度が高まるように工夫した講義を行った。さらに、理解度の確認に関して、確認テストを実施することで授業の理解を確認してきた。そのことによって、理解度が低いと判断された項目については再度理解を深めるように授業を行った。

3) 改善方策

理解度が低いと考えられる項目については、講義の話した方やプリント記載をさらにわかりやすくすることで改善を行う。また、スライドなどの視覚教材もさらに見やすく理解しやすいものに改善する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績評価は授業概要の記載に従って、65点以上を合格として定期試験の成績(100%)によって評価した。定期試験は記述問題と多肢選択方式の問題の2つが含まれる。

2) 自己点検・評価

成績評価については、現状のままでも特に大きな問題はないと考える。

3) 改善方策

成績評価では、特に改善すべき点は無いと考える。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科薬理学 I	第2学年
科目責任者(記載者)	鈴木 礼子	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科薬理学を学修する上で土台となる薬理学総論、すなわち、薬理作用(薬力学と薬物動態学)の基本的理論の修得を目指した授業と試験を実施した。

2) 自己点検・評価

後期15回の講義で、薬理学総論、特に2学年のうちに、しっかり修得してほしい事項は、伝えることができた。「学生による授業評価」の結果からも、こちらが修得してほしいことは、大部分の学生にも伝わったと考えられる。しかしながら、同時に、「歯科薬理学」という科目そのものに全く興味・関心が持てなかった学生が3名程いたことも窺えた。この層の学生へのアプローチには、改善の余地がある。

3) 改善方策

講義の体系は、現状を維持するが、授業実施の面で、より学生が歯科薬理学に親しみをもてるような、実例などを盛り込むことを、更に意識していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

指定教科書の内容を、より平易に説明し、わかりやすい図などを補足した「解説プリント」と、「問題演習プリント」の2種類を配布した。授業では、「解説プリント」でインプットすべき重要知識を明示した後、「問題演習プリント」の例題で知識のアウトプットの仕方を伝えた。更に、「問題演習プリント」の例題の後ろに、その項目のポイントをまとめ、穴埋め方式で復習できるようにした。

2) 自己点検・評価

「学生による授業評価」では、「わかりやすく、見やすい資料」、「わかりやすい授業」との評価を得た。また、講義の総まとめとして、過年度に実施した試験問題を用いた「まとめの問題演習」を行なったのが、好評であった。従って、講義資料や授業実施の面で、意欲のある学生にとって意義のあるものにできたと考えられる。一方、プリントに記入することで学修したつもりになる学生も散見されたのは問題である。

3) 改善方策

今後も、改訂を重ねて、よりわかりやすい資料作成や、わかりやすい授業実施に努めていく。また、授業中にプリントに記入して、わかったつもりになるのではなく、自分で内容をきちんと説明できるようになることが重要である旨を、強調していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

後期15回の科目なので、後期定期試験100%で評価し、100点満点中65点以上で合格とした。

2) 自己点検・評価

授業中、及び、掲示で「勉強の仕方」を明示し、「過去問の正答を丸暗記しても、理解していなければ点数には結びつかない」ことも繰り返し伝えた。その結果、最近の歯科医師国家試験の傾向に合わせて設問のタキソノミーを上げたにも関わらず、追再試験終了時平均点が昨年度とほぼ同じであったことは、注意喚起の効果が現れたと考えられる。しかし、再試験になってから頑張る学生が少なからずいたのは問題である。

3) 改善方策

早い時期から「勉強の仕方」を明示し、かつ、「過去問の正答を丸暗記しても、理解していなければ点数には結びつかない」ことも繰り返し伝えていく。また、毎回の授業に出席して、しっかり説明を聞き、疑問点はその日のうちに解決することが重要である旨も、繰り返し強調していく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	公衆衛生学	第2学年
科目責任者(記載者)	小林美智代	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標:学修者が歯科医師として必要な公衆衛生的な考え方を学び、社会や環境が求める必要性に対して的確に対応し解決できる能力を身に付ける。

到達目標:①健康の概念と予防の段階を説明できる。②疫学の研究方法とその活用を説明できる。③感染症の成り立ちとその予防策を説明できる。④公害や地球環境破壊と健康との関わりを説明できる。⑤人口構造の変化と疾病構造との関連を説明できる。

2) 自己点検・評価

④のように覚える事柄がはつきりしているもの、②の疫学のように答えが一つで、計算で解答が得られるものは目標に達している。

それに対し、①のように概念的で複数の選択肢から一つに絞るのが難しいもの、③のように、感染免疫や外科など複数の科目の知識が必要なもの、⑤のように歯科との関連が想像しにくいものは到達目標に達していない。

3) 改善方策

①に関しては、問題を解いて解答を理解していくことが重要であると考え。問題を解き、正答を理解する時間を作っていく。

③に関しては、学習すべき範囲を広げず公衆衛生的に覚えることを明確にして学習を促していく。

⑤に関しても、学習すべき範囲を広げすぎないようにして、覚えてほしいところを明確にして学習を促していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

2022年度授業評価集計結果から、全体平均より点数が高かった事項は以下の5点である。①シラバスに沿って進化したか。②授業の目的が説明があったか。③授業の準備がしっかりしていたか。④授業の工夫が感じられたか。⑤重要事項や必要性が理解できたか。

全体平均より低かった事項は以下の5点である。⑥自らシラバスを確認したか。⑦予習を行ったか。⑧興味が高まったか。⑨質問はできたか。10復習を行ったか。

2) 自己点検・評価

2021年度授業評価集計結果も⑥~10に関して全体平均より低かった。比較すると、2022年の評価の結果は、若干の改善が認められた。

教育方法の現状の分析から、今後の問題として講義内容の向上はもちろんのこと「予習」「復習」「教員への質問」への心理的なハードルを下げて、学生に促すことが必要だと思われる。

3) 改善方策

2022年は対策として講義資料にシラバスの内容を記載した。さらにインターネットを利用し、匿名で気軽に質問できる環境を作り、さらに講義で行った問題を携帯電話で確認できるような工夫を行った。この試みは学生にも好評であった。その結果、2021年と2022年の集計結果を比較すると、⑥、⑨、10は改善された。引き続き「教員への質問」と「復習」をしやすい環境を構築していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(100%)で評価し、65点以上を合格とする。2022年度の公衆衛生学定期試験の全体の平均点は71点であった。上位25%の平均は92点、下位25%の平均は49点であった。本試験で63名中22名が65点以下で追試験となったが、ほぼ同じ難度の再試験において平均は78点であり上位25%の平均が97点、下位25%の平均が58点であった。

2) 自己点検・評価

本試験の上位25%の(17人)の平均が92点であったことからして、試験問題の内容は講義に沿ったもので、適切であったと思われる。

また、再試験においても上位25%(6人)の平均が97点であったことから、本試験で基準に達しなかった学修者も勉強時間を確保できれば十分に学習目標に達することが期待できることがわかった。

3) 改善方策

定期試験前に十分な時間を取れば、本試験で不合格となった22人のうち半数は合格点に達することが可能だと考えられる。

毎回の講義の知識の定着をはかるため、講義の冒頭での小試験等を検討していく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科医療管理学	第3学年
科目責任者(記載者)	大橋明石	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

定期試験の結果を見る限り、シラバス記載の【一般目標】および【到達目標】を達成出来ていると思われる。

現在の授業スタイルは、シラバス記載の【一般目標】および【到達目標】を達成する方法として、間違っていないと思われる。

3) 改善方策

学生から上がった要望・改善要求等が、真に必要なことなのか・真に正しいことなのかをしっかりと吟味した上で、しっかりと授業にフィードバックさせる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生による授業評価・アンケート結果および定期試験の結果を見る限り、現在の教育方法は間違っていないと思われる。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価・アンケート結果および定期試験の結果を見る限り、現在の教育方法は間違っていないと思われる。

3) 改善方策

学生から上がった要望・改善要求等が、真に必要なことなのか・真に正しいことなのかをしっかりと吟味した上で、しっかりと授業にフィードバックさせる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験で100%評価しているが、試験の結果を見る限り、現状で問題ないと思われる。

2) 自己点検・評価

本試験の平均点も85%を超えており、現評価法で問題ないと思われる。

3) 改善方策

一人でも多くの学生が本試験で合格できるよう、1問でも多くの問題に正解できるよう、得点アップに繋がるよう、更に授業の質を高める。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	社会歯科学	第 3学年
科目責任者(記載者)	南 健太郎	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師として、必要な法的知識、社会保障制度、社会の変化やニーズに対応させ、CBT合格を目指した昨年同様の講義内容とした。

2) 自己点検・評価

CBT対策と国家試験対策に良いと評価があった。

3) 改善方策

次年度も同様な講義内容を実施。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生が歯科医師として稼働するために必要な法的知識と社会制度を、自宅でも復習できるように講義スライド資料と、CBT対策オリジナル問題を配布。

2) 自己点検・評価

試験同様に問題を解かせるので、実践練習になり、CBT対策としては有用である。

3) 改善方策

今年度、問題演習を実施してから解説というスタイルであったが、次年度は解説を実施してから問題を行う予定。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験65%以上で合格とする。

2) 自己点検・評価

定期試験はマルチプルチョイス。この形式で問題ないとする。

3) 改善方策

この試験形式で次年度も継続する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科医療人間学Ⅲ	第3学年
科目責任者(記載者)	清野 晃孝	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

ホスピタリティーマインドに加えて患者中心の医療を全人的に捉えるために基本的なコミュニケーション能力を習得するための演習を実践している。

2) 自己点検・評価

医療事故を題材に小グループにより、KJ法および二次元展開法を作成し、発表することにより人間性を涵養する機会を設けている。後期のOSCE課題体験演習で、4年次の共用試験に備える心構えと概要を理解出来ていると思われる。

3) 改善方策

臨床での医療面接を想定し、コミュニケーション能力の向上に努めるよう、双方向の教育を実践する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

前期は、日本語の本多先生とボイスプロの吉田先生、鈴木先生により医療面接を想定し、言語・非言語のコミュニケーションを実践することとしている。また小グループによるKJ法・二次元展開法の作成さらに発表を行っている。

2) 自己点検・評価

1年生、2年生で行ってきた言語・非言語のコミュニケーション能力をアップデートすることに繋がっていると思われる。また小グループによるKJ法・二次元展開法の作成さらに発表により、能動的な学習を実践できたものとする。

3) 改善方策

多くの学生からは、授業中のパソコンの使用を希望しているようであり、要検討事項と考える

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

本多先生担当は学年平均87、ボイスプロ担当は86であり、高点数といえる。

2) 自己点検・評価

学年平均値87.2であり、教育効果はあったと考える。

3) 改善方策

言語・非言語のコミュニケーションと能動的学習を積極的に実施する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生理学Ⅱ	第3学年
科目責任者(記載者)	川合宏仁	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

2学年に引き続き、顎、顔面、口腔領域を含めた生命現象の基本的な機能について全般的に理解させることを目標とした。

2) 自己点検・評価

全体的には、到達できていると考える。特に、授業への参加意識の高い学生には興味を深める内容の授業が提供できた。

3) 改善方策

中間試験の範囲提示が、例年に比べて少し遅れたかもしれない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

資料やプリントを渡し、知識の伝達を正確に行うことを主眼にした。

2) 自己点検・評価

説明や模式図に対し、ある程度好評を得た手ごたえを感じた。

3) 改善方策

中間試験の解説に誤りがあるとの指摘を受けたので、確認してから渡すようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期1回で及第点に達していることが合格基準である。及第点に達していない場合には再試験を1回行っている。

2) 自己点検・評価

半年間で1回の試験で、不合格者に再試験を課しているのが、成績不良者への配慮としても十分と考える。

3) 改善方策

現行でのままでよいと考える。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生化学Ⅱ	第3学年
科目責任者(記載者)	加藤靖正	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

細胞外基質分子、硬組織、唾液及び齶蝕について、構造と機能について学修する。また、染色体異常、遺伝形式と病態の基本的事項について学ぶ。

下記項目について説明できることを到達目標とする。

- ・細胞外基質分子の構造と機能
- ・硬組織の構造と機能

2) 自己点検・評価

37.5%の学生が予習しておらず、32.5%の学生が復習していない結果となった。予習しない学生は、対象学生が2年次に受講した口腔生化学Ⅰの時は64.3%であったので、大幅に改善しており、受講するうえでアドバンテージとなったと推察される。知的好奇心を刺激された割合についても2年次59%から75%と上昇しており、学力の向上の一因になったものと考えられる。科目の平均は3.21(全体平均3.35)であった。

3) 改善方策

個別意見としてこれまでの内容との継続性について指摘した意見があり、講義ではその都度説明していると思うが伝えられていないのかもしれない。その事実を念頭に置き改善に努める。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

パワーポイント主体で練習問題を提示した教員3名(非常勤講師のzoom講義を含む)と板書主体の教員1名で分担した。

2) 自己点検・評価

パワーポイント主体の講義は概ね好評であった。問題提示も好評であった。2年生と異なり板書主体の講義についても字が大きくて見やすいや板書そのものの解説がわかりやすいなど肯定的な個別意見がなされた。その一方で板書については次のような改善点を指摘する意見もみられた。プリントへの変更、教科書に対応していない部分のサポートなど。国家試験を中心とした内容を要望する個別意見も見られた。

3) 改善方策

資料提示に関しては、毎年バージョンアップする。現在用いている教科書(学建書院)での記載のない(少ない)部分に関しては、医歯薬出版の内容を用いているのだが、その部分に関するサポートを強化する。板書については、引き続き内容の厳選、レイアウトの工夫に務める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

四肢選択問題による本試験で65点以上を合格とした。

2) 自己点検・評価

正答率30%未満の問題については、正答した学生は採点対象とし、誤答した学生に対しては、総問題数に含まない措置を講じて採点をしている。

3) 改善方策

特に問題点は見いだせないなので、今後も継続していく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生化学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	加藤靖正	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生体を構成する基本的な物質、医学的に重要な血液検査項目、さらに遺伝子の解析方法などについて理解を深める。次の項目についての修得を目標とする。
測定機器の取り扱い方、測定法の原理と特異性の理解、生体構成物質の基本的な取り扱い方、測定した結果のまとめ方とその意味の考察など。

2) 自己点検・評価

教員の熱意・工夫に関しては、68.4%がポイント4をつけ、教員の授業準備に関しては、65.8%がポイント4をつけた。全く予習しなかったとした学生(ポイント1をつけた学生)は、12.8%であったが、昨年度23.7%より減少した。しかしながら、まったく復習しなかった学生は前年5.3%だったのに対し、10.3%に上昇した。科目平均ポイントは、3.30(全体平均3.35)。

3) 改善方策

今後も継続していく。復習の必要性については、習慣づけられるように喚起していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

新型コロナウイルス感染防止拡大防止対策として実際の実習は行わずに実験手順の動画を見たのち、演習を行う形式で進めた。動画については、大変好評であった。また、3回の実習試験の前には、関連事項の講義を行い、試験直前には振り返り学習の時間を設けた。実習日ごとにレポート提出を課した。

2) 自己点検・評価

動画、実習の進め方など大変好評であった。

3) 改善方策

今後も継続していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

記述、多肢選択などによる出題形式の試験を3回実施し、その平均を70%、レポートを30%として65点以上を合格とした。

2) 自己点検・評価

65点に満たない学生に対しては、レポート提出をさせ、その成績をもって合格とした。

3) 改善方策

特に問題点は見いだせないなので、今後も継続していく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔病理学	第3学年
科目責任者(記載者)	遊佐淳子	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

疾病を総括的に理解するために病理学総論を講義し、それに引き続き歯科臨床における疾病を理解するために、病理学各論(口腔病理学)を講義している。

2) 自己点検・評価

口腔病理学は臨床歯学に深く関連するので、臨床歯学を学ぶ前には口腔病理学を充分理解している必要がある。そのために口腔病理学を学ぶ前には病理学総論として疾病を総括的に講義し理解した後に口腔領域の疾患を講義することで、到達目標を達成することができる。

3) 改善方策

病理学総論を理解できたことを確認し、病理学各論(口腔病理学)の講義を行う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

スライド投影を用いた説明を主体とした講義を行っている。また、講義プリントを配布している。

2) 自己点検・評価

授業評価において配布している講義プリントの文字の大きさを統一して欲しいという意見があったが、わかりやすく良かったという意見もあり、講義プリントの配布は良かったと思われる。授業に関しては、進むスピードが早く、スライドの見逃しがあったとの意見があり、改善が必要である。

3) 改善方策

プリントに関しては、教員間でブラッシュアップを行い統一性のあるプリントを作成する。講義に関しては、次のスライドに進むときは一言かけるなどして学生の状況を把握し講義を進めるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期及び後期定期試験がともに65点以上で合格とする。最終評価は前期と後期の平均点としている。

2) 自己点検・評価

前期は病理学総論、後期は病理学各論が範囲であるため、それぞれが65点以上で合格とするのは妥当である。

3) 改善方策

通年科目であるため、前期試験範囲も後期定期試験後の再試験時に行うことになるため、前期試験で65点未満の場合は中間試験を行い、前期範囲を勉強するような状況にする。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔病理学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	遊佐淳子	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

顎口腔領域の病変を的確に診断できるようにするために、諸病変の病理組織像を理解し、それを説明できるようになるための実習を行っている。実習前半では病理学総論で学んだ各病変を緒臓器において観察し、後半では病理学各論で学んだ顎口腔領域の病変を実習している。

2) 自己点検・評価

座学と同様に、病理学総論と病理学各論に分けて実習を行うことで、講義で説明された病変がどのような病理組織像を示すかを学ぶことができ、理解度を高めることができる。

3) 改善方策

実習時に座学との関連性を明確に示しながら、実習を進めるようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

病変部画像が印刷されたスケッチ用紙を配布し、その画像を用いて病理組織像の説明を書いたレポートを作成する。レポート作成のために、最初にスライド投影を用いた説明を行っている。また、説明すべき内容をまとめたプリントを配布している。

2) 自己点検・評価

授業評価において説明が詳しくわかりやすい。また、配布資料が見やすいとの意見があり、レポート作成前に説明を行いかつプリント配布をすることは良かったと思われる。

3) 改善方策

よりわかりやすく理解しやすいように、スライドやプリントを改良し作成する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実習試験(80%)と小テスト(20%)で評価し、65点以上を合格とする。実習試験と小テストは画像をスライド投影している。

2) 自己点検・評価

スライド投影により試験を行うことはCBT対策のためにも妥当であると考えている。しかし、授業評価により試験の画像が見づらかった等のスライド投影に関する意見や試験時間が短かった等の意見があり、改善の必要がある。

3) 改善方策

鮮明な画像によるスライド作成をする。また、座席によりスライドの見え方に差があることを考慮し、スライド投影による試験だけでなく、画像を印刷した紙媒体での試験を行う。

2022年度 授業の自己評価票

授業科目・対象学年	口腔感染免疫学Ⅱ	第3学年
科目責任者(記載者)	清浦有祐	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標は「1)微生物感染に対する免疫応答を説明する。2)免疫応答に関係する細胞性因子を説明する。3)免疫応答に関係する液性因子を説明する。4)齲蝕と歯周病の原因菌を説明する。5)齲蝕と歯周病が起こるメカニズムを説明する。」である。到達目標を実行するために、授業はわかりやすく丁寧に進行させて、到達目標の達成に努めた。

2) 自己点検・評価

2022年度も昨年度と同様に前期の中間で中間試験を行うことで、理解度の低いと判断される箇所を明らかにして、その部分を再度丁寧に授業を行った。なお、新型コロナウイルス感染症が拡大している状況に配慮してワクチン・ウイルス感染症は特に重点的に授業を行い学生の理解を深めることができたと考える。

3) 改善方策

新型コロナウイルス感染症が拡大する影響の中で、それを免疫学を理解させるための材料として授業を行った。具体的にはウイルス感染の際のヒトの防御反応やワクチンの効果についてわかりやすく授業を行った。そのため、免疫学を学ぶ際に最も重要な免疫学を1つの体系として理解することができたと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書・教科書の内容を分かりやすくしたプリント・板書の3つを基本に丁寧に分かりやすい授業を行っている。授業後は新型コロナウイルス感染防止のために、昨年度と同様にメール及び電話での質問対応を行った。また、ワクチン接種や外出・行動制限などの時事問題を授業の際に取り上げて学生の向学心に訴えた。

2) 自己点検・評価

新型コロナウイルス感染症を授業で取り上げることで、昨年度まで様々な試みを行ってきた1つのストーリーとしての免疫学を学ばせることが達成できたと考える。今後も感染症に対して学生が大きな関心を示す事例を積極的に取り上げることで、到達目標を達成する大きな要素になると考える。

3) 改善方策

新型コロナウイルス感染症・サル痘・トリインフルエンザなどの感染症に関する時事問題を積極的に授業で取り上げることで学生の授業への参加意欲と勉学意欲を向上させる。このことで免疫学を体系化して学生自身が積極的に学ぶことができると考える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績評価は授業概要の記載に従って、65点以上を合格として定期試験と中間試験の成績の平均点で評価した(100%)。試験は記述問題と多肢選択方式の問題の2つが含まれる。

2) 自己点検・評価

成績評価については、現状のままですべて大きな問題はないと考える。

3) 改善方策

成績評価では、特に改善すべき点は無い。

2022年度 授業の自己評価票

授業科目・対象学年	口腔感染免疫学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	清浦有祐	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標は「1)細菌と真菌の取扱いに関する手技を説明する。2)細菌と真菌の基本的な形態を説明する。3)薬剤の細菌への効果を知ること、化学療法の原因菌の性状を説明する。4)齶蝕と歯周病の原因菌の性状を説明する。5)ヒトの生体防御のメカニズムを説明する。」である。実習開始前には当日の実習内容の理論的背景を丁寧にわかりやすく講義して実習の理解を高めた。

2) 自己点検・評価

2022年度最終成績評価で不合格者は0名であったことから、到達目標をほぼ達成することができたと思う。実習レポートについても記載内容に改善が認められた。これは実習講義で実習結果を考えるためのヒントも含めた内容を教授した成果と考える。

3) 改善方策

実習前の講義で実習内容の理論的背景を話し、なぜその実習を行うのか、その結果からどのようなことが考えられるのかを学生自身が考えられるように指導することはそのまま良いと考える。講義で考えるためのヒントに関しては、より深い考察を学生ができるように工夫して教授する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習書・実習内容を分かりやすくしたプリント・板書・実習デモンストレーションの4つを基本にしたが、2022年度は新型コロナウイルス感染対応のため、前年度と同様に唾液・歯垢の採取を行う実習は中止となり、教員側のデモンストレーションのみとなった。しかし、この部分については実習講義で解説することで補った。

2) 自己点検・評価

教育方法に関しては、2022年度の成績結果から大きな問題はないと考える。特に実習レポートで改善が認められたことは、実習講義が意義あるものになっていると考えられる。しかし、今後もさらに実習の内容と意義を学生が理解できるように心がける。

3) 改善方策

実習前の講義を単なる実習内容の説明ではなく、考察につながるような考え方のヒントなども教授していく形にしていることで実習レポートの改善が認められたので、これを継続する。当然、そこには2022年度の実習において実習試験の結果から学生の理解が不十分であった箇所は、より理解しやすいように実習講義の改善を行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績評価は授業概要の記載に従って、筆記試験と実技試験の結果(40%)と提出されたレポートの採点結果(50%)、出席(10%)で評価した

2) 自己点検・評価

成績評価については、現状のまま特に大きな問題はないと考える。

3) 改善方策

成績評価では、特に改善すべき点は無いと考える。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科薬理学Ⅱ	第3学年
科目責任者(記載者)	柴田達也	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

全身疾患の治療に用いられる薬物(末梢神経系・中枢神経系に作用する薬物、循環器系に作用する薬物、血液・造血器系に作用する薬物、抗腫瘍薬など)および歯科医療現場で使用する頻度が高い薬物(局所麻酔薬、鎮痛薬・抗炎症薬、抗菌薬、消毒薬など)の特徴を説明できることを到達目標にしている。シラバスに提示した項目はすべて講義した。

2) 自己点検・評価

既存の項目の薬物数は少し削減できたものの、令和5年版歯科医師国家試験出題基準に和漢薬が加わったため、その分教育する薬物の数が増加し、全体としては薬物数は増加した。

3) 改善方策

CBTや歯科医師国家試験の出題頻度が低い項目の薬物を中心に、再度薬物数の削減を目指す。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

前年度と同様に、30コマ中、柴田が22コマ担当し、長岡が8コマを担当する予定であったが、諸般の事情ですべて柴田が担当した。プリントを作成して、スライドを用いて講義を行った。

2) 自己点検・評価

2022年度の授業評価で改善を希望する点は、前年度と同様に特に記載はなかった。

3) 改善方策

プリントに掲載する問題は、歯科医師国家試験で出題されたものを加えるため、増える傾向にある。増えた分を減らすようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

中間試験の得点と定期試験の得点の平均点で65点以上を合格としている。中間試験、定期試験ともに本試験は試験問題を返却して解説している。

2) 自己点検・評価

中間試験の平均点は90.6点、定期試験の平均点は63.4点で、それらの平均点は76.7点であった。中間試験は前年より得点上がり、定期試験は前年より下がり、2つの平均は1.9点低下した。講義をすべて自分で行い、試験問題もすべて自分で作成しているので、定期試験の得点の低下を問題視している。

3) 改善方策

今年度から連問の出題を増やしたが、特に定期試験ではそれに学生が対応しきれいなかった可能性がある。次年度は、試験に連問を多用することの周知に努める。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科薬理学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	鈴木 礼子	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

動物愛護の3つのRに鑑みて、実際の患者データや、多数の実験動物の犠牲の元に蓄積された実験データをPC上で再現できるシミュレーション、及び、過去に骨粗鬆症モデル動物から採取した標本のデジタルデータを採用した実習を実施した。それによって、歯学生にとって重要な、薬物動態、薬物相互作用、循環器系に作用する薬物、硬組織の薬理について、客観的データと知識を統合し、論理的に考える姿勢を修得することを目指した。

2) 自己点検・評価

「学生による授業評価」の結果から、概ね、学生にとっても、歯科薬理学の座学で学んだことの理解を深める一助となったようである。従って、到達目標は概ね達成でき、実習の方向性として妥当であったと考えられる。しかしながら、一部の学生からは、もう少し実験にリアリティを持たせて欲しいとの要望が上がったので、これについては、実習の導入ガイダンス(目的説明)の仕方に改善の余地があると考えられた。

3) 改善方策

現状でも、歯科医師国家試験合格を目指す学生に対して有意義な実習となっていると考えられるので、実習項目自体は大きく変えずに、実習の導入ガイダンス(目的説明)において、学生の興味を引き出せるよう、実験の意義・目的をより明確に説明するようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

項目ごとに、基本的には、(1)導入講義(実習に関わる基礎的な知識の確認)、(2)実習課題の実施(PCシミュレーションまたは標本データ解析)、(3)問題演習(実習に関連する歯科医師国家試験問題等)のセットで実施した。なお、新型コロナウイルス感染症対策として、実習課題実施においては、各人にデータを掲載した紙資料を配布し、そのデータを元に解析させた。

2) 自己点検・評価

「学生による授業評価」では、概ね、「興味が高まった」・「理解が深まった」との評価であった。従って、たとえ机上の演習に近い実習形態であっても、目的や意義をしっかり説明できれば、学生の学修意欲の向上や、理解を深めることに有用であることを示せたと考えている。ただし、学生の興味・関心を高め、有意義な実習であったと受け止めてもらえるような改善を重ねていく必要はある。

3) 改善方策

歯科医師国家試験の傾向や、世間の歯科医療に対するニーズの動向をふまえた上で、なぜ、この実習が必要なのか、また、この実習から修得して欲しいことは何なのかを、より明確に提示していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実習内容に関する筆記試験(60%)と提出課題(40%)の合計で、100点満点中65点以上で合格とした。なお、提出課題は、不備があった場合は差し戻してやり直させ、それが期日までに提出された場合は、満点とした。

2) 自己点検・評価

提出課題が40%分あることにより、筆記試験の再試験を実施することなく、全員合格に至った。このことは、課題にきちんと取り組んでいるが、理解・アウトプットするのに少し時間がかかりがちな学生の、日頃の努力を評価できるという点では長所だと考えている。反面、既に提出課題点が蓄積した時期に筆記試験を行う都合上、最初から、試験勉強に身が入らないような学生も数名出てしまったのは、短所である。

3) 改善方策

実習なので、課題にきちんと取り組んでいるが、理解するのに少し時間がかかりがちな学生の、日頃の努力を評価できるという長所は、このまま生かしたい。一方、課題点があることを口実に、学修を怠けるような学生に対しては、毎回の実習や講義に真剣に取り組み続けた学生が、結局は、最低年限ストレートで歯科医師国家試験に合格するという厳然たる事実を伝えて、意識向上を指導していく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔衛生学	第 3 学年
科目責任者(記載者)	廣瀬公治	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師として具備すべき公衆衛生学・口腔衛生学の知識を修得し、地域口腔保健支援および予防歯科臨床を根拠に基づき施行できる基礎を修得することを目標としている。そのため、公衆衛生学領域で主要な位置を占める疫学、地域保健についての到達目標を多く挙げている。

2) 自己点検・評価

近年の歯科医師国家試験は、公衆衛生学分野の出題内容が多くなる傾向にある。特に地域口腔保健支援の基礎となる公衆衛生領域の到達目標を多く挙げていることは適切である。

3) 改善方策

2年生で開講されている公衆衛生学との連携をとる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

例年通り講義は板書中心とした方法で実施し、教科書を必ず傍用することを基本とした。そして本年度からは、特に見ることのできる理解が深まるものについてはスライドを用いるよう努めた。また、適宜行なった練習問題の解説時にはスライドを用いて実施するなどして知識の定着を図っている。

2) 自己点検・評価

講義終了前の練習問題でスライドを用い詳細に説明したことは評価できる。

3) 改善方策

配布した練習問題の印刷物を散逸させている学生がいる。それを防ぐために、専用のファイルを配布することを計画している。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期および後期定期試験で双方65点以上を合格としている。

2) 自己点検・評価

試験前にブループリントを配布し、出題内容および配点を公表していることは評価できる。また、試験問題のブラッシュアップを科目担当者間で実施し、不適切問題の根絶に努めていることも評価できる。

3) 改善方策

現状を維持する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔衛生学実習	第 3 学年
科目責任者(記載者)	廣瀬公治	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

集団における公衆衛生および口腔衛生の状況を正しく判断するための基本的技能を取得するため、各個で行なう実習はもとよりグループ単位で行なう実習も取り入れた実習を行い到達目標の完遂に勤めている。

2) 自己点検・評価

第3学年で修得すべき実習項目を網羅しているものであり評価できる。

3) 改善方策

現状を維持する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

本実習では、健康に影響を与える環境要因の測定と、地域口腔保健を推進するために必要な歯科疫学指標を得るための口腔内診査と統計、さらには個人の歯科疾患予防のための齶蝕活動性試験とシーラントを実技で修得する実習を行なう予定であった。

2) 自己点検・評価

新型コロナウイルス感染症蔓延防止のため、密集して行うことが多い本実習については、本年度、環境衛生領域の実習のみ実技を行ったが、口腔衛生学領域2021年度に引き続き教員によるデモンストレーションで実技に代えた。このままの状況が継続するのであれば、口腔保健領域の実習内容の変更が必要である。

3) 改善方策

唾液を用いた実習のようなリスクなもの、より安全に施行できる体制(少人数化等)をとり実施するよう改善する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

出席(10%)、レポート(20%)および効果測定(70%)の合計で65点以上を合格としている。

2) 自己点検・評価

知識・技能・態度をそれぞれ評価する指標を用いていることは評価する。

3) 改善方策

現状を維持する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	保存修復学 I	第3学年
科目責任者(記載者)	山田 嘉重	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

齲蝕、非齲蝕性硬組織疾患による実質欠損に対して適切に治療を行うための基礎知識を身に着けることを一般目標としている。保存修復学 I での到達目標としては、齲蝕、非齲蝕性の硬組織疾患の違いを認識し、それぞれの病因と病態を説明できるようにすること。さらにそれぞれの治療法を手順を追って説明できることを目標とし、その目標に沿った授業を行っている。

2) 自己点検・評価

保存修復学 I で習得しなければならない知識の習得については、う蝕の診断や治療法などシラバスにのった順番でしっかりと講義ができたことから、シラバスに記載されている最低限の到達目標は達成できていると思われる。

3) 改善方策

保存修復学 I の到達目標としているう蝕と直接修復の基礎的な理解を得ることが十分にできていない学生もいたことから、すべての学生が到達目標としている項目を習得できるように講義を工夫していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

板書、スライド、配布資料を用いて指定教科書の内容に沿って講義を行った。学生にはその日のうちに教科書・配布資料や各自の授業ノートにて復習するよう指導した。

2) 自己点検・評価

教科書に沿って授業を進めており、教科書による予習・復習には問題なかったものと思われる。また教科書の内容を理解し易くなるよう内容の説明や配布資料の作成を行っていることから、授業の復習をすることで授業内容を十分に理解することができたものと考えている。

3) 改善方策

保存修復学の講義内容は生体材料学、口腔衛生学などの分野と共通する項目があることから、それらの分野で教えている内容を考慮した講義を行うことで、知識力の向上が望めると思われることから、講義では他分野の内容を意識して講義を行っていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績は定期試験の成績65点以上で合格とし、不合格の学生には必要に応じて再試験を行い、同じく65点以上で合格とした。

2) 自己点検・評価

定期試験・再試験のみによる評価とすることで、保存修復学 I で習得する必要がある内容について学生が理解することができたかを客観的に知ることができたものと思われる。

3) 改善方策

試験問題の出題形式をマークシートを用いた多肢選択枝問題にしていることで、4年時のCBTは歯科医師国家試験に準じた問題で評価することができる反面、浅い知識でも正答を導き出せる可能性がある。そのため、記述と選択枝問題の併用した試験問題にすることも検討している。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	冠橋義歯補綴学 I	第3学年
科目責任者(記載者)	羽鳥 弘毅	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「到達目標」を達成するために教科書、教科書をまとめた講義資料(スライド、学生配布用プリント)、講義ごとの確認テストなどを使用して講義を行った。この際「一般目標」の内容を反映させて講義を行った。本科目は冠橋義歯補綴学の必修～基礎内容の項目であることを学生にアナウンスし、授業内容が深く理解されるよう配慮している。

2) 自己点検・評価

「到達目標」はシラバス記載の通りに授業を行い、授業での「学習の目標」は教科書の内容を反映させた。その結果、10の項目のうち5項目において、科目平均が全体平均以上であった(+0~0.12ポイント)。総合平均は全体平均と同点であった。以上より、「到達目標」は「可もなく不可もない状態」と自己点検します。問題点としては、科目評価が全体平均を下回った項目が5つあったことです。

「到達目標」で高評価を得られるよう、「シラバスの記載」や「教科書の学習の目標」に沿って丁寧に講義を行うことに取り組みます。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書、教科書をまとめた講義資料(スライド、学生配布用プリント)、講義ごとの確認テストなどを使用して講義を行った。必要に応じ、症例写真も取り込むことで視覚的に理解が進むよう配慮している。

2) 自己点検・評価

「教育を受け知的好奇心が刺激されたり、興味が高まりましたか。」では「そう思う(56.9%)」であり、科目平均が全体平均を0.07ポイント上回っていたため教育方法の方向性は正しかったと推察される。「教員の熱意や授業の工夫は感じられましたか。」では「そう思う(56.9%)」であったが、科目平均が全体平均を0.02ポイント下回ったことが問題点である。今後は熱意と工夫を伝えられるよう努力したい。

3) 改善方策

「授業資料」はしっかりとしていたために今後の資料作成は年度更新ごとに国家試験などの出題内容を追加することにより教育方法を改善していきたい。具体的には穴埋め式の講義資料、MCQでの演習問題を作成していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

後期の定期試験において点数が65点以上を合格とする。点数が65点未満の場合には再試験を行う。点数が65点未満の再試験該当者は、再試験の点数が65点以上でも65点の採点結果とする。

2) 自己点検・評価

長所は定期試験での不合格者がいないことである。問題点は採点結果が低い学生が一定の割合で存在することである。”想起→解釈⇒問題解決”のどこかで情報を整理仕切れていない学生が存在することと判断します。授業の進め方なども含めて改善する必要があります。

3) 改善方策

試験問題の正答(率)や識別係数などを判断材料として、授業資料と試験問題のブラッシュアップを行う予定です。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有床義歯補綴学 I	第3学年
科目責任者(記載者)	山森 徹雄	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、全部床義歯の臨床的意義を理解し、製作、装着するための理論修得を一般目標としている。そのために無歯顎の特徴、診察や検査、全部床義歯の製作過程やそれに関する理論、さらにはメンテナンスや術後経過を説明することを到達目標としている。

2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき全部床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えます。

3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えます。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するため45時間の講義を行った。部分的に空欄とした講義プリントを作成して配布し、プロジェクターで提示したパワーポイントファイルから学生自身に空欄を埋めさせながら解説した。必要に応じて板書による説明を追加して学生の理解を図った。他大学の非常勤教員による講義を4時間予定したが、コロナ禍対応のため対面の講義が困難であったことから、Zoomを用いたリモート講義とした。

2) 自己点検・評価

学生の講義に対する集中度は概して良好であったと思われる。学生の理解度を確認しながら講義を進めている。また学生による評価では非常勤教員による講義に肯定的であったため、リモート実施は有効であったと考えます。

3) 改善方策

当科目は講義全体を通して部分床義歯の臨床的、基礎的項目を網羅するため、欠席や集中不足などにより理解できない部分があると、わかりにくくなってしまいます。前回の講義を振り返りながら次の内容を説明することで対応する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

毎回の講義での小試験で形成的評価を行い、理解不十分な箇所が明確になるよう配慮した。また中間試験と後期試験で客観試験、記述試験による総括的評価を行った。後期試験不合格者31名と欠席者2名に対して追再試験を実施し、さらに特待生の継続条件未達成者を含め特別試験を実施したが、9名は合格に至らなかった。

2) 自己点検・評価

これまでと同様の難易度の問題により総括的評価を行ったが、再試験、特別試験を実施してもなかなか合格に至らない。不合格の学生は複数の他科目でも不合格となっており、学習への取り組みが不十分と考えられる。

3) 改善方策

本科目の講義内容が多岐にわたるため、毎回の講義後に十分な復習を実施しないと内容の理解が難しくなる可能性がある。講義の欠席が多いものに成績不振な学生が多いことから、来年度は出席を積極的に推奨したい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有床義歯補綴学Ⅰ実習	第3学年
科目責任者(記載者)	山森 徹雄	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、全部床義歯の臨床的意義を理解し、製作、装着するための理論修得を一般目標としている。そのために無歯顎の特徴、診察や検査、全部床義歯の製作過程やそれに関する理論、さらにはメンテナンスや術後経過を説明することを到達目標としている。

2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき全部床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するための内容について60時間の実習を行った。少人数のグループに分かれ、チュータからの個別指導に従い、実習マニュアルに沿って全部床義歯製作の各過程を実践した。

2) 自己点検・評価

臨床実習前に必要な内容を組み込んでいるため、実習時間に余裕がない。学生の授業評価では、すべての項目で全体平均を上回る結果であるものの、時間が不足気味であることが指摘されている。またグループ間の時間の使い方に関する違いへの不満が提示されている。

3) 改善方策

コロナ禍にあって非常勤教員の参画が難しいため、学内スタッフの指導能力向上を目的としてデモ模型の製作に力を入れる。またインストラクターミーティングで学生への接し方、指導方法、到達目標などの統一を図る。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実習中の口頭試問で形成的評価を行い、実習毎の小試験と実習終了時点の実技試験、製作物と出席状況により総括的評価を行った。

2) 自己点検・評価

全学生が形成的評価に基づき指導に沿った自学自習を実践し、総括的評価で合格に至った。

3) 改善方策

実習前半では講義に先行して実習する内容が含まれるため、事前の説明を詳細に行い学生の理解を高める。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔外科学 I	第 3 学年
科目責任者(記載者)	金 秀樹	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

顎・口腔領域の疾患に罹患した患者の健康維持・増進を図るために、1) 手術総論, 小手術の知識, 2) 症性疾患, 3) 腔粘膜疾患, 4) 血液疾患, 5) 損傷, 6) 全身疾患と口腔病態(口腔・顔面に症状を現す全身疾患)の基礎的および臨床的な知識を習得させるために授業を行っている。

2) 自己点検・評価

到達目標はある程度達成できたと考える。今後も講義内容をより分かり易く伝えるように邁進する。

3) 改善方策

今後もさらに重要項目と重要ポイントを強調しよりわかりやすく理解させる授業に心掛ける。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書と教員の作成したプリントをもとに授業を行った。重要事項は板書し説明を加え理解しやすく工夫した。さらに投影視覚素材を使用しわかりやすい授業内容に心掛けた。さらに、プリントは学生に書いてもらえるように余白を多く設けて対応した。

2) 自己点検・評価

学生の授業評価から判断して、教育方法に大幅に変更すべき問題はなかったと考える。

3) 改善方策

重要項目と重要ポイントを強調し、基礎科目と関連させることで、わかりやすく理解させる授業に心掛ける。双方向性の講義を工夫して行っていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

評価方法は出席・態度評価(5%)、定期試験(95%)とし65点以上を合格とした。定期試験欠席者に対して追試験を行い、必要に応じて再試験を実施した。試験は多肢選択および記述式試験で実施した。

2) 自己点検・評価

定期試験・追再試験を実施し、学生は授業内容を十分理解し到達目標に達していると考えますが、今後さらに講義方法のブラッシュアップが求められる。

3) 改善方策

今後も同様の評価方法で成績評価を行うが、授業期間中に理解度を確認するための小テストを実施し定期試験の平均点アップに勤める。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔内科学	第3学年
科目責任者(記載者)	高田 訓	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

昨年と同様、従来よりシラバスに記載された到達目標および「臨床との関連性を理解するための広い概念を知ること」を目標に加え授業を実施した。やはり、非常勤講師の新鮮な講義が望まれるところである。

2) 自己点検・評価

口腔内科学の教科書に沿って、具体的な到達目標に即した授業を行うことができた。

3) 改善方策

口腔内科学の教科書を熟知させ、臨床に直結させる必要があるが、改善対策は数年間の学力をみて判断する。積極的な非常勤講師との交流でモチベーションを上げたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

前期・後期とも教科書を用いて、スライドとプリント媒体で講義展開し、写真媒体と活字で臨床的な概念を講義した。

2) 自己点検・評価

国家試験出題基準に沿った教科書により、有意義な授業を進めることができた。重要点を提示することで、学習しやすくなり成績の上昇がみられた。

3) 改善方策

昨年から通じて、ほぼ、予定通りなので、現状このまま進める予定。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期・後期ともに授業内容の確認を主体とし、定期試験で行った。記述問題を充実させ、3Dは評価に加えなかった。

2) 自己点検・評価

総括的かつ重要項目については十分に正しい評価ができた。

3) 改善方策

教科書を用い、試験後にフィードバックしやすくする。昨年からの改善を継続し、このまま進める予定。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科放射線学 I	第3学年
科目責任者(記載者)	原田卓哉	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標の内容についてある程度達成されていると思われる。

2) 自己点検・評価

長所:説明がわかりやすい。
問題点:板書の文字が小さい。

3) 改善方策

長所を伸長するための方策:わかりやすい説明をする。
問題点を解決していくための方策:板書の文字を大きく書く。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書の解説と要点の抽出および説明をしている。

2) 自己点検・評価

長所:説明がわかりやすい。
問題点:板書の文字が小さい。

3) 改善方策

長所を伸長するための方策:わかりやすい説明をする。
問題点を解決していくための方策:板書の文字を大きく書く。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

正解率は70%以上を維持している。評価方法は妥当と思われる。

2) 自己点検・評価

長所:説明がわかりやすい。
問題点:板書の文字が小さい。

3) 改善方策

長所を伸長するための方策:わかりやすい説明をする。
問題点を解決していくための方策:板書の文字を大きく書く。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	高齢者歯科学 I	第3学年
科目責任者(記載者)	鈴木 史彦	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

高齢者歯科学 I では多職種連携を踏まえた訪問歯科診療・在宅歯科医療を安全に実施するために、多職種協働のしくみや高齢者に必要な口腔健康管理に関する知識を習得することを目的としている。主な到達目標は、老化に伴う心身および口腔の加齢変化、高齢者に多くみられる全身疾患と口腔疾患、訪問歯科診療、介護保険、急性期・慢性期・終末期での歯科の役割について学習する。

2) 自己点検・評価

シラバスの内容に沿って授業を実施した。長所は授業の開始時に「今回の重要3項目」を提示することで、その回で学習すべき内容のコアとなる部部を明確にしたことである。問題点は、1時限のなかで内容が多い回の際に、後半で十分な説明ができないことがあった点である。

3) 改善方策

モデルコアカリキュラムと国家試験の出題基準が更新されたことを踏まえて、今まで実施してきた重要項目と、これから教育すべき内容について乖離が内容に確認しながら、わかりやすい授業を継続していきたい。また、使用している教科書も改訂となるため、新しい情報に対応できるように、これまでの講義内容を見直してアップデートしていく予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

前回の授業の復習をするために、最初にグーグルフォームを用いた確認テストをしている。結果がすぐにグラフで反映されるため、授業内容に対する学生の理解度の確認にもなる。授業は使用している教科書をもとに、内容をまとめた講義資料とスライドを用いて実施している。また、その回と関連する歯科医師国家試験の過去問題を練習問題として説き方を解説している。

2) 自己点検・評価

講義資料は単にパワーポイントのスライド一覧ではなく、ワードファイルにしたものを別途準備し、字が読める資料を心がけている。グーグルフォームでの確認テストにより、リアルタイムで作成される正答率グラフをもとに解説することで、双方向性も確保している。スライドには適宜動画を挿入することで、わかりやすいように工夫している。内容が多い場合に、授業の後半で説明が不足することが問題点である。

3) 改善方策

1回の講義で内容が多いものに関しては、内容を2回に分けて実施するような見直しが必要と考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験と追・再試験により100点満点で評価している。80点は筆記問題で、授業で提示した重要3項目に関する問題を出題している。20点は選択肢問題で、授業で提示した歯科医師国家試験の過去問題を改変した問題を出題している。筆記試験と選択肢試験の合計が65点以上の者が合格となる。

2) 自己点検・評価

定期試験と追・再試験の終了後に正答を配布し、その場で学生からの疑義を受け付けている。また、定期試験と追・再試験は異なる範囲から出題することで、追試と再試の受験者に対する公正性を担保している。

3) 改善方策

授業開始時の確認テストについて、授業評価には明示していなかった。今後は、確認テストの分を加点として最終成績に組み込むことを検討している。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	災害歯科医学	第3学年
科目責任者(記載者)	板橋 仁	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

社会における歯科医師の役割を理解し、将来起こり得る大規模災害等に際して社会に貢献できる歯科医師となるために、到達目標 1) 大規模災害時における歯科医師の役割 2) 災害時の医療体制 3) 歯科的個人識別 4) 法歯学の基本 を定め、後期15コマの講義を行った。

2) 自己点検・評価

「コマ数15回も足りない」との意見があり、本科目が目標とする理念について、昨年の学生よりも伝わっていない様を感じた。

3) 改善方策

復習部分と新しい講義部分の区分けをはっきりとさせて、各回の講義がより新鮮に映る様に工夫する。もっと学生の意欲を引き出せる様努力する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

シラバスの内容に従い、スライドを中心とした講義を行った。関連部分について教科書あるいはレジメの内容を解説した。

2) 自己点検・評価

岩原教授のリモート講義の時に、回線トラブルが発生してかなりの時間を費やしてしまった。(先方での不具合による)

3) 改善方策

リモート講義では事前に先方の通信環境を整えて頂く。別に補講時間を設けることを検討する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(100%)により評価し、65点以上で合格とする。

2) 自己点検・評価

解けるはずの問題が解けていない?ことから、講義で解説した内容が伝わっていない?様を感じた。

3) 改善方策

学問としての講義とともに、近い将来の国家試験に対応する問題解法についても、もう少し解説して行く。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	総合臨床医学	第3学年
科目責任者(記載者)	馬場 優	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床歯学の土台となる外科学・内科学・耳鼻咽喉科学の内容を概観し、病の病態、診断、治療に関する知識を習得する。具体的には、医の倫理について説明できる。インフォームド・コンセントについて説明できる。医療安全の意義について説明できる。主要な症候と対処法について列挙できる。疾患の診断と治療について説明できるを到達目標にし、6年生全員が到達目標に達した。

2) 自己点検・評価

6年生全員が到達目標に達したということは、私が、そのように導いたということですので、自己点検としては「良」である。

3) 改善方策

特になし

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

国家試験の出題基準にのっとり、教育を行っている。

2) 自己点検・評価

国家試験の出題基準にのっとり、教育を行い、さらに最近の国家試験を参考に、定期試験を作成し、その結果6年生全員が到達目標に達したので、「良」である。

3) 改善方策

学生の意見を参考にさらなる教育方法の改善を図っていく予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

卒業試験で評価する。

2) 自己点検・評価

問題点は特になし。

3) 改善方策

特になし。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	保存修復学Ⅱ	第4学年
科目責任者(記載者)	山田 嘉重	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

齲蝕、非齲蝕性硬組織疾患による実質欠損に対して適切に治療を行うための基礎知識を身に着けることを一般目標とした。到達目標としては、保存修復学Ⅰで学習した内容の再履修およびあらたな項目としての間接修復法の種類、適応症、適応窩洞、使用器具、修復材の種類を的確に選別し得ることとし、その目標に沿うよう授業を行った。

2) 自己点検・評価

保存修復学実習と並行しての講義を行ったことで保存修復で行う処置に対する基本的な知識を持たせることができたと思われる。しかし実習と講義の内容を関連付けて勉強することができていないと推測される学生もいたことから、授業と講義の内容の関連付けをより学生に理解させる必要がある。

3) 改善方策

授業と実習を同日に続けて行えることから、授業では実習でどのように体験できるのかをしっかりと説明する。また実習時においても講義で習った内容に触れ、講義と実習が関連付けて学べるように常に気を付けて学生に教えていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義は主にスライド、配布資料を用いて指定教科書に沿って行った。必要に応じて黒板への板書も併用した。

2) 自己点検・評価

教科書に沿って授業を進めたことから、教科書に記載されている内容は後日自分で復習する際に理解し易くなったものと思われる。しかし講義中に配布した資料を中心に復習を行っている学生も少なくなく、復習時に教科書を併用して勉強することを徹底できなかった。

3) 改善方策

学生には講義プリントのみに頼らず、教科書を併用使用しやすいように配布資料を工夫していく。またCBTに対応できるように最重要項目は繰り返し教育していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績は定期試験の成績65点以上で合格とし、不合格の学生には必要に応じて再試験を行い、同じく65点以上で合格とした。

2) 自己点検・評価

レポート評価などは行わずに定期試験・再試験のみで評価したことから、保存修復学Ⅱで習得する必要がある知識の有無を成績にできたものと考えており、学生の合否をただしく評価できたものと思われる。

3) 改善方策

定期試験のみでの試験範囲のため、学生に問いたい項目がすべて試験に反映できなかったことが反省点である。そのため学生の理解度を考慮して中間試験を行うことも検討していく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	保存修復学実習	第4学年
科目責任者(記載者)	山田 嘉重	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

齶蝕、非齶蝕性硬組織疾患による実質欠損に対して適切に治療を行うための技能と態度を身に着けることを目標として、人工歯を用いた実習を行っている。

2) 自己点検・評価

4倍大石膏模型による各窩洞形態の確認、人工歯を用いたコンポジットレジン修復、メタルインレー修復、レジンインレー修復を授業の流れに沿って行っており、学生の知識の定着が得られやすい実習日程になっていると評価している。

3) 改善方策

授業で得た知識を学生が理解して実習をおこなっているのかを、各実習インストラクターがしっかりと確認して実習をおこなうよう促す必要があるので、学生だけでなくインストラクターも実習前に十分準備を行う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習開始前に実習書の流れに沿ってデモを行い、実習の進行手順と注意点をあらかじめしっかり説明し実習を開始するようにしている。また疑問点や問題点が生じた場合はすぐに担当教員に質問するように逐一学生に指示をしている。

2) 自己点検・評価

実習を通して授業で説明した内容が理解しやすくなったと同時に、歯科医師としての仕事内容を自覚させることができていると考えている。

3) 改善方策

学生はそれぞれの実習日の課題を早く履修することに意識が向き、各項目をフィードバックを怠る学生が見られた。今後は実習中に学生各自にフィードバックさせるような指導法を検討していく。また講義中に、その日の実習で行うことについての注意事項や覚えておかなければならない事項を説明していくよう心がける。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績は、実習態度(20%)、実習中に行った窩洞形成や修復物の評価(50%)と最終日に行う実技試験による評価(30%)を総合して最終評価を行い65%以上の学生を合格とした。

2) 自己点検・評価

それぞれの実習時間で行った実習課題を各班の担当インストラクターに要所で確認をしてもらい、問題点や改善点を指摘してもらうようにしていることから、本実習を通して講義では理解しづらい項目も具体的に理解できるようになったと評価している。

3) 改善方策

実習で得られた知識がどのように講義での知識の向上に寄与したかを評価できるような評価基準も今後検討していきたい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯内療法学	第4学年
科目責任者(記載者)	木村裕一	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯内療法学の科目における一般目標は、歯の硬組織・歯髄および根尖歯周組織などの疾病に対する予防と診断・治療として予防を行うために基本的な知識、技能および態度を習得することである。また到達目標を大きく10項目に分けて示した。授業では全てを網羅したが、試験結果では72名中10名(13.9%)が不合格となったことから判断すると概ね大多数の学生において到達目標は達成できたと考えられる。

2) 自己点検・評価

試験結果では、10名が不合格であった。今後は学生のさらなる学力向上を図るためには到達目標をさらに綿密に立案することが必要である。また、現在示している到達目標は歯内療法学のすべての範囲を網羅していると考えられるが、学生にとってかなり漠然としていてわかりにくいことが推測されるため、より具体的に示す必要がある。各授業ごとでは要点を提示していたが、良く伝わっていなかったことが考えられる。

3) 改善方策

到達目標の全体の数が増えるが、シラバスの紙面が許す限り、より具体的でさらに細かな内容にして提示すべきであるとされる。CBTと国試の出題が広範囲に渡っているため、全てを網羅するためには数が増えるが、到達目標をより具体的に理解できるように示さなければならない。また試験直前だけではなく、講義終了のたびごとに復習して知識を積み重ねていく必要がある。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書を中心にして、特に重要であるところを板書して説明している。また、教科書に掲載してある写真を利用して症例を紹介している。図は黒板にできるだけ多く書いて説明し、そしてPCを用いて治療器具や症例を示している。また、写真を示すだけでは実感が湧きにくいので、外来から借りられる器具はできるだけ実物を示すようにしている。そして授業の最後にその授業と関連のある国試問題を提示している。

2) 自己点検・評価

授業がわかりにくいとのアンケート結果から、授業中に板書して説明をさらに詳しく行う必要がある。長所として、写真を示すだけでは実感が湧きにくいので、外来から借りられる器具はできるだけ実物を示すようにしていることが挙げられる。また、まとめたプリントを配布したが、あまり効果がなかったようである。

3) 改善方策

教科書を中心に進めていくが、授業の資料としてさらに多くの症例をPCを用いて視覚的に提示していく。そしてできるだけ黒板に書いて説明するようにする。さらに双方向性の授業を行うように心がける。写真を示すだけでは実感が湧きにくいので、外来から借りられる器具はできるだけ実物を示すようにする。器具を使用している臨床の場面はビデオ等を利用して説明し、理解が深まるように工夫する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期においては前期の講義が終了した後に、後期においては後期の講義が終了した後にそれぞれ講義内容の理解度について筆記試験を行い、筆記試験のみで評価し、前期と後期の平均が65点以上を合格としている。現状では、形成的評価は行わず、総括的評価のみで行っている。

2) 自己点検・評価

現在、行っている試験では65点を合格点としているが、国試が年々難しくなっている現状を考えると合格点をもう少し上げるべきであると考え。ただなかなか65点まで達していない学生が一定の割合いるのが現状である。前年と比較すると不合格者の割合が少し増加したことから考えると、筆記試験が苦手という学生がいるので、多肢選択式の問題を評価に入れるのか検討しなければならない。

3) 改善方策

現在の筆記試験による総括的評価法はそのまま継続する。今後多肢選択式の問題を組み入れるのか、中間試験を実施するのかどうか、また評価法も多面的にして総合的な評価をした方が良いので、形成的評価の導入もしなければならないが、いつどの時間を利用して実施するのかについては問題が残されている。

2021・2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯内療法学実習	第4学年
科目責任者(記載者)	木村裕一	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床実習において根管治療を行うために根管形成および根管充填の術式と技術の基本的な知識、技能および態度を習得することを一般目標にして、また到達目標を細かく具体的に10項目に分けて示している。最終的評価では、全員が合格点に達していたことから判断すると一応、到達目標は達成できたと考えられる。

2) 自己点検・評価

最終評価では、全員が合格したことで最低限の目標には到達していたと考えられる。学生アンケート結果からは到達目標に関しては何も意見がなかったことから理解されて受け入れられているものと考えられた。しかし、今後、学生のさらなる学力向上を図るためには到達目標をさらに見直すことも必要である。

3) 改善方策

到達目標をさらに細かく具体的に示して理解しやすいようにして、レベルの高いものまで含むようさらに綿密に改善していかなければならない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

各課題の手順は実習書のなかにある写真(図)で示し、必要と思われる箇所については実際にデモを行っている。実習では一人のインストラクターが学生12~18名ぐらいを担当し、各学生の根管治療における到達度をステップごとにチェックをしている。

2) 自己点検・評価

実習書がわかりにくいとのアンケート結果より、実習書を再点検しなければならない。学生12~18名ぐらいの少人数を一人のインストラクターが担当したが、インストラクターの数が少ないとのアンケート結果から、インストラクターの数を増やすことも検討していかなければならない。コロナ禍の影響により、非常勤講師の来学ができなかったことも影響したと考えられる。

3) 改善方策

実習書は毎年、改正をしているが、今後、さらに修正、改訂を加えて学生にわかりやすいように書き直しをしなければならない。教員のさらなる確保ができれば各インストラクターが担当する学生数を減らすことができる。また、手技をわかりやすくするため、モニター等を活用してビデオや実演を示し、よりわかりやすくなるように工夫する必要がある。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

ステップごとの検印の時に、技術的に一定レベルに達していない場合にはその都度、指摘してフィードバックし、そして修正させて合格基準に到達するまでやり直しをさせている。また、それぞれの課題が終了するごとに途中経過の状態をチェックするために製作物を提出させて採点し、技能評価(60%)、実習試験(25%)、小テスト(15%)により評価し、65点以上の者を合格として評価を行った。

2) 自己点検・評価

途中経過、または最後の製作物のチェックは一人の採点者が行うので評価基準が一定であるが、ステップごとのチェックは各インストラクターによって行われているのでインストラクターによって技能に差があるため、評価基準にばらつきが生じやすい。学生の理解度がどの程度なのか判断しにくい、全員が合格点に達していたので、目標は一応達成されたと考えられる。

3) 改善方策

各ステップごとのチェックに関しては、時間が許す限りインストラクター間の打ち合わせを事前に十分に行う必要がある。また、評価に関してはできるだけ総合的に評価することが望ましいので、技能評価の他に小テスト点も加味して行うようにしていたが、今後は範囲となる項目を絞ることを検討する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯周病学	第4学年
科目責任者(記載者)	高橋慶壮	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯周病の診断, 治療および予防を行うための知識を伝授し, 歯周組織の常態, 疾患, 診断および治療方法を理解し, CBT・歯科医師国家試験に合格するための知識を身に付けさせることを目標としている。45回の講義でおおむね達成できていると考える。

2) 自己点検・評価

CBTおよび歯科医師国家試験の結果を勘案すると, 教育効果が出ているように解釈している。4年生には特待, 通常, 編入生と多様な学生が混在しており, 学生間の授業態度や歯周病学に関する知識量の差が大きく, 試験の結果も標準偏差はやや大きいと、講義スピードについてこれない学生が若干いると思われる。

3) 改善方策

より良い結果を出せるように, 授業内容を厳選する。学生間の学力差を勘案しつつ, 学生が自主的に学ぶ習慣を養うように指導する。具体的に, 事前に授業資料提示システムにデータを挙げて, 講義前に予習することを支援している。講義中は, 講義に集中するように指導をしている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書(臨床歯周病学 第3版 医歯薬出版およびザ・ペリオドントロジー 第4班)、プリントおよびスライドを用いた講義を行なっている。CBTや国家試験の臨床問題を解くには, 臨床推論の能力が不可欠で, 今後も出題が増えると予測されるので, 知識の定着を確認すること, 具体的には, 知識のアウトプットの練習として, 人に説明することを推奨している。

2) 自己点検・評価

定期試験および追再試験はマークシート形成にしている。この方法でも学力をかなり正確に把握できていると判断しているため, 今後もしばらくマークシート方式を継続する。

3) 改善方策

マークシート形式の試験対策が必要だが, 基本的には知識の定着度を把握する必要があるため, レポートと双方向的な講義を行っていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

CBTや国家試験の模擬試験の結果をみる限り, 6年次の学力は全国平均レベルに到達している。今年の6年生の成績からも本学の学生に対して教育効果は上がっていると解釈しているが, 全国平均点より10点以上低い結果の問題領域については, 説明を追加する工夫をしている。

2) 自己点検・評価

マークシート形式を数年行っている。問題作成の時間がかかるが, 総じて出題者側からすれば実施しやすいと感じた。正答率が低い問題を精査し, 次年度の教育に活かしたい。

3) 改善方策

試験がマークシートの場合, キーワードの丸暗記をして内容を理解していない学生がいるため, 普段からの生活で, アウトプットの練習を推奨する。また, 読書を増やすとか, 新聞を読んだり, 文章作成する習慣をつけるように指導する。また, 専門の学問に対する興味を掻き立てるような工夫も必要と思う。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯周病学実習	第4学年
科目責任者(記載者)	高橋慶壮	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

座学の授業内容を踏まえ、基本的な歯周治療の技能を習得することを目標とする。すなわち、歯周病の診査・診断、一口腔単位の治療計画の立案、歯周基本治療、修正治療および各種歯周外科手術に必要な術式を修得し、メンテナンスに移行できるようにする。換言すれば、「術」の暗黙知を形式知へ変換し、学生が理解して実践できるように指導することを目指している。

2) 自己点検・評価

CBTおよび歯科医師国家試験の結果からは、教育効果はある程度出ていると考えている。

3) 改善方策

今年度は最初の器具チェックを厳密に行い、実習器具の準備を徹底させ、器具の名称や使用方法の理解を促した。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習に先立ち、日本歯周病学会の作成した基礎実習動画を視聴するように指導している。そのうえで、実習書とモニターおよびライターのデモを通じて実習方法を指導している。コロナ禍、県外の非常勤講師が来学出来ないため、指導者数が少なかったため、きめ細かい対応は困難であったので、モニターと動画を利用して学生の理解度を高め、実習がスムーズに行えるように工夫した。

2) 自己点検・評価

歯周治療、とりわけ歯周外科治療の煩雑な治療ステップを使用する器具説明を含めて、ステップ・バイ・ステップで行う。デモを行い、学生の理解を深めさせる。留年生や編入生は実習の経験があるため、内容の理解は不十分でも、とりあえず課題をこなすが、術の根拠を深く理解できていないため、指導の工夫が必要である。

3) 改善方策

実習の進行の遅い学生には、各ステップのポイントを繰り返し説明し、部分的に手伝いながら指導をより細やかに行う。留年生および編入学の学生は早く課題を終わらせようとするあまり、雑になる傾向があるので、丁寧に行うよう指導する。コロナ禍が解消され、県外からの非常勤講師の協力が欲しいところである。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

試験形式は筆記試験であるが、成績はおおむね良好である。治療計画の立案について、理解していない学生がいることがわかるので、筆記試験の良さを再確認した。CBT偏重の考えを持っている学生がいることは改善すべきである。実習態度や服装も成績に反映させている。CBTとOSCEの結果からしても、技能および態度はおおむね定着していると思う。

2) 自己点検・評価

他科の実習と異なり、制作物等の評価対象が乏しいため、雑に実習を行っている学生がいた。指導しても無視するふてぶてしい学生もいた。昨今の風潮に流され、学生に迎合しすぎであろう。シラバスに明記されているように、全科目をしっかりと学ばせる姿勢が求められている。

3) 改善方策

シラバスに明記されているように、全科目をしっかりと学ばせる姿勢が求められる。実習では留年しないと学生が思うようであれば、手を抜いて適当にこなすかもしれない。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	冠橋義歯補綴学Ⅱ	第4学年
科目責任者(記載者)	羽鳥 弘毅	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「到達目標」を達成するために教科書、教科書をまとめた講義資料(スライド、学生配布用プリント)、講義ごとの確認テストなどを使用して講義を行った。この際「一般目標」の内容を反映させて講義を行った。本科目は冠橋義歯補綴学の各論内容の項目であることを学生にアナウンスし、授業内容が深く理解できるよう配慮している。

2) 自己点検・評価

「到達目標」はシラバス記載の通りに授業を行い、授業での「学習の目標」は教科書の内容を反映させた。「授業はシラバスに沿って進化したと思いますか。」の項目では「そう思う(54%)」の評価を得たが、科目平均は全体平均を0.02ポイント下回った。「到達目標」は「可もなく不可もない状態」と自己点検します。問題点としては、10のうち8つの項目で全体平均を下回った(0.01~0.09ポイント)ことです。

「到達目標」をさらに向上させる必要があると考えられるので、「シラバスの記載とシラバス熟読のアナウンス」や「教科書の学習の目標」に沿って熱意と工夫に満ちた講義を行うことでさらなる高評価を得られるよう取り組みます。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書、教科書をまとめた講義資料(スライド、学生配布用プリント)、講義ごとの確認テストなどを使用して講義を行った。必要に応じ、症例写真も取り組むことで視覚的に理解が進むよう配慮している。

2) 自己点検・評価

教育方法では「授業前の予習」と「授業後の復習」の項目において科目平均が全体平均を上回っていた(0.06、0.09ポイント)。これらのことから学生は自主的に勉強していたことと考えられます。学生が自主的に勉強に専念していたことは長所であると思います。科目平均が全体平均を下回っていたため学生からの授業評価は低かったことが問題点である。教員の熱意や授業の工夫により善処したいと思います。

3) 改善方策

今後の資料作成は年度更新ごとに国家試験などの出題内容を追加することにより教育方法を改善していきたい。CBTに出題される臨床推論問題なども指導していきたい。他には穴埋め式の講義資料、MCQでの演習問題を作成していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期の定期試験において点数が65点以上を合格とする。点数が65点未満の場合には再試験を行う。点数が65点未満の再試験該当者は、再試験の点数が65点以上でも65点の採点結果とする。

2) 自己点検・評価

長所は定期試験での不合格者がいないことである。問題点は採点結果が低い学生が一定の割合で存在することである。”想起→解釈⇒問題解決”のどこかで情報を整理仕切れていない学生が存在することと判断します。この結果がCBTでの失点につながってしまうと考えられます。授業の進め方なども含めて改善する必要があります。

3) 改善方策

試験問題の正答(率)や識別係数などを判断材料として、授業資料と試験問題のブラッシュアップを行う予定です。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	冠橋義歯補綴学実習	第4学年
科目責任者(記載者)	羽鳥 弘毅	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「到達目標」を達成するために学生を4つの班に分け、各班には2名のインストラクターを配置して指導を行っている。ステップごとに各班でのデモンストレーションを行い、実習内容の説明を行っている。また講義時間中にもスライドを用いて、歯冠形態の復習を行っている。本科目は冠橋義歯補綴学の各論内容の項目であることを学生にアナウンスし、授業内容と実習が深く理解できるよう配慮している。

2) 自己点検・評価

「到達目標」はシラバス記載の通りに授業を行い、授業での「学習の目標」は教科書の内容を反映させた。その結果、10の評価項目のうち8つの項目において、科目平均が全体平均を上回った(0.04~0.44ポイント)ことから、「到達目標」は高評価と自己点検します。問題点としては、実習であることから学生の進捗が異なり授業の準備(時間配分や資料作成など)を行いにくいことです。

3) 改善方策

「到達目標」は高評価であると考えられる。当分野としての方策は、「実習内容の質」の向上に取り組みたい。具体的には「インストラクターの個の能力」が向上することを期待し、学生からさらなる高評価を得られるよう取り組みたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

当分野で製作したオリジナル実習書を使用し教育している、実習に先立ち実習内容の小テストを行っている。小テストは解答後に回収し、回収後には試験の解説を行っている。伝統的に実習内容が非常に豊富であり、他大学に比べて丁寧な実習指導を行っていることは本学が他大学に誇れる教育方法の一つと思います。

2) 自己点検・評価

10の評価項目のうち8つ項目全体平均を上回った(0.04~0.44ポイント)。また「教員質問はできましたか。」では科目平均が全体平均を0.38ポイント上回っていたため学生と教員の信頼関係は厚かったと推察される。これは当分野のインストラクターの教育にかける情熱の賜物であり長所と考えます。問題点は、技工の指導に終始し、臨床術式との関連が少し不足したことである。

3) 改善方策

実習概要としては学生から高評価を得ているため実習教育方法は現状維持でよろしいかと考えます。学生から改善してほしい点として、「教科書と実習書との相違」と「インストラクターの指導内容の均質化」を指摘されたので改善していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期の実習期間での実習製作物評価(25%)、小テスト結果(25%)、実習実技試験(25%)及び実習筆記試験(25%)を総合して評価する。

2) 自己点検・評価

長所は本実習での不合格者がいないことである。
問題点は採点結果が低い(=ほとんどが実技点での失点)学生が一定の割合で存在することである。

3) 改善方策

実習実技試験での不合格者に対しては、個別に再教育を行い再試験に臨ませることで合格点に達するよう配慮している。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有床義歯補綴学Ⅱ	第4学年
科目責任者(記載者)	山森 徹雄	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、部分床義歯の臨床的意義を理解し、製作、装着するための理論修得を一般目標としている。そのために、部分床義歯の構成要素、設計、製作過程に関する理論、さらにはメンテナンスや術後経過を説明することを到達目標としている。

2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき部分床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するため45時間の講義を行った。部分的に空欄とした講義プリントを作成して配布し、プロジェクターで提示したパワーポイントファイルから学生自身に空欄を埋めさせながら解説した。必要に応じて板書による説明を追加して学生の理解を図った。他大学の非常勤教員による講義を4時間予定したが、コロナ禍対応のため対面の講義が困難であったことから、講師本人の希望により今年度は講義担当を見送った。

2) 自己点検・評価

学生の講義に対する集中度は概して良好であったと思われる。学生の理解度を確認しながら講義を進めている。これには出席し講義に集中することを評価したことが有効であったと考える。

3) 改善方策

当科目は講義全体を通して部分床義歯の臨床的、基礎的項目を網羅するため、欠席や集中不足などにより理解できない部分があると、わかりにくくなってしまふ。前回の講義を振り返りながら次の内容を説明することで対応する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

毎回の講義での小試験で形成的評価を行い、理解不十分な箇所が明確になるよう配慮した。また中間試験と後期試験で客観試験、記述試験による総括的評価を行った。後期試験不合格者23名に対して追再試験を実施し、さらに特待生の継続条件未達成者を含め特別試験を実施したが、7名は合格に至らなかった。

2) 自己点検・評価

これまでと同様の難易度の問題により総括的評価を行ったが、再試験、特別試験を実施してもなかなか合格に至らない。毎回の復習などをシラバスにも記載し、自学自習を推奨しているが、取り組みに対する個人差が大きいと考える。

3) 改善方策

本科目の講義内容が多岐にわたるため、毎回の講義後に十分な復習を実施しないと内容の理解が難しくなる可能性がある。講義の欠席が多いものに成績不振な学生が多いことから、来年度は出席を積極的に推奨したい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有床義歯補綴学Ⅱ実習	第4学年
科目責任者(記載者)	山森 徹雄	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、部分床義歯を製作、装着するための理論の理解を深め、その技術を習得することを一般目標としている。そのために部分床義歯の製作に要する各過程を実践することを到達目標としている。

2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき部分床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するための内容について60時間の実習を行った。少人数のグループに分かれ、チュータからの個別指導に従い、実習マニュアルに沿って部分床義歯製作の各過程を実践した。

2) 自己点検・評価

臨床実習前に必要な内容を組み込んでいるため、実習時間に余裕がない。学生の授業評価では、ほぼすべての項目で全体平均を上回る結果であった。昨年度と比較し、グループ間の違いに対する不満がなかった。インストラクターミーティングの効果があったものと考えている。

3) 改善方策

学内スタッフの指導能力向上を目的としてデモ模型の製作に力を入れる。またインストラクターミーティングで学生への接し方、指導方法、到達目標などのさらなる統一を図る。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実習中の口頭試問で形成的評価を行い、実習毎の小試験と実習終了時点の実技試験、製作物と出席状況により総括的評価を行った。

2) 自己点検・評価

ほとんどの学生は形成的評価に基づき指導に沿った自学自習を実践し、総括的評価で合格に至った。ただし、欠席の多い2名の学生は不合格と判定された。なおこの2名の学生は複数の他科目でも不合格の結果であった。

3) 改善方策

実習前半では講義に先行して実習する内容が含まれるため、事前の説明を詳しく行う。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔インプラント学	第4学年
科目責任者(記載者)	山森 徹雄	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、口腔インプラントによる欠損補綴治療のための理論を修得することを一般目標としている。そのために診察や検査、治療計画立案から一連の治療の他、関係する基礎的を学ぶ。

2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき全部床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するための内容について15時間の講義を行った。講義プリントを作成して配布し、プロジェクターで提示したパワーポイントファイルおよび板書を用いて解説した。また今年度は非常勤教員による講義はリモート講義とした。

2) 自己点検・評価

学生の講義に対する集中度は概して良好であったと思われる。詳しい説明や繰り返して説明すると共に、学生の理解度を確認しながら講義を進めた。

3) 改善方策

また講義を続けて3時間実施することに対する不満を訴える意見があったが、現時点では変更は難しい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

シラバスに沿って、定期試験で総括評価を実施した。不合格者には再試験を行ったが、最終評価として1名のみが不合格であった。なお当該学生は複数科目の不合格により留年となった。

2) 自己点検・評価

多くの学生は高得点を獲得していたが、一部の学生に成績不振を認めた。

3) 改善方策

一部の学生に成績不振を認めたため、講義内容の復習を指導する必要がある。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔インプラント学実習	第4学年
科目責任者(記載者)	山森 徹雄	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、口腔インプラントによる欠損補綴治療のための手技と理論を修得することを一般目標としている。そのために診察や検査、治療計画立案から一連の治療を学ぶ。

2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき全部床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

グループごとにインストラクターを配置し、画像診断と治療計画立案、模型上での外科治療、補綴治療の実施を行った。

2) 自己点検・評価

学生の講義に対する集中度は概して良好であったと思われる。ただし、実習内容に対して時間があまったとの意見があった。

3) 改善方策

実習内容を見直し、時間内に追加できる事項を検討する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

シラバスに沿って、実習筆記試験と提出物により評価し、全員が合格と判定された。

2) 自己点検・評価

多くの学生は高得点を獲得していたが、一部の学生に成績不振を認めた。

3) 改善方策

一部の学生に成績不振を認めたため、実習内容の復習を指導する必要がある。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔外科学Ⅱ	第4学年
科目責任者(記載者)	川原一郎	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

顎・口腔領域の疾患に罹患した患者の健康維持・増進を図るために、①手術総論、小手術の知識 ②嚢胞および嚢胞性疾患 ③唾液腺疾患 ④腫瘍および類似疾患 ⑤唾液腺腫瘍 の基礎知識および臨床的な知識を習得させるために授業をおこなっている。

2) 自己点検・評価

到達目標は達成できたと考える。講義内容をより分かり易く伝えるように邁進する。

3) 改善方策

重要項目と重要ポイントを強調しよりわかりやすく理解させる授業に心掛ける。双方向性の講義スタイルを取り入れ質問しやすい授業に心掛ける。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書と教員の作成したプリントをもとに授業をおこなった。重要事項は板書し説明を加え理解しやすく工夫した。さらに投影視覚素材を使用しわかりやすい授業内容に心掛けた。さらに、プリントは学生に書いてもらえるように余白を多く設けて対応した。

2) 自己点検・評価

学生の授業評価から判断して教育方法に大幅に変更すべき問題はなかったと考える。

3) 改善方策

重要項目と重要ポイントを強調し、基礎科目と関連させることで、わかりやすく理解させる授業に心掛ける。コロナ禍で実施出来なかった双方向性の講義スタイルを再開して質問しやすい授業に心掛ける。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

評価方法は出席・態度評価(5%)、定期試験(95%)とし65点以上を合格とした。定期試験欠席者に対して追試験をおこない、必要に応じて再試験をおこなった。試験は多肢選択および記述式試験でおこなった。

2) 自己点検・評価

定期試験・追再試験を実施し、3名を除きその他合格とした。学生は授業内容を理解し到達目標に達していると考えますが、十分に理解させられたかは疑問が残るところであり、さらなる講義方法のブラッシュアップが求められる。

3) 改善方策

今後とも同様の評価方法で成績評価を行うが、授業期間中に理解度を確認するための小テストを実施し定期試験の平均点アップに勤める。

2022度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔外科学Ⅲ	第4学年
科目責任者(記載者)	高田 訓	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

後期のみ授業なので、徹底した各論の詳細講義とし、臨床実習直結型の目標となっている。
非常勤講師の講義を再会できたが、内容に不満が残った。

2) 自己点検・評価

到達目標の設定は具体的に理解し易く、目標に沿った授業日程を組むことができている。
非常勤講師の講義に不満が出た。

3) 改善方策

非常勤講師とコミュニケーションを保ち、興味ある講義を行いたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書を用いた基本的内容を講義し、臨床に直結させられる写真媒体を多く取り入れた講義を行っている。

2) 自己点検・評価

高いモチベーションを確保するためにフィールドワークを取り入れよと考えたが、現状は不可能であった。
非常勤講師の貴重な資料、写真、症例を提示する機会を多く取り入れ、時間をかけて説明する必要がある。

3) 改善方策

成績不良者には、国家試験出題基準に沿った教科書の内容を十分理解できているか、それが卒業試験と国家試験に直結することを理解しているか、自学自習や予習、復習などの方法を教える必要がある。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

授業内容の確認を主体としたMCQと筆記の試験を行うとともに、記述の頻度を高めた。

2) 自己点検・評価

総括的かつ重要項目については十分に正しい評価ができた。
昨年と同様、臨床実習に近い学年であるにもかかわらず、臨床実地に必要な知識を評価できたか否かは不明である。

3) 改善方策

試験の成績評価に下駄を履かせることや、追加試験、不要な適宜試験などを行い、無理矢理進級させる試験は絶対に行わない。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科麻酔学	第4学年
科目責任者(記載者)	山崎 信也	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

広く基礎医学と臨床医学を理解することで、的確に患者の全身状態を評価し、その上で安全な患者の生体管理を実践するために必須である歯科麻酔学の知識を修得する。以上が到達目標である。講義はこの目標に沿って行われた。

2) 自己点検・評価

試験や実習の成績や、学生からの評価から、上記目標は十分に達成できたと考える。スライドで講義をしてプリントで渡してほしいという要望があった。

3) 改善方策

現在の目標は達成できているが、歯科麻酔学の国家試験問題は、徐々に問題数も増加し、範囲も広がってきている。今後も継続的に、高い目標を設定し、それに教育が追従できるように、教育体制を充実させていきたい。スライドで講義をしてプリントで渡してほしいという要望については、後で見れば良く、寝る学生を増やすので、変える必要はない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

完成資料を配ると学生は講義を聴かなくなる傾向がある。また、スライドをこちらのペースで進めると、学生は講義に追従できなくなり、暗くて寝る者が多くなる。そのため、配るプリントはあえて完成度の低くし、プリントには板書を記入するスペースを設けた。講義のメインは板書とした。

2) 自己点検・評価

学生からの評価は、「分かりやすい」、などの回答が得られた。各点数も平均以上を上回っていた。配布したプリントのスペースを上手く使って、綺麗にノートを取ってくれる学生が多く、その点でも効果があったと考える。また、それらが歯科麻酔学の定期試験やCBTに反映されたと考える。

3) 改善方策

現在の講義体系を大きく変えるつもりはない。現在の講義がより学生にわかりやすい、親しみやすい、自然と覚えやすい内容になるように、要所要所で工夫を加えたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

本年度も、〇×式の客観試験(マークシート使用)に加え、5枝択一の問題および筆記試験とした。前期も後期も中間試験を設けたため追再試験を含めて8回の試験で最終成績が判定され、正確な成績評価ができたと思われる。

2) 自己点検・評価

72名が定期試験を受験し、最終評価の平均点は77.5点で、最終評価で不合格となったのは6名であり、この6名は、他の科目も不合格点が多かったため、適切な評価であったと思われる。授業内容をわかりやすく、充実させたための結果だと考え、成果がみられたと考える。

3) 改善方策

従来まで行ってきた客観試験のみでは十分な評価ができなかった部分があるため、筆記試験を導入して理解を深めることができたと思われる。時間的にも余裕がみられたので、本年度も記述問題も追加し、従来通り中間試験も加えて、学習効果を高めたい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科矯正学	第4学年
科目責任者(記載者)	福井和徳	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

矯正歯科治療に係わる総論、診断学、治療学について理解するため、10項目の到達目標を掲げて、通年にわたり教授した。前期は成長発育、正常咬合と不正咬合の基礎を重点に講義した。後期は治療ステップをメインに 総合診断、治療計画立案までの一連の流れからスタートし、抜歯の必要性を説明した。その後、動的治療内容に関する固定の概念、装置の特徴、治療による偶発症、保定と共に再発防止策の講義を実施した。

2) 自己点検・評価

セファロについては講義・実習時間を利用して何度も復習するため理解を深めている。国試問題を授業の最後に確認試験として実施していることで授業範囲の重要ポイントが整理されやすい。一方で配布資料に見にくい箇所やスライドとの整合性が無いとの評価があり、復習しにくいとの評価があった。

3) 改善方策

配布資料に見にくい箇所については拡大表記する、配布資料とスライドとの整合性を持たせるよう準備する。セファロに関しては4年で講義・演習・実習で基礎を固める方策を継続していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

授業形式は教科書を中心に板書・スライドにて講義を行った。授業毎に 講義の最後に関連している範囲の国家試験の平易な問題をピックアップし、確認試験を行った。CBT, 国家試験に頻出されるツイードの計算問題やセファロの計測については復習形式で宿題を課した。

2) 自己点検・評価

国試問題を授業内容毎に紹介し、理解力を向上させた。しかし、問題番号が入っていないことが指摘されていた。教員の授業中の発言に不適切な内容が含まれていた。配布資料とスライドがリンクしていない箇所があった。スライド捲りが早すぎる。

3) 改善方策

最新の出題問題を取り上げ問題番号を記載し、理解を深めさせたい。授業中の発言内容には自身の自慢は避ける。双方向で学生の確認を取りながらスライドのページを捲れるよう配慮する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期・後期の定期試験で評価した。セファロに関しては確認試験としてセファロトレース分析試験を12月に実施した。

2) 自己点検・評価

12月にセファロの中間試験を実施したが 出題内容を縮小したことから今年度の改善要望には含まれていない。

3) 改善方策

成績評価については中間試験の内容を改善したが、今年度以上に授業での確認試験に重点を置き、CBT対策に繋げるよう配慮したい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科矯正学実習	第4学年
科目責任者(記載者)	福井和徳	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科矯正学に関する基本的な技能を身に付けさせる。特に歯が移動するための原理を理解するために、舌側弧線装置およびマルチブラケット装置の2種類で歯の移動シュミレートを行わせ、学習する。

2) 自己点検・評価

全員が歯の移動シュミレートを実施し、タイポドント模型上で矯正力が発現するメカニズムや歯の移動様式を理解できることが達成された。しかし、実習進行の遅れている学生の手伝いをしているインストラクターに対する学生の態度不良を注意しないことが挙げられていた。

3) 改善方策

実習の手伝いを行う際には 関わり過ぎず 要所要所で指導を行う。集中していない学生にはその都度注意を行う。実習ステップについては到達目標を達成するのに十分な時間配分のため、今後もステップの見直しを行い、無理な箇所がある場合は速やかに調整を行う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習前に示説を行い、基本手技後に2種類の装置製作に入る。各班毎にインストラクターをおき、ステップ毎に確認を得ながら進行する。レポート、口頭試問をインストラクターが行う。

2) 自己点検・評価

一人の学生への個人指導時間が長すぎる。ストレッチャー毎の指導内容は各実習前の会議で統一を図り、ほぼ一定の指導を行うことができた。実習最初の全体へのデモ時間を減らし、少人数制で行う各ストレッチャーでのデモ時間を多くした。

3) 改善方策

一人の学生への個人指導時間が長すぎる傾向が評価にあるため、時間配分を考慮しながら他の学生とバランスよく指導していく。実習前の会議は継続し、各学生の進行状況を確認するに留まらず、指導法に対する問題点もその場で検討していく。少人数制で行う各ストレッチャーでのデモ内容をさらに充実していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実習態度、小試験、総合試験(筆記・実技)、口頭試問により評価する。

2) 自己点検・評価

コロナ感染症対策のため数名で総合試験に参加できず、再試験で対応した。前年度に評価された口頭試問での難易度の差について今年度は評価に記載されていない。実習最後の総合試験での出題内容は国試出題基準に従い毎年調整を行なっている。

3) 改善方策

口頭試問での難易度の差については評価に記載されていないため、引き続き模型実習会議で試問内容の調整を行っていく。総合試験での出題内容は国試の出題基準に従い毎年調整を行っており、6年での理解度も得られていることから継続していく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	小児歯科学	第4学年
科目責任者(記載者)	島村和宏	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

小児の口腔の健康維持、歯列・咬合の育成をはかるために、成長発育(心身の発育・発達)について学び、小児の口腔発育・発達および種々の口腔疾患を理解して、その診断と治療法についての知識を習得する。大きな変更の必要性は感じていない。

2) 自己点検・評価

前年度の成績を踏まえ、初回講義の際に今後のCBT・OSCE・臨床実習試験・国家試験に向けて個々の目標設定の重要性と自主努力、ルール順守を指導した。公平公正に心掛けて指導し、一部学生には厳しいと捉えられているようだが、シラバス通りの講義スタイルや試験内容などに大きな問題はないと考えている。試験は前後期で行い、平均点は昨年度より若干上昇した。留年者も少なかった。

3) 改善方策

関連教科の担当者からの意見も参考に講義してきたが、あらためて他大学の状況も情報収集する。他大の教員と共同で作成した教科書も改編したため事前資料の見直しを図る。基礎科目に関連した項目も多く、虐待など近年の社会状況の知識も必要のため、そうした話題の解説も増やし、あらためて自主的準備の必要性を伝達する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

各講義最初に重要ポイントを指摘し、該当する教科書記載場所を確認しながら講義した。CBTを見据えて画像を活用し、重要項目を記したプリントを配布した。特に重要な点はあらためて板書し図を描きながら学生自身にも確認させて授業を進めた。視覚素材として関係する症例、マネキン、顎模型等を提示し説明を加えた。実習時間の試問小テストも継続した。

2) 自己点検・評価

当日の授業項目・内容を板書し当日の授業目標を明確にした。常にCBTと国試問題を意識して講義を進めたことで、動機付けに繋がっている感じている。視覚資料の改変を勧め、理解を深めさせた。実習時間のレポート作成・試問も行い講義と連動させていた。厳しいとの意見もあったが概ね理解を得られた。

3) 改善方策

基礎的問題への理解不足には、関連事項が出て来た際にこれからも繰り返し説明する。その際に関連他科の事例も取り入れる。事前準備と重要事項(ポイント)の指摘をさらに充実させ、よりわかりやすい講義を目標に配慮する。視覚資料等の点検充実を計る。実習時間の指導との関連強化。板書の量を減らし、講義に集中させつつ学生への質問を行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前後期の定期試験により評価した。前後期それぞれで成績が十分でなかった者については、再試験と適宜試験を行った。その結果をシラバスに記載の評価基準に則って判定した。

2) 自己点検・評価

前後期定期試験の結果、合格点未満の学生に適宜試験と再試験を実施した。前・後期定期試験の内容は全講義項目の内容を網羅した出題となっており、学生の理解・習得度の評価には適切であった。試験前には重要項目を確認させているが、本試で合格基準に満たなかった者もあり、さらに理解度を高めさせたい。平均点や最高点は昨年度並みであった。

3) 改善方策

生理的特徴や解剖学的特徴など前期の基礎的項目が苦手なものが多かった。興味をひきやすい臨床的内容を関連づけて講義しているが、重要項目の理解を目標に、画像を増やし講義内容の充実を計るとともに、後期にも引き続き前期の内容を復習させつつ、実習も連動して知識定着を図る。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	小児歯科学実習	第4学年
科目責任者(記載者)	島村和宏	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

小児の口腔疾患の診断、処置ならびに口腔健康維持管理を遂行するために、小児のう蝕治療・咬合誘導処置・予防的処置の各項目の理論(知識)と技能、態度を習得する。実習では成長発育過程にある小児の歯科診療(治療)の特徴をよく理解することも重要となる。なおこれらは「モデル・コア・カリキュラム」に沿った内容を基本として実習を進める。

2) 自己点検・評価

共用試験OSCEも見据えて「モデル・コア・カリキュラム」に準拠し、実習計画を立てて実践した。「臨床総合演習」の課題と重要課題を網羅した。デモや視覚素材も利用したが留年者や編入者のなかに見ていない者がいたようで残念である。実習と演習が補完的役割も果たすため、復習がてら小テストを実施したが成績不良者は固定されていく。時間配分と教員数や教員間の差についての意見があった。

3) 改善方策

OSCE公的化に伴い育成系課題が一旦なくなったが、今後復活の可能性があるため臨床実習も見据えて時間配分を調整して対応する。実習が苦手な者もいるため、時間に余裕ができる者もいるが、ある程度余裕を持った配分とする。実習時間の中で円滑・効果的に進められるような実習を目指す。講義と連動したレポート提出、小テストを継続する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習内容に沿った教室独自のサブテキスト2022小児歯科学実習を作成し全員に配布した。また全実習項目で実習開始時に視覚素材<ビデオ>による説明・解説後、各グループごとにデモンストレーションを行った。講義と連動したレポート提出、試問を行った。学生評価は高かった。

2) 自己点検・評価

各グループ担当教員が学生の質問・疑問点に積極的に対応したが、コロナの影響で休む者もあり全体のスケジュール進行と各自の進捗状況のバランスが難しかった。実習開始時に当日の実習内容に関する小テストを実施。各ステップごとに処置・製作物の段階的評価を行い学生にフィードバックしている。態度の良い学生への対応のについて全体での共通化はできなかった。

3) 改善方策

OSCE課題から外れたが基本的実習形態・方法・内容は前年度を踏襲する。時間配分の見直しや、指導教員の一層の指導力向上を図り、増員された非常勤講師の協力により対応力を強化する。実習指導内容の標準化・統一化に努める。一定の検印待ち時間は必要なため、指示した学習項目の予習復習を徹底させる。科目間での指導基準についてお願いする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

各実習項目ごとに実習内容および製作物の評価、ならびに実習試験(筆記試験・課題試験)を実施し、これらを総合して実習の評価を行った。

2) 自己点検・評価

シラバスの記載通りに評価した。学生の知識・技能・態度を総合的、客観的に評価している。不合格者がいたが再試で合格できた。コロナの影響で実習日に不在の者への対応に苦慮した。適宜試験や追加口頭試問も実施し、知識の定着に努めたが、成績の低い学生には多少の重荷となったのはやむを得ないとする。

3) 改善方策

従来通り、実習内容に即した各実習項目・課題・実習試験を総合して評価する。臨床的手技に精通した非常勤講師の協力のもと、医局員と共に指導体制を強化する。学生には負担もあるが、口頭試問やレポートは継続する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科放射線学Ⅱ	第4学年
科目責任者(記載者)	原田卓哉	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標の内容についてある程度達成されていると思われる。

2) 自己点検・評価

長所:説明がわかりやすい。
問題点:解説の時間が少ないときがある。

3) 改善方策

長所を伸長するための方策:わかりやすい説明をする。
問題点を解決していくための方策:解説の時間を多くする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書の解説と要点の抽出および説明をしている。

2) 自己点検・評価

長所:説明がわかりやすい。
問題点:解説の時間が少ないときがある。

3) 改善方策

長所を伸長するための方策:わかりやすい説明をする。
問題点を解決していくための方策:解説の時間を多くする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

正解率は70%以上を維持している。評価方法は妥当と思われる。

2) 自己点検・評価

長所:説明がわかりやすい。
問題点:解説の時間が少ないときがある。

3) 改善方策

長所を伸長するための方策:わかりやすい説明をする。
問題点を解決していくための方策:解説の時間を多くする。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	高齢者歯科学Ⅱ	第4学年
科目責任者(記載者)	鈴木 史彦	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

高齢者歯科学Ⅱでは摂食嚥下リハビリテーションに関する知識を習得することを目的としている。主な到達目標は、摂食嚥下に関する解剖と生理、摂食嚥下のモデル、原因疾患と合併症、摂食嚥下障害の評価とリハビリテーションの方法、嚥下補助床、栄養管理について学習する。

2) 自己点検・評価

シラバスの内容に沿って授業を実施した。長所は授業の開始時に「今回の重要3項目」を提示することで、その回で学習すべき内容のコアとなる部部を明確にしたことである。問題点は、1時限のなかで内容が多い回の際に、後半で十分な説明ができないことがあった点である。

3) 改善方策

モデルコアカリキュラムと国家試験の出題基準が更新されたことを踏まえて、今まで実施してきた重要項目と、これから教育すべき内容について乖離が内容に確認しながら、わかりやすい授業を継続していきたい。また、使用している教科書も改訂となるため、新しい情報に対応できるように、これまでの講義内容を見直してアップデートしていく予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

前回の授業の復習をするために、最初にGoogleフォームを用いた確認テストをしている。結果がすぐにグラフで反映されるため、授業内容に対する学生の理解度の確認にもなる。授業は使用している教科書をもとに、内容をまとめた講義資料とスライドを用いて実施している。また、その回と関連する歯科医師国家試験の過去問題を練習問題として説き方を解説している。

2) 自己点検・評価

講義資料は単にパワーポイントのスライド一覧ではなく、ワードファイルにしたものを別途準備し、字が読める資料を心がけている。Googleフォームでの確認テストにより、リアルタイムで作成される正答率グラフをもとに解説することで、双方向性も確保している。スライドには適宜動画を挿入することで、わかりやすいように工夫している。内容が多い場合に、授業の後半で説明が不足することが問題点である。

3) 改善方策

1回の講義で内容が多いものに関しては、内容を2回に分けて実施するような見直しが必要と考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験と追・再試験により100点満点で評価している。80点は筆記問題で、授業で提示した重要3項目に関する問題を出題している。20点は選択肢問題で、授業で提示した歯科医師国家試験の過去問題を改変した問題を出題している。筆記試験と選択肢試験の合計が65点以上の者が合格となる。

2) 自己点検・評価

定期試験と追・再試験の終了後に正答を配布し、その場で学生からの疑義を受け付けている。また、定期試験と追・再試験は異なる範囲から出題することで、追試と再試の受験者に対する公正性を担保している。

3) 改善方策

授業開始時の確認テストについて、授業評価には明示していなかった。今後は、確認テストの分を加点として最終成績に組み込むことを検討している。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	障害者歯科学	第4学年
科目責任者(記載者)	佐々木重夫	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

2021年度同様、学習者が障害者の基礎的な内容を理解してもらう事に重点を置いた。

2) 自己点検・評価

内容を簡潔にしたため、より理解しやすい環境であったと思われた。

3) 改善方策

さらに学習者が理解しやすいよう配布プリントや提示スライドを簡潔にする必要があると思われた。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

2021年度に比較して授業スライド同様に配布プリントの写真を提示スライド同様に増やした。また、前年度同様、授業において診療等で得た内容も授業に含めた。

2) 自己点検・評価

2021年度に比較して授業理解の確認のために受講者と双方のやり取りを増やした。

3) 改善方策

授業時間が限られているが、さらに双方向のやり取りを行う必要があると思われた。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験は授業内容からの出題とし、歯科医師国家試験同様のマークシートを採用した選択式問題50問とした。

2) 自己点検・評価

定期試験における問題において正答のばらつきのある問題の項目は受講者の理解度に差が生じていると思われたので、理解しやすい講義をする必要があると思われた。

3) 改善方策

再試験対象者の8名に対しては再試験前に特別授業を行い、多くの受験者が間違った問題について解説し、定期試験問題の40% (20問) 程度の問題を再作成して受験した結果、全員が65点以上を解答し、合格となった。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床総合演習	第4学年
科目責任者(記載者)	清野 晃孝	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

OSCE全29課題の内、本臨床総合演習では、26課題をそれぞれの専門分野が6人ないし7人班に濃密に2コマを使用して到達目標に全面的に則した教授を実施している。

2) 自己点検・評価

OSCE全29課題の内、本臨床総合演習では、26課題を実施しているが、それぞれの課題には8つ前後の到達目標が設定されており、学生に現実的に理解しやすく対応していると判断する。問題点としては、学生数が72名で前年度よりは少ないが、すでに履修経験がある留年者やOSCE受験経験のある編入生のモチベーションを維持する事は苦慮するものであった。

3) 改善方策

各分野のインストラクターが指導内容を標準化し、毎回、真摯に対応すること。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

最初の時間帯に5F実習室に学生全員を集める全体会は最小限の回数にとどめ、全体の周知を行い、その後各セッションに移動し6～7名の学生に当該課題に精通したインストラクターが詳細に分かりやすく、情熱をもって指導している。なお、学生には1課題ワンチャンスとして、その場で確実に習得することを周知している。

2) 自己点検・評価

2コマの限られた時間において、当該課題に精通したインストラクターが小人数の学生に教授することで、学習効果は向上していると考えます。

3) 改善方策

臨床総合演習は、他の模型実習とはことなり、全ての臨床講座が同一時間帯に参加することで一体感をインストラクターおよび学生に持続させることが教育効果を高く維持するための方略と考えます。なお、次年度は公的化OSCEトライアルを控えており、10課題を中心に実施することになるが、CBT対策として知識の獲得のために出題外の科目も実施する予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

演習の最終2日間で8課題の実技試験を実施した。8課題の平均値を算出し、総括的評価の合格基準は今年度から72%以上としています。

2) 自己点検・評価

総合点数の学年の平均値は85.7点であり、最高点は94点、最低点は72点であった。この数値は例年ほぼ同じであり、6課題で評価される医療系大学間共用試験実施機構が行うOSCEにおいても受験生全体の平均値は89点前後であり、本臨床総合演習の成績とリンクしていることが伺える。

3) 改善方策

成績評価に関しては、例年ほぼ同じ高点数を維持しているため、継続したいと考えますが、特に前半での実施課題を形成的評価として1学生2課題を実施し直後にフィードバックを1分間行った。これにより気づきを促すこととなる。なお、1課題2コマであり、集中力を高めより実践を積み重ねて修得させることとします。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床実習	第5学年
科目責任者(記載者)	大野 敬	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本学附属病院での臨床実習はローテーション方式で実施されていることから、到達目標は各科目ごとに設定されている。その内容は臨床実習必携に記載されており、歯学教育モデルコア・カリキュラムの臨床実習の項目に示されている水準に準拠した自験・介助・見学の臨床症例が経験できるような目標を設定している。

2) 自己点検・評価

自らシラバスやカリキュラムを確認した学生は全体の平均をやや上回る程度であった。臨床実習開始時のオリエンテーションにおいて、シラバスと臨床実習必携を配布後に各科目の担当者から概略が説明される。したがって、長所は自ら確認をしなくても到達目標が説明されることであり、問題点は科目によって到達目標の説明内容にばらつきがある点である。

3) 改善方策

オリエンテーション時に到達目標に関する説明が不足だと学生が感じる場合には、それぞれの科目をローテーションする際に、自ら臨床実習必携を読んで確認しておくように朝礼を通してアナウンスを行う。また、担当教官に対してもプレクリ時に到達目標の説明を再度行うよう、臨床実習実務者委員会を通してアナウンスをすることで、臨床実習の目標をより明確にできるものと考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

各科目で必須ケースを設定することにより、診療参加型臨床実習中に、必要な自験症例を満たせるように教育している。また、症例に対する理解を深めるために、必要に応じてPBLやレポート等による知識教育が併用されている。臨床実習の進捗状況については、2週に1回開催される臨床実習実務者委員会と、1月ごとに開催される臨床実習委員会で確認することで、必須ケースが不足する学生が出ないように配慮している。

2) 自己点検・評価

学生からは、予習と復習の実施、教員からの重要項目の説明、教員への質問については、全体の平均をやや上回る評価が得られている。臨床実習実務者委員会で、科目の担当教員とクラス担任と一緒に情報共有をすることで、円滑な臨床実習を実施できていることが長所であると考えられる。一方で、学生からは一部教員からのパワハラ行為に対する不満も挙げられていることが問題点である。

3) 改善方策

ハラスメントに関して特に問題が挙げられた教員については、歯学部長、学生部長、学年主任と話し合う場を設けたり、一定期間学生教育から離れてもらったりといった対応をしたものもある。しかし、すべてのハラスメント行為に対して十分な対応ができていないことから、ハラスメント委員会と連携をとったり、学生が日常的に相談しやすい環境づくりをする等の改善が必要であると考えられる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績評価はI～IV期までの終了試験による知識評価、必須ケースを含む技能評価、出席率と身だしなみによる態度評価をコアとしている。具体的には、知識点の平均が65点以上であること、必須ケースをすべて満たしていること、知識・技能・態度を100点満点に換算して、合計65点以上であることが進級要件となる。加えて、CPX、CSX、および総合試験5Dに合格することが進級要件となる。

2) 自己点検・評価

評価の進捗状況は第I期から第IV期の終了試験実施後に、各科から知識点・技能点・態度点を提出してもらい、全学生の進捗状況を確認した。クラス担任から担当学生にその内容をフィードバックしてもらうとともに、不足ケースに関しては各科で対応してもらった。一方で、技能点の必須ケースに教授口頭試験といった知識点評価の項目が含まれており、特定の科目で多数の不合格者が多く、再試験が繰り返される事例が認められた。

3) 改善方策

各期での学生の進捗状況を把握することにより、適切に対応をしている点については継続的に実施していく。技能点の必須ケースから知識に関する項目を削除すべく臨床実習に関する各委員会です承を得て、2023年度は改善されることとなった。現状では知識点の評価が終了試験のみであることから、PBL、口頭試験、レポート等に関しては知識点に組み込めるように検討中である。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔解剖学	第6学年
科目責任者(記載者)	宇佐美晶信	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験に合格するための、口腔解剖学に関する内容を理解することを目的としている。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価アンケートで「予習をおこないましたか」の項目以外で平均よりも高い結果が得られている。

3) 改善方策

予習を促すために講義資料を事前配布するにしても、「プリントを忘れた」などという学生への対応が十分にできる工夫が必要であるので、今後対応を考えたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

口腔解剖学分野作成のプリントに従い講義をおこなっている。また必要に応じて、実力試験や外部模試の分析結果に関する注意事項の説明をおこない、知識の定着を目指している。

2) 自己点検・評価

「国家試験に関連する項目や、関連する類似事項などを含めた説明が多く、ありがとうございます」とのコメントをいただいている。

3) 改善方策

今後も、国家試験全体を見渡して、口腔解剖学に関連する問題を含めて講義を行ってきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

卒業試験で評価する。

2) 自己点検・評価

3回の卒試の平均でも、口腔解剖学分野の問題の正答率は77.3%であった。

3) 改善方策

合格基準が70.0%の卒業試験において、分野の正答率平均が77.3%であったので難易度に問題はなかったと考える。最終目的である国家試験の分野関連問題の正答率が高くなるよう、今後も検討を重ねていきたい。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔組織学	第6学年
科目責任者(記載者)	安部 仁晴	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験合格を最終目標に、細胞と組織、人体諸器官、さらに歯と歯周組織をはじめ口腔諸器官の正常構造と微細構造を機能と結びつけ、それらの発生過程、加齢変化を理解出来るように、講義した。また、単に口腔組織学の基本的な知識の習得のみならず他の基礎系科目や臨床系科目と結びつけることが出来るような思考を修得できるように心がけた。

2) 自己点検・評価

集計項目のすべてで平均を上回っており、到達目標と講義内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。また『他の科目との関連性が理解できた』との意見があり、到達目標に合致した講義内容であることは評価できる。

3) 改善方策

集計項目のすべてで平均を上回っており、到達目標と講義内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

重要事項をまとめた配布資料(講義プリント)を作成し、スライドを主とした教育方法とした。予習と復習のために授業資料提示システムを使い、配布資料は事前にアップロードした。また、教育内容では、形態学を理解しやすくするために、写真や模式図を数多く取り入れて講義するよう心がけた。

2) 自己点検・評価

集計項目のすべてで平均を上回っており、『わかりやすい』や『理解できた』との意見が多かったことから、教育方法は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、予習した学生の割合が少ない傾向にあり、質問のしやすさについてもやや低い傾向にあったことは今後修正したい。

3) 改善方策

予習する手段として、講義資料を授業資料提示システムに事前にアップロードしていたが、学生に周知されていない可能性があるため、講義の早い段階でアナウンスを数回行いたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

3回の卒業試験で評価した。

2) 自己点検・評価

卒業試験に出題した問題の正答率は、平均で73.17%と概ね評価できる。しかし、正答率が55%以下の問題が3問あったことは、対応すべきと考える。

3) 改善方策

正答率が55%以下の問題が3問あったため、回答の傾向を分析し、講義内容をもう一度、精査したい。

2022年度 授業の自己評価票

授業科目・対象学年	口腔感染免疫学	第6学年
科目責任者(記載者)	清浦有祐	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標は「1)講義は全て出席し、講義内容を全て理解する。2)講義以外の実力試験FBや強化講義を利用し、理解度を深める。3)実力試験、外部模試を全て受験し、確実な知識を得る。4)実力試験では正答率85%を獲得する。5)外部模擬試験では全国順位上位50%以内を維持する。6)卒業試験では正解率70%以上を獲得する。以上の目標を実現するために学生の向学心と理解度を高める授業を行っている、

2) 自己点検・評価

2022年度の実力試験・外部模試・国家試験の結果からは、口腔感染免疫学において改善すべき大きな課題は無いと考えられる。

3) 改善方策

到達目標について、実力試験・外部模試・国家試験の結果からは大きな改善の必要を認めない。しかし、新型コロナウイルス感染症のようなあらたな感染症や微生物の出現に対応するために、改善する必要がある際は行って行く。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

口腔感染免疫学の内容を理解しやすいようにまとめたプリントと板書を中心とし、学生の理解を深める講義を行った。授業後は新型コロナウイルス感染防止のために、対面での質問対応の代わりにZoom、あるいはメールや電話で対応した。また、ほぼ毎日講義室に向き、感染防止策を施した上で学生に声をかけて授業の理解度を確認した。

2) 自己点検・評価

2022年度の実力試験・外部模試・国家試験の結果からは、口腔感染免疫学において改善すべき大きな課題は無いと考えられる。実力試験の結果は常に確認し、理解度の低いと考えられた箇所は、再度説明を行ったり、新たなプリントを配布することをを行った。プリントの記載内容も理解度を増すように昨年度のものに改良を重ねた。このことにより、国家試験に合格するための学力を身に付けさせることができたと考えている。

3) 改善方策

授業方法や授業の内容について、実力試験・外部模試・国家試験の結果からは大幅な改善が必要な事柄を認めることはできない。しかし、授業アンケートの結果を参考により優れた授業となるように改善を行っていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績評価は授業概要の記載に従って、3回の卒業試験の平均点で判定した。

2) 自己点検・評価

成績評価については、現状のままで特に大きな問題はないと考える。

3) 改善方策

成績評価では、特に改善すべき点は無い。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔病理学	第6学年
科目責任者(記載者)	遊佐淳子	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

国家試験出題基準に関わる全ての内容を理解するために、出題傾向および出題基準を基に講義をしている。

2) 自己点検・評価

国家試験出題基準を確認し、重要事項を提示した上で講義を行うことにより出題基準に関わる内容を理解できると考える。

3) 改善方策

国家試験出題基準のどの部分について講義しているのかを明確に示し講義を行う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

過去の国家試験問題などを引用しながら各項目の重要事項を確認するような講義を行っている。講義内容をまとめたプリントを配布している。

2) 自己点検・評価

配布プリントにより、重要事項を確認することができる。しかし、授業評価によりプリントに病理像がないため復習しづらいことがあるとの意見があり改善する必要がある。また、講義で復習をした後、過去の国家試験問題を解答することで理解を深めることができると考える。

3) 改善方策

講義プリントに組織像を増やすことで復習ができるようにする。各種試験の結果により理解度を確認し、知識不十分な部分を再確認するような講義を行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実力試験、確認試験、卒業試験で評価している。

2) 自己点検・評価

それぞれの理解度を確認するために、実力試験や確認試験、模擬試験は妥当である。

3) 改善方策

各試験を行うことで知識の再確認を行う。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科薬理学	第6学年
科目責任者(記載者)	鈴木 礼子	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

令和5年版歯科医師国家試験出題基準に準拠の上、歯科薬理学に関して、歯科医師国家試験に合格するために学修すべき内容を講義し、試験に出題した。但し、全14回という授業回数に鑑みて、歯科薬理学と他科目で重なる事項のうち、他科目が主体となって講義する事項(消毒薬・局所麻酔薬等)については、まとめの回で触れるのみとした。逆に、歯科薬理学が主体となって講義すべき事項については、重点的に講義した。

2) 自己点検・評価

116回歯科医師国家試験に出題された歯科薬理学の問題の内容については、全て、授業で講義していた。また、「学生による授業評価」でも、「歯科医師国家試験に合格するために学修すべき内容に的を絞って解説・問題演習した、有意義な講義・資料であった」との高評価を得ていた。従って、科目担当としては、到達目標の達成に貢献できたと考えている。

3) 改善方策

今まで通り、科目内で、歯科医師国家試験における出題傾向を押さえた上での講義内容のブラッシュアップを図り、学生にとって有意義な講義・資料・試験となるよう、努めていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

2名の教員で歯科薬理学の講義・試験作問を担当した。スタイルは多少異なるが、両名とも、歯科医師国家試験の出題基準・出題傾向を分析した上で、ポイントをまとめた資料および問題演習プリントを配布し、解説講義と問題演習を実施した。実力試験や卒業試験の出題に関しては、両名で、必ずブラッシュアップを実施した。

2) 自己点検・評価

「学生による授業評価」では、両名とも、「わかりやすい資料」・「わかりやすい講義」・「実践に即した問題演習」との評価を得ていた。従って、教育方法の基本方針は、妥当であったと考えられた。

3) 改善方策

「学生による授業評価」を尊重し、今後も、「わかりやすい資料」・「わかりやすい講義」・「実践に即した問題演習」となるよう、しっかり準備と実施を行なっていく。また、大前提として、科目内で、しっかりと、歯科医師国家試験の出題基準・出題傾向を分析した上で、教育を行なっていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

3回実施した卒業試験に、必修問題と一般問題、合わせて、各回6題ずつ出題した。

2) 自己点検・評価

卒業試験に出題した問題の傾向や難易度は、概ね、116回歯科医師国家試験の歯科薬理学の「一般問題」と乖離していなかったと考えられる。しかしながら、卒業試験に「必修問題」として出題した問題の中に、正答率・識別指数が共に低い(20%以下・0.20以下)ものがあった。本問題で問うた知識は、直近の授業でも触れており、問題として不適切ではないものの、授業での注意喚起の仕方に工夫が必要であったと考えている。

3) 改善方策

授業や、実力試験の段階から、学生が曖昧に修得しがちな事項について、明確に修得できるような講義と問題演習を実施する。それにより、タキソノミーが上がった問題にも対応できる実力を養成する。また、歯科医師国家試験における必修問題の難易度は、個々の問題を細かく見れば、回によって変動するが、卒業試験の「必修問題」としては、より基本的な問題を出题するように、科目内でのブラッシュアップを今まで以上にやる。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生理学	第6学年
科目責任者(記載者)	川合宏仁	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

基本的な事項を全般的に理解させることで、国家試験に対応できる学力を身に付けさせる。学力の低い学生にとっては難解でも、ほとんどの学生がある程度内容を理解できていた。

2) 自己点検・評価

基本事項を説明し、全般的な内容を説明したことには効果的があった。

3) 改善方策

基本的事項をさらに絞って重点的に学習させることでより深い内容理解につなげるようにする。講義中に関連する既習事項もより多く上げることで効率的に学習できるようにする。出題予想だけでなく、基本の点検を充実させる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

国家試験問題に対応させるため、問題演習も意識的に増やした。多くの学生で効率的に理解の助けとなったが、意欲の低い学生には効果がなかった。

2) 自己点検・評価

効率的に授業内容を理解させるために、演習問題をプリントを配布し、必要に応じて補助プリントを追加・配布した。効率的に内容を理解させるのには、有用であった。

3) 改善方策

講義中の学生たちへの問題提起を意識的に増やすようにする。平易な問題の解説や、タキソノミーの高い問題を解くためのステップを解説する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

6回の実力試験、3回の卒業試験による評価

2) 自己点検・評価

実力試験では、再試験、再々試験も行っているので現状で十分と考える。また、実力試験では、直近の授業内容からの出題であるが、もともと学生の苦手意識が強い科目なため、学力の差が顕著に表れている。

3) 改善方策

講義内容とリンクした、わかりやすい問題作成に努める。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生化学	第6学年
科目責任者(記載者)	加藤靖正	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生化学の知識を歯科医師国家試験に出題基準に基づいて、前半をトピックス毎に解説し、後半を既出の国家試験問題を題材として知識の整理に充てた。トピックスとしては、細胞外マトリックス、石灰化とCaのホメオスタシス、遺伝情報、細胞の増殖、細胞死、唾液、ペリクルとプラーク、関連疾患とした。

2) 自己点検・評価

15.2%(前年24.0%)の学生が予習しておらず、授業中に理解を深めることは困難であるにもかかわらず、10.9%(16.0%)の学生が復習していない結果となった。前年比で大幅改善となった。知的好奇心については、84.8%(前年64.0%)が肯定的に評価しており全体平均高評価となった。科目の平均は3.23(全体平均3.33)であった。ただし、回答率が54.8%だったことについては留意したい。

3) 改善方策

一層の学修意欲向上に努める。知的好奇心は前年より大幅に改善された。知的好奇心は科目の理解につながるので話題提供なども厳選し提供する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

解説プリントと演習プリントを配布し、解説した。

2) 自己点検・評価

プリントの構成に対する意見が散見された。演習形式の方を好む意見があった一方、とても良かった、そして板書よりもレジュメの方が話をよく聞けるとの好意的な意見もなされた。基礎学力の違いで、評価に差があったのかもしれない。

3) 改善方策

資料提示に関しては、毎年バージョンアップする。内容の厳選、レイアウトの工夫に務める。話す内容についても厳選する。データ配布に関しては、著作権の都合に合わせた改善する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

口腔生化学単独での評価はせずに臨床総合講義としての評価となる。多肢選択式で実施される3回の卒業試験の平均が70.00%以上で合格とした。

2) 自己点検・評価

評価は国家試験に準じており、適切に運営された。臨床総合講義の単位数は10単位である。単位認定試験は行われず、卒業試験をもって評価とされている。

3) 改善方策

近年の国家試験結果の動向に対応した基準の策定を検討する。臨床総合講義の単位認定試験と卒業試験との関係性については、さらなる検討が必要である。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	保存修復学	第6学年
科目責任者(記載者)	山田 嘉重	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

科目の到達目標は歯科医師国家試験の保存修復学の問題に対する十分な解答能力を身につけさせることである。現在はその目標に向かって毎年授業法を改善している。

2) 自己点検・評価

歯科医師国家試験および外部模試における保存修復学の正答率は以前と比べて正答率は上がってきている学生が増えていると思われる。

3) 改善方策

成績が伸びない学生がまだいるので、得点率が伸びない項目を検討して講義をおこなっていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

山田嘉重、菊井徹哉の2名の授業講義者により講義を行っている。授業の方法は主にスライドを用いて、教科書の重要項目および過去の歯科医師国家試験問題や過去数年の外部模試の問題の解説を混ぜながら行っている。

2) 自己点検・評価

前年度の歯科医師国家試験の過去問題や外部模試問題を追加することで、常に新しい問題の出題傾向とその問題の解答法を講義できた。そのためこれまでの出題傾向で重要であると思われる問題の解答能力を身につけさせることはある程度できたものと思われる。

3) 改善方策

歯科医師国家試験、外部模試、卒業試験を通して学生の得点率が上がらない項目を再検討していく。それらの項目を関連教科の問題と照らし合わせながら、学生の知識の定着しやすい講義を心がけて授業内容を改善していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

卒業試験の全教科の総合成績で判定している。

2) 自己点検・評価

3) 改善方策

2021・2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯内療法学	第6学年
科目責任者(記載者)	木村 裕一	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

全体の到達目標として1)講義は全て出席し、講義内容を全て理解する、2)講義以外の実力試験FBや強化講義を利用し、理解度を深める、3)実力試験、確認試験、外部模擬試験を全て受験し、確実な知識を得る、4)実力試験では正解率85%以上を獲得する、5)外部模擬試験では全国順位上位50%以内を維持する、7)卒業試験では正解率70%以上を獲得するとなっている。歯内療法学という科目の到達目標は立てていない。

2) 自己点検・評価

全体の到達目標に関しては、全ての講義に出席していない学生がいるので、到達できていない状況である。実力試験での正解率が85%以上に関しては、何回か複数回試験を行うことで達成している。外部模試での上位50%以内を維持するに関しては最後の方では維持できていないのが現状である。卒業試験で正解率70%以上に関しては留年者がいることから達成はできていない。

3) 改善方策

出席に関しては自己の体調管理をしっかりと行うことで達成してもらう。外部模試での上位50%以内を維持するに関しては、相対的に成績が低下している傾向にあるので、最後まで気を緩めずに他の大学を気にしながら頑張ってもらう。卒業試験で正解率70%以上に関しては各自が勉強して達成してもらうしかない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

スライドを利用して3時間の講義を14回行っている。まず、各講義の最初の1時間を使用して、本日の講義内容の概要を説明して、国試での出題箇所などを説明して、その後の2時間を使用して確認のため、問題を解きながら解説を加えている。

2) 自己点検・評価

卒業試験の成績が正解率70%以上に達しているいない学生がいることから講義内容が十分に伝わっていないことが考えられる。卒業試験に関しては講義中に関連する事項として説明しているのも関わらず、試験では成績が悪い学生がいる。

3) 改善方策

スライドだけではどうしても単調になりやすいため、できる限りビデオを利用している。内職をしている学生には注意する。歯内療法学の講義は午後からなので、居眠りをしている学生はできるだけ起こす。何か学生の注意を引く、興味を持たせるような講義をする必要がある。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績の評価としては卒業試験の成績で評価せざるを得ない状況である。3回の平均で64.4点ぐらいの状況である。前年度と比較すると平均点で約15%上昇しているが、これは単純に「すべて選べ」の問題数が減少したことによる。

2) 自己点検・評価

選択肢が「1つ選べ」より「2つ選べ」となる方が確率的にも難しくなり正解率が低くなる傾向があるが、その傾向が強い。これは問題の内容が正確に理解できていないことが考えられ、内容を理解しないで勘で選んでいることを伺わせている。今後はできるだけ内容を理解させる必要がある。

3) 改善方策

6年生から始めるのは時間が足りない可能性があるが、内容を理解しながら覚えさせる必要がある。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯周病学	第6学年
科目責任者(記載者)	高橋慶壮	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯周病の診断, 治療および予防を行うための知識を伝授し, 歯周組織の常態, 疾患, 診断および治療方法を理解し, 歯科医師国家試験に合格するための知識を身に付けさせることを目標としている。42回の講義でおおむね達成できていると考える。

2) 自己点検・評価

歯科医師国家試験の結果を勘案すると, 教育効果が出ているように解釈している。ただ, 学生間の授業態度や歯周病学に関する知識量の差が大きく, 授業に集中していない学生が散見されるが, 成績は総じて良くないようである。自己流のやり方に固執するよりも講義に参加して学習する方が成績向上に繋がると思うが, 考え方が変わらない学生は一定数いると思う。

3) 改善方策

学生間の学力差を勘案しつつ, 学生が自主的に学ぶ習慣を養うように指導する。具体的に, 事前に授業資料提示システムにデータを挙げて, 講義前に予習することを支援している。講義中は, 講義に集中するように指導をしている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書(臨床歯周病学 第3版 医歯薬出版およびザ・ペリオドントロジー 第3班)、プリントおよびスライドを用いた講義を行なっている。国家試験の臨床問題を解くには, 臨床推論の能力が不可欠で, 今後も出題が増えると予測されるので, 知識の定着を確認すること, 具体的には, 知識のアウトプットの練習を推奨している。

2) 自己点検・評価

定期試験および追再試験はマークシート形成にしている。この方法でも学力をかなり正確に把握できていると判断しているため, 今後もマークシート方式を継続する。

3) 改善方策

マークシート形式の試験対策が必要だが, 基本的には知識の定着度を把握する必要があるため, 質問に来る学生対応とZoomによるFeedbackを行っていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

国家試験の模擬試験の結果をみる限り, 卒業生の学力は全国平均レベルにおおむね到達している。今年の6年生の成績からも本学の学生に対して教育効果は上がっていると解釈しているが, 全国平均点より10点以上低い結果の問題領域については, 説明を追加する工夫をしている。

2) 自己点検・評価

マークシート形式を行っている。正答率が低い問題を精査し, 次年度の教育に活かしたい。

3) 改善方策

試験がマークシートの場合, キーワードの丸暗記をして内容を理解していない学生がいるため, 普段からの生活で, アウトプットの練習を推奨する。また, 専門の学問に対する興味を掻き立てるような工夫も必要と思う。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	冠橋義歯補綴学	第6学年
科目責任者(記載者)	羽鳥 弘毅	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「到達目標」を達成するために国家試験問題を講義内容ごとに編集し、講義に先立ち試験を実施した。その後教科書をまとめた講義資料を用いて国家試験問題を解説した。この際「一般目標」での「国家試験合格」と「到達目標」での「卒業試験合格」を意識して講義を行った。本科目は国家試験において必修・一般・各論・臨実問題で出題されることを学生にアナウンスし、授業を深く理解できるよう配慮した。

2) 自己点検・評価

「到達目標」はシラバス記載の通りに授業を行い、授業での「学習の目標」は教科書の内容を反映させた。その結果、10の評価項目のうち5つの項目で全体平均を上回り(0.02~0.05ポイント)、総合平均では科目平均が3.32ポイント、全体平均が3.33ポイントであった。「到達目標」としては「可もなく不可もない状態」と自己点検します。問題点としては、「卒業試験不合格者」が存在してしまうことです。

3) 改善方策

「到達目標」には改善の余地があると考えられるので、「シラバスに沿った授業進行」や「授業の準備(時間配分、資料等)」に配慮して講義を行うことでさらなる高評価を得られるよう取り組みます。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

授業では最初に国家試験で出題された過去問題を15分間で解答し、その後は国家試験問題と教科書をまとめた講義資料を使用して講義を行った。必要に応じ、症例写真も取り扱うことで視覚的に理解が進むよう配慮している。また外部模擬試験での出題内容も解説している。

2) 自己点検・評価

「教員の熱意や授業の工夫」、「重要項目や特殊性、必然性などの指導」では科目平均が全体平均を0.01ポイント(前者)、0.02ポイント(後者)上回っていたことから、教育方法の方向性は正しかったことが長所である。しかしながら「授業の準備(時間配分、資料等)」、「知的好奇心の刺激や興味の向上」及び「教員への質問」の項目は科目平均が全体平均を0.02~0.2ポイント下回ったことが問題点である。

3) 改善方策

「教員の熱意や授業の工夫」、「重要項目や特殊性、必然性などの指導」を基盤として、今後の資料作成は年度更新ごとに国家試験や外部模擬試験などの出題内容を追加することにより教育内容が深まるよう改善していきたい。このことで「知的好奇心の刺激や興味の向上」に繋がるよう努力したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

3回の卒業試験で平均70.00%以上を合格とする。

2) 自己点検・評価

長所は本科目の正答率は高く学生は授業内容をしっかりと理解し、問題解決にたどりつけことである。問題点は採点結果が低い学生が一定の割合で存在することである。”想起→解釈→問題解決”のどこかで情報を整理し切れていない学生が存在することと判断します。この結果が卒業試験での失点につながってしまうと考えられます。授業の進め方なども含めて改善する必要があります。

3) 改善方策

試験問題の正答(率)や識別係数などを判断材料として、授業資料と試験問題のブラッシュアップを行う予定です。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有床義歯補綴学	第6学年
科目責任者(記載者)	山森 徹雄	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、全部床義歯、部分床義歯による補綴歯科治療の理論をまとめ、臨床における応用を理解することを一般目標としている。そのために、有床義歯補綴学Ⅰ、同実習、有床義歯補綴学Ⅱ、同実習および臨床実習に置いて履修した内容を確認すること、およびPOS講義によって臨床での応用を理解することを到達目標としている。

2) 自己点検・評価

臨床実習後にまとめるべき知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するための内容について56時間の講義を行った。講義プリントを作成して配布し、プロジェクターでパワーポイントファイルを提示しながら説明を加えた。必要に応じて板書による説明を追加して学生の理解を図った。他大学の非常勤教員による講義は、コロナ禍対応のため学内スタッフにより担当した。これは、双方向性が得られないためリモート講義は難しいとの意見を受けての判断である。

2) 自己点検・評価

学生の講義に対する集中度は概して良好であったと思われる。学生の理解度を確認しながら講義を進めている。

3) 改善方策

講義担当者の声が聞き取りにくいとの意見があったため、話すスピードや声の大きさを検討する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

計6回の確認試験で、講義内容の理解度を評価した(形成的評価)。また卒業試験に指定された数、種類の問題を提出し総括的評価を実施した。

2) 自己点検・評価

確認試験では、各回とも正答率の低い問題が数問みられた。また卒業試験における平均正答率は70%を下回っていた。

3) 改善方策

確認試験で正答率が低かった問題の領域については、フィードバックで解説したが、次年度の講義における説明を検討する必要がある。また卒業試験における平均正答率はほぼ例年度と同等であった。歯科医師国家試験における平均値は全国平均-3.5%であり、2021年度よりは格差を減少させることができた。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔インプラント学	第6学年
科目責任者(記載者)	山森 徹雄	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、第4学年における口腔インプラント学、同実習および臨床実習で修得した口腔インプラント治療の理論と実践についてその内容をまとめ、整理することを一般目標としており、そのために必要な事項を到達目標としている。

2) 自己点検・評価

臨床実習後にまとめるべき知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するための内容について14時間の講義を行った。講義プリントを作成して配布し、プロジェクターでパワーポイントファイルを提示しながら説明を加えた。必要に応じて板書による説明を追加して学生の理解を図った。他大学の非常勤教員による講義は、コロナ禍対応のためリモート講義とした。

2) 自己点検・評価

学生の講義に対する集中度は概して良好であったと思われる。学生の理解度を確認しながら講義を進めている。

3) 改善方策

講義資料が見にくい部分があるとの要望があったため検討する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

計6回の確認試験で、講義内容の理解度を評価した(形成的評価)。また卒業試験に指定された数、種類の問題を提出し総括的評価を実施した。

2) 自己点検・評価

確認試験では、各回とも正答率の低い問題が数問みられたため、フィードバックで説明した。

3) 改善方策

確認試験で正答率が低かった問題の領域については、次年度の講義における説明を検討する必要がある。歯科医師国家試験での口腔インプラント学の問題の平均正答率は全国平均-1.9%であり、2021年度よりも格差を減少させることができた。また本学の全科目の平均に近似した。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科矯正学	第6学年
科目責任者(記載者)	福井和徳	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験の出題傾向および出題基準を基に授業を構成し、歯科医師国家試験の合格に必要な歯科矯正学の内容を総復習して確実な知識を得る。

2) 自己点検・評価

授業内容は歯科矯正学の出題基準に従い、基本的事項から応用まで復習できるよう各回教授している。一部の教員のみ限定して講義を希望する声があった。

3) 改善方策

教育内容を事前に授業担当者間で確認する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生はシラバスに記載されている当日の授業内容を事前確認し、授業内容と実力試験、卒業試験がリンクできるよう配布資料で双方向性を取りながら教授する。

2) 自己点検・評価

視覚素材の配布資料について見づらいとの声があった。授業資料の練習問題解答について情報が欠落していた。

3) 改善方策

視覚素材の配布資料印刷について見やすいよう調整する。授業資料の練習問題解答については必ず授業内で伝達する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

卒業試験で評価する。

2) 自己点検・評価

卒業試験問題と116回国家試験で出題された問題との一致度を検証している。卒業試験に出題した問題、授業で教授した内容は国家試験とリンクしている。

3) 改善方策

今後、卒業試験問題をさらに歯科医師国家試験とリンクできる問題作成を行う。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	小児歯科学	第6学年
科目責任者(記載者)	島村和宏	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験に合格することを目標に、小児の口腔の健康維持、歯列・咬合の育成に関わる、成長発育(心身の発育・発達)および種々の口腔疾患を理解して、その診断と治療法についての知識を習得する。

2) 自己点検・評価

歯科医師国家試験での大学成績は振るわなかったが、小児歯科学の項目については一定の成績であった。模擬試験では全国的にも成長発育に絡む基礎項目の得点が低い傾向にあった。あらためて自習時間の拡充が必要と考える。講義については、基本事項の復習を中心に必修での取りこぼしを防ぐよう説明してきたが、「聞いたことがある」と考えて講義中に理解することを放棄しているような学生がいたことは残念である。

3) 改善方策

学生からは概ね良好な意見を聞き、卒業生からも内容の問題点はなかったと評されたが、継続して他大学の状況を情報収集する。教科書は他大学でも使用しており、複数教科書の内容を資料に組み込んでいるが、あらためて資料の見直しを図る。関連他科と共通する項目は特に重複してもよいので復習させる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

歯科医師国家試験問題を用いて練習問題として解かせ、その後に復習講義と正答を導くための項目や正解の説明を行っている。重要ポイントは複数回指摘し、臨床実地問題のためにも写真を活用して重要項目を記したプリントを配布した。特に重要な点はあらためて板書し図を描きながら学生自身にも確認させて授業を進めた。できるだけカラー画像を用いた。

2) 自己点検・評価

講義に対して内容の理解はされていると感じるが、試験の時まで定着できていない学生がおり、成績の振るわない者は特に基本的事項の知識が不足していることから、模擬試験での基礎項目得点が伸び悩んだ。教科書図表などから国家試験問題が出題されているため、視覚資料の提示・確認を勧め、理解を深めさせた。

3) 改善方策

適宜、理解不足な事柄を聴取し、図表を用いて重要事項(ポイント)の指摘をさらに充実させる。難しい問題よりも基本必修問題の正答率を上げられるよう、復習を徹底させる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

卒業試験の正答率は比較的高く、国家試験問題の水準に近いと考える。採点基準は試験委員会の判断で行われている。

2) 自己点検・評価

卒業試験の正答率平均は合格基準より上で比較的成績は良かったが、大学の国家試験結果は残念だった。小児歯科の正答率は比較的高い問題が多かったものの、何度も説明した問題で間違える者への手当てが必要である。

3) 改善方策

さらに1問でも必修や一般問題での取りこぼしを防げるよう、あらためて基礎的知識の積み上げのため、国家試験問題や模擬試験も参考にしつつ、問題を作成し解説と共に精度を上げられるよう努める。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科放射線学	第6学年
科目責任者(記載者)	原田卓哉	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

正解率は70%以上を維持している。

2) 自己点検・評価

長所: 模試の復習をしている点。

問題点: 基礎の重要なところを教えてほしい。

3) 改善方策

長所を伸ばすための方策: 模試の解説をする。

問題点を解決していくための方策: 基礎の重要なところを教える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

模試の復習をしている。

2) 自己点検・評価

長所: 模試の復習をしている点。

問題点: 基礎の重要なところを教えてほしい。

3) 改善方策

長所を伸ばすための方策: 模試の解説をする。

問題点を解決していくための方策: 基礎の重要なところを教える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

正解率は70%以上を維持している。評価方法は妥当と思われる。

2) 自己点検・評価

長所: 模試の復習をしている点。

問題点: 基礎の重要なところを教えてほしい。

3) 改善方策

長所を伸ばすための方策: 模試の解説をする。

問題点を解決していくための方策: 基礎の重要なところを教える。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	総合臨床医学	第6学年
科目責任者(記載者)	馬場 優	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床歯学の土台となる外科学・内科学・耳鼻咽喉科学の内容を概観し、病の病態、診断、治療に関する知識を習得する。具体的には、医の倫理について説明できる。インフォームド・コンセントについて説明できる。医療安全の意義について説明できる。主要な症候と対処法について列挙できる。疾患の診断と治療について説明できるを到達目標にし、3年生全員が到達目標に達した。(全員が定期試験にて65点以上を取得した。)

2) 自己点検・評価

3年生全員が到達目標に達したということは、私が、そのように導いたということですので、自己点検としては「良」である。

3) 改善方策

特になし

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

国家試験の出題基準にのっとり、教育を行っている。

2) 自己点検・評価

国家試験の出題基準にのっとり、教育を行い、さらに最近の国家試験を参考に、定期試験を作成し、その結果受験生全員が65点以上取得したので、「良」である。

3) 改善方策

学生の意見を参考にさらなる教育方法の改善を図っていく予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験で評価する。評価基準:65点以上を合格とする。追・再試験は各々1回のみとする。追・再試験において65点以上を合格とする。なお追々試験および再々試験は行わない。

2) 自己点検・評価

問題点は特になし。

3) 改善方策

特になし。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医療倫理学	第6学年
科目責任者(記載者)	長岡正博	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

目標として、医療行為の特殊性の理解・全ての医療従事者の職業上の義務・社会における医療のあり方・問題解決のための具体的指針を考えることができるようになるを設定したが、医療の特殊性を鑑み高い倫理観が必要とされることは理解して頂いたと考えている。しかし、第6学年という時期であることもあり国家試験において出題頻度を基準に見られていないように感じた。

2) 自己点検・評価

一般的な倫理と医療倫理の違いを医療の特殊性を解説した上で、その必要性を理解し習得して頂いたと考えている。

国家試験の出題頻度をベースとして今までの出題されていないが規定されている内容を丁寧に解説したが、過不足なく取り上げることが心掛けたことが、「簡単なことを大変難しく説明されて…」という授業評価になったと思う。

3) 改善方策

6学年という時期を考えると国家試験の出題頻度をベースに構成することは間違っていないと思うが、今まで出題されていないが重要な内容の取り上げ方に気を遣う必要性を感じた。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義形式としてはスライドに原則や宣言等の全文を提示し、配布資料としてその宣言における重要な項目を解説するような構成で作成している。配布資料に載せる項目を国家試験・模試の出題頻度をベースに選択しているが知識のこぼれがないようにスライドをで全文を表示している。

2) 自己点検・評価

表示されているスライドと配布されている講義資料が同一でない点に関しては学生から賛否両方の意見を頂いている。補足として口頭で追加する内容に関して、配布資料に含むべきか否か判断に迷うことがある。

3) 改善方策

講義内容に適した講義形式(スライドの活用や板書など)を用いて丁寧に伝える。丁寧に解説することを心掛けすぎると「簡単なことを難しく伝わってしまう」ことがあるので注意が必要である。国家試験の出題した内容とこれまでは出題されていないが重要な内容を項目ごとに示して解説していくことで重要度を理解してもらえると考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実力試験・卒業試験などの評価で問題となる正答率ではない。

2) 自己点検・評価

実力試験・卒業試験で問題となる正答率ではないが、100%に近づける努力が必要だと考えている。

3) 改善方策

講義で重要な事柄に対する焦点の当て方、試験問題を作成するにあたり言い回しなどに改善の余地があると考えている。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科麻酔学	第6学年
科目責任者(記載者)	山崎信也	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験に合格するために、という一般目標に沿ってカリキュラムが組まれた。

2) 自己点検・評価

第6学年は現役85名でスタートした。途中で休学者が1名出たため、最終的に、国家試験出願は84名であった。3回の卒業試験で平均70%以上が合格と判定され、卒業試験の合格基準に達した48名(57%)が国家試験を受験した。現役の国家試験合格者は31名(65%)であった。私立平均が75%であることを考えると、10%足りないが、改善傾向にある。

3) 改善方策

現在のカリキュラムは良い部分も多く、安定してきているので、このカリキュラムを更に改良し安定させ、改良すべき点は改良し、充実させていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実力試験で成績不良の学生は土曜日の確認試験を義務づけ、7限目はzoomでフィードバック講義を行った。

2) 自己点検・評価

上記の方策は有効であったと思われ、継続する。

3) 改善方策

コロナ関係での欠席は公欠扱いににされるということから、全体として、曖昧な欠席が多くなった可能性がある。来年度は、体調不良時に関する何らかの取り決めが必要と思われる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

3回の卒業試験の平均が70点以上を合格とした。

2) 自己点検・評価

学生に疑義を提出させている。不適當問題については科目担当者の判断で全員正解としていた時期もあったが、この操作は、結果的には65点程度の合格ラインとなってしまい、それが、国家試験合格率の低下を招いてきた可能性があった。2022年度は、国家試験同様に、不適當問題は削除として処理した。その結果、全国平均に近づいた可能性がある。

3) 改善方策

今後も、卒業試験の疑義についての不適當問題の処理は、全員正解としてはならないと考える。また、全科目で、必修問題の質も上げていかなければならない。また、2024年度は、卒業試験合格基準を、3回の卒業試験の平均点を72%に引き上げる予定である。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	高齢者歯科学	第6学年
科目責任者(記載者)	鈴木 史彦	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

高齢者歯科学は臨床総合講義の一環として、国家試験出題基準に関わる内容について学習する。年間42コマ実施する。

2) 自己点検・評価

シラバスの内容に沿って授業を実施した。長所は授業の開始時に「今回の重要3項目」を提示することで、その回で学習すべき内容のコアとなる部部を明確にしたことである。問題点は、1時限のなかで内容が多い回の際に、後半で十分な説明ができないことがあった点である。

3) 改善方策

国家試験の出題基準が更新されたことを踏まえて、今まで実施してきた重要項目と、これから教育すべき内容について乖離が内容に確認しながら、わかりやすい授業を継続していきたい。また、使用している教科書も改訂となるため、新しい情報に対応できるように、これまでの講義内容を見直してアップデートしていく予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

前回の授業の復習をするために、最初にGoogleフォームを用いた確認テストをしている。結果がすぐにグラフで反映されるため、授業内容に対する学生の理解度の確認にもなる。授業は使用している教科書をもとに、内容をまとめた講義資料とスライドを用いて実施している。また、その回と関連する歯科医師国家試験、医師国家試験、歯科衛生士国家試験の過去問題を練習問題として説き方を解説している。

2) 自己点検・評価

講義資料は単にパワーポイントのスライド一覧ではなく、ワードファイルにしたものを別途準備し、字が読める資料を心がけている。Googleフォームでの確認テストにより、リアルタイムで作成される正答率グラフをもとに解説することで、双方向性も確保している。スライドには適宜動画を挿入することで、わかりやすいように工夫している。内容が多い場合に、授業の後半で説明が不足することが問題点である。

3) 改善方策

3時限続きの講義であるため、不足した場合は次の時間の開始時につなげるようにしているが、1回の講義で内容が多いものに関しては、内容を2回に分けて実施するような見直しが必要と考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

卒業試験3回において、卒業試験委員会から割り当てられたオリジナル問題を作問している。そのため、単科での成績評価は実施していない。

2) 自己点検・評価

各回の卒業試験後に、学生からの疑義を受け付けている。また、正答率や識別指数を参考にすることで、作成した問題が適切であったのかの見直しをしている。

3) 改善方策

正答率や識別指数の低い問題については、ブラッシュアップしていくことで良問が作成できるように改善していく予定である。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	障害者歯科学	第6学年
科目責任者(記載者)	佐々木重夫	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

授業範囲が広いため、2021年度と同様に第4学年時の確認から始め、歯科医師国家試験に沿う内容を意識した。

2) 自己点検・評価

広い授業範囲であるため、理解しやすく内容を絞ることを念頭に置いた。

3) 改善方策

第6学年は他の科目も含め、勉強量も膨大となるため、より重要な項目に焦点を当てるようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

2021年度より多く歯科医師国家試験問題を配付プリントに盛り込み、幅広く歯科医師国家試験に対応できるようにした。

2) 自己点検・評価

配付プリントに視覚素材を増やしたがより多くして欲しいとの意見もあり改善が望まれた。

3) 改善方策

患者の視覚素材は幼少期のものが多く、成人障害者に対する臨床の場で視覚素材の確保は難しいと思われるが、増やす努力をする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

2021年度同様、第1～3回の卒業試験は必修6題、総論6題、各論6題、臨床実地問題6題の合計24題であったが、前年度より全問題において正答率が高い傾向にあった。

2) 自己点検・評価

2021年度に比較すると受験者からの疑義の申し出が少なかった。

3) 改善方策

2021年度同様、受験者からの疑義の申し立てによって採点等の変更があった場合は学習者が混乱しないように解説を講義室に掲示した。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	公衆衛生学・口腔衛生学	第 6学年
科目責任者(記載者)	廣瀬公治	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

公衆衛生学・口腔衛生学領域の要点を理解し、歯科医師国家試験に対処できる学力を修得することを到達目標としている。

2) 自己点検・評価

到達目標は明確であり評価する。

3) 改善方策

現状を維持する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

歯科医師国家試験問題のうち、特に重要な問題を例示し、その正解までの道のを解説する講義を実施した。

2) 自己点検・評価

歯科医師国家試験のみならず、医師国家試験、管理栄養士国家試験などの問題を例示し、要点に絞った講義をしたことは評価できる。また、昨年度の反省から、例示問題数を減少させたことは評価する。しかし、例示問題から外れたマイナーな領域が疎かになったことは改善が必要である。

3) 改善方策

配布する資料の内容をより洗練させ、必須の内容を網羅できるような講義を実施する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

卒業試験で評価している。

2) 自己点検・評価

卒業試験での平均点は70点前後で正答率・識別指数も良好である。

3) 改善方策

現状を維持する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	社会歯科学	第 6学年
科目責任者(記載者)	南 健太郎	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師として、必要な法的知識、社会保障制度、社会の変化やニーズに対応させ、かつ、国家試験合格を目標としたオリジナル問題を作成して解かせる講義スタイルとした。

2) 自己点検・評価

社会歯科学の国家試験の結果から、この講義スタイルを継続することが最善である。

3) 改善方策

次年度もこの方法で行う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生が歯科医師として稼働するために必要な法的知識と社会制度を学習するため、講義冒頭にオリジナル問題を解かせ、その後解説する講義スタイルとした。また問題には毎回、目標点を設定し、学習しやすいようにした。オリジナル問題は昨年作成したものを改変して出題した。

2) 自己点検・評価

今年度の学生からは、オリジナル問題についての評価は特になかった。学生によって評価の差があると考えた。

3) 改善方策

次年度も、オリジナル問題を改変し、良問を作成して国家試験合格に結びつく問題を作成していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

合計3回の卒業試験で判定。

2) 自己点検・評価

各卒業試験で、正答率が80%前後で推移している。試験問題の難易度は妥当と考える。極端に正答率が悪い問題もなかった。

3) 改善方策

良問をこれからも作成して、卒業試験の精度を向上させる。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔外科学	第6学年
科目責任者(記載者)	高田 訓	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

口腔外科領域の中でも、各分野を得意とする講師がいるので、講義ローテーションを工夫し、学生自身のモチベーションを上げることができた。

2) 自己点検・評価

十分講義できた。

3) 改善方策

復習が主体となる講義なので、講義内容をローテーションさせながら、学生の向上心を保つ。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

紙媒体を配布し、スライドによる対面講義を主体とした。

2) 自己点検・評価

学生の集中力を欠かさないう講義を進行できた。

3) 改善方策

このまま継続する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実力試験と卒業試験の結果がリンクし、右肩上がりの学生は、卒業と国家試験の合格が期待できる。

2) 自己点検・評価

卒業試験と国家試験をリンクできた。

3) 改善方策

このまま継続する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔内科学	第6学年
科目責任者(記載者)	高田 訓	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

シラバス通り進めることで、実力試験で学力を確認させられた。
客員教授と非常勤講師の講義により、学生のモチベーションを保つことができた。

2) 自己点検・評価

復習がメインであるので、その点は十分講義できた。

3) 改善方策

学生自身のモチベーションを保つために、他大学の客員教授や非常勤講師の講義は欠かせない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

紙媒体を配布し、スライドによる対面講義を主体とした。

2) 自己点検・評価

学生の集中力を欠かさないう講義を進行できた。

3) 改善方策

このままの学習方法を継続する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実力試験と卒業試験の結果がリンクし、右肩上がりの学生は、卒業と国家試験の合格が期待できる。

2) 自己点検・評価

卒業試験と国家試験をリンクできた。

3) 改善方策

このまま継続する。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	災害歯科医学	第6学年
科目責任者(記載者)	板橋 仁	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験に合格するため、国家試験出題基準に関わる全ての内容を理解し、卒業する。

2) 自己点検・評価

講義・卒試に出した関連問題が第116回国家試験で出題され、高い正答率を得た。一方で、講義・卒試で確認しているにも関わらず、正答率が伸びない問題があった。

3) 改善方策

目先を少し変えられても正解が導ける様に、講義の中で繰り返し解説をする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

カリキュラムに沿った内容に関連する国家試験問題について解説し、理解を深める

2) 自己点検・評価

昨年度の改善点としてレジュメをより細かく分けて配布したが、それでもレジュメに関する不満があった。「(国試にとって)無駄な講義である」との意見からは、流石にショックを隠すことができなかった。「外部講師の講義は良かった」との意見から、岩原教授を招聘したことは間違いなかったと確信した。

3) 改善方策

次年度は、レジュメは毎回渡す形に変更する。
第116回国試では、授業でやった問題が的中したのだが、気を取り直して講義を続け、学生が興味を持つ様なアプローチを検討する。
次年度も引き続き岩原教授に講義をお願いする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

卒業試験で評価する。3回の卒業試験にそれぞれ2問ずつ出題。

2) 自己点検・評価

間違わなくて良い問題を間違っている所がある。「勘違い」や「早とちり」がある様に思う。

3) 改善方策

講義の中で「選択肢の内容をしっかりと吟味して解答を導くこと」について、更に指導をしていく。

2022年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科医療管理学	第6学年
科目責任者(記載者)	大橋明石	

調査実施年月:2023年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

予備校模擬試験、卒業試験、国家試験の結果を見る限り、シラバス記載の【一般目標】および【到達目標】を達成出来ていると思われる。

2) 自己点検・評価

現在の授業スタイルは、シラバス記載の【一般目標】および【到達目標】を達成する方法として、間違っていないと思われる。

3) 改善方策

学生から上がった要望・改善要求等が、真に必要なことなのか・真に正しいことなのかをしっかりと吟味した上で、しっかりと授業にフィードバックさせる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生による授業評価・アンケート結果および予備校模擬試験、卒業試験、国家試験の結果を見る限り、現在の教育方法は間違っていないと思われる。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価・アンケート結果および予備校模擬試験、卒業試験、国家試験の結果を見る限り、現在の教育方法は間違っていないと思われる。

3) 改善方策

学生から上がった要望・改善要求等が、真に必要なことなのか・真に正しいことなのかをしっかりと吟味した上で、しっかりと授業にフィードバックさせる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

予備校模擬試験、卒業試験、国家試験の結果を見る限り、現状で問題ないと思われる。

2) 自己点検・評価

予備校模擬試験、卒業試験、国家試験の結果を見る限り、現状で問題ないと思われる。

3) 改善方策

一人でも多くの学生が国家試験に合格できるよう、1問でも多くの問題に正解できるよう、得点アップに繋がるよう、更に授業の質を高める。